

茨城県教育財団文化財調査報告第331集

北田遺跡 2

主要地方道石岡筑西線道路整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 22 年 3 月

茨城県筑西土木事務所
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第331集

北^{きた}田^だ遺跡 2

主要地方道石岡筑西線道路整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 22 年 3 月

茨城県筑西土木事務所
財団法人茨城県教育財団



第29号住居跡炉遺物出土状況



第11号住居跡竈遺物出土状況

序

茨城県においては、21世紀の社会を展望し、産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と、県全域にわたる調和のとれた発展を図るために、県内の交通体系の整備が進められています。

その一環として、茨城県筑西土木事務所において、交通体系の整備と県土の一体的な振興を図ることを目的に、主要地方道石岡下館線道路改良事業(現主要地方道石岡筑西線道路整備事業)が計画されました。

しかしながら、この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である北田遺跡が所在することから、これを記録保存の方法により保護する必要があるため、当財団が茨城県筑西土木事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成13年11月からこれを実施しました。そのうち、平成13年度中に実施した調査の成果については、既に『文化財調査報告第206集』として平成15年3月に刊行したところです。

本書は、平成19年11月から12月までの2か月間にわたる調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県筑西土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、桜川市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成22年3月

財団法人茨城県教育財団
理事長 稲葉節生

例 言

- 1 本書は、茨城県筑西土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成19年度に発掘調査を実施した、茨城県桜川市真壁町山尾字中坪767番地の2ほかに所在する北田遺跡^{きただ}の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調査 平成19年11月1日～12月31日
整理 平成21年1月1日～3月31日
平成21年7月1日～9月30日
- 3 発掘調査は、調査課長瓦吹堅のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長	川村満博	
主任調査員	花見勝博	平成19年11月1日～11月30日
主任調査員	寺内久永	平成19年12月1日～12月31日
主任調査員	杉澤季展	
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、主任調査員小川貴行が担当した。

凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、 $X=+29,880\text{m}$ 、 $Y=+24,960\text{m}$ の交点を基準点(A 1a1)とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」、「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」、「B 2b2区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SI—住居跡 SF—道路跡 SK—土坑 HG—遺物包含層 R—流路跡
遺物 P—土器 TP—拓本記録土器 DP—土製品 Q—石器・石製品
土層 K—攪乱

- 3 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 4 遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は400分の1、遺構実測図は原則として60分の1の縮尺で掲載した。
- (2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土・施釉  炉・竈火床面・繊維土器断面
 竈部材・粘土・黒色処理
● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 ----- 硬化面

- 5 遺物観察表・遺構一覧表の表記については次のとおりである。

- (1) 遺物番号は通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。
- (2) 計測値の()内の数値は現存値を、[]内の数値は推定値を示した。計測値の単位は、m, cm, gで示した。大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に単位を表示した。
- (3) 備考欄は、土器の現存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

- 6 堅穴住居跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した(例 $N-10^{\circ}-E$)。

- 7 遺構番号については、各遺構毎に既調査時の最終番号の次から付した。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
北田遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 縄文時代の遺構と遺物	10
(1) 竪穴住居跡	10
(2) 土坑	35
(3) 遺物包含層	44
2 古墳時代の遺構と遺物	65
(1) 竪穴住居跡	65
(2) 土坑	81
3 その他の遺構と遺物	82
(1) 道路跡	82
(2) 流路跡	83
(3) 土坑	84
(4) 遺構外出土遺物	85
第4節 まとめ	86
写真図版	
抄 録	
付 図	

北田遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

北田遺跡は、桜川市（旧真壁町）を南北に流れる桜川の左岸、筑波山地の西麓に位置しています。主要地方道石岡筑西線の道路整備事業にともない、遺跡の内容を記録して保存するため、茨城県教育財団が平成13年度の第1次調査に続き、平成19年度に第2次調査を行いました。

調査の内容

今回の調査では、縄文時代中期から後期（約4,000年前）、古墳時代後期（約1,400年前）の集落跡が、それぞれ確認できました。

縄文時代の集落跡からは、石組炉を持つ堅穴住居跡5軒が見つかります。石組炉は、住居の中央部に設置され、真壁の特産として知られる花崗岩を使って作られています。また、古墳時代の堅穴住居跡では、補強材として花崗岩が使われている竈が見つっています。縄文時代の住居跡から出土した調理具と考えられる石皿や凹石にも花崗岩が使われています。真壁の人々は、昔から特産の石とともに生活してきたことがわかります。



南方上空から当遺跡と真壁城跡を望む（平成14年撮影）



わき水が多く、ポンプで水を抜きながら作業をしました。縄文時代の竪穴住居跡を調査しています。



縄文時代の石組炉です。写真の炉跡は、石の下から多量の土器片が出土しました。



古墳時代の竈にも、花崗岩が使われていました。当遺跡では、3軒の住居跡で確認されました。



奥に見えるのが真壁城跡です。城跡へまっすぐ伸びる道は、城へ通じる道であったと考えられます。

調査の成果

縄文時代の集落跡から見つかった竪穴住居跡の多くは、石組炉を使用していました。縄文時代の中期には、様々なタイプの炉が作られるようになります。床を掘って作った地床炉に、炉のまわりに石を並べた石組炉（石囲炉）、土器を埋めた土器埋設炉、土器片を利用した土器片組炉（土器片囲炉）が主な炉のタイプです。石組炉は、県北部や隣接する栃木県南部で多く確認されていますが、県南部ではあまり見つかりません。このことから、県北部や栃木県南部といった地域との交流が想定されますが、当地が石材の産地であることも、石組炉が多く使われた理由の一つと考えられます。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成12年6月1日、茨城県下館土木事務所長（現茨城県筑西土木事務所長）から茨城県教育委員会教育長あてに、主要地方道石岡下館線道路改良事業（現主要地方道石岡筑西線道路整備事業）地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。これを受けて茨城県教育委員会は平成12年10月20日に現地踏査を行い、平成12年12月4・5日、平成18年10月19日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成13年1月17日、平成18年11月20日、茨城県教育委員会教育長は茨城県下館土木事務所長（現茨城県筑西土木事務所長）あてに、事業地内に北田遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成13年2月20日、茨城県下館土木事務所長（現茨城県筑西土木事務所長）から茨城県教育委員会教育長あてに、北田遺跡について文化財保護法第57条の3（現第94条）の規定に基づく土木工事の通知が提出された。平成13年3月2日、茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、茨城県下館土木事務所長（現茨城県筑西土木事務所長）あてに、工着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成13年3月23日、平成19年2月26日、茨城県下館土木事務所長（現茨城県筑西土木事務所長）から茨城県教育委員会教育長あてに、主要地方道石岡下館線道路改良事業（現主要地方道石岡筑西線道路整備事業）に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書が提出された。平成13年3月26日、平成19年2月27日、茨城県教育委員会教育長は茨城県下館土木事務所長（現茨城県筑西土木事務所長）あてに、北田遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県下館土木事務所長（現茨城県筑西土木事務所長）から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、北田遺跡を平成13年11月1日から平成14年2月28日（第1次調査）、平成19年11月1日から12月31日（第2次調査）まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

平成19年度の調査は、11月1日から12月31日までの2か月にわたって実施した。以下、その調査経過について、工程表で示す。

工程	期間	11月		12月	
		1	2	1	2
調査準備 表土除去 遺構確認		■			
遺構調査		■	■	■	
遺物洗浄 注記作業 写真整理			■	■	
補足調査 撤収					■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

北田遺跡は、茨城県桜川市（旧真壁郡真壁町）真壁町山尾字中坪767番地の2ほかに所在している。

桜川市は、茨城県の西部に位置し、北部には鷗足山塊の富谷山、高峯山、南部から西部にかけては筑波山塊の筑波山、加波山、雨引山があり、周囲を八溝山系の山々に囲まれている。市の中央部を南西に流れる桜川には、観音川や山口川をはじめとする多くの支流が集まり、霞ヶ浦に流入している。

市域の多くは、桜川と小貝川に挟まれた洪積台地である真壁台地と桜川の浸食・堆積作用で形成された桜川低地からなっている。当遺跡の位置する旧真壁町の地形は、東から筑波山塊、筑波山塊西縁丘陵、山麓緩斜面、筑波山塊西縁台地、桜川低地、真壁台地と分けることができる。筑波山地を構成する岩石の主たるものは、花崗岩である。花崗岩山地の山麓部では、山麓緩斜面が広く発達しており、その構成層は、一般にやや厚く堆積した、花崗岩の巨礫層である¹⁾。

当遺跡は、桜川市の南部に位置し、桜川左岸の標高44～46mの山麓緩斜面の裾部に立地している。調査前の現況は、水田及び道路であった。

第2節 歴史的環境

当遺跡が所在する桜川流域には数多くの遺跡が所在し、特に古墳及び古墳群が数多く確認されている。ここでは、遺跡の所在する真壁地区の遺跡を中心に概要を記述する。

旧石器時代の遺跡は少なく、遺構や出土状況が明確ではないが、南椎尾小山遺跡²⁾から頁岩製のナイフ形石器、隣接する南椎尾八幡前遺跡³⁾からチャート製の尖頭器、頁岩製の石核が出土している。

縄文時代の遺跡では、熊の宮遺跡⁴⁾<18>で草創期の徳系文系土器が確認されている。早期の遺跡では、山麓緩斜面に立地する御祓立場遺跡⁵⁾<7>から、戸田下層式土器と茅山下層式土器が確認されている。他に源法寺遺跡⁶⁾<15>、熊の宮遺跡などが当該期にあたる。前期になると遺構数は増加し、遺構は確認されていないが、御祓立場遺跡、源法寺遺跡、南椎尾小山遺跡、南椎尾八幡前遺跡、吾妻塚遺跡<11>などで、当該期の土器が確認されている。中期の遺跡は、御祓立場遺跡、南椎尾小山遺跡、南椎尾八幡前遺跡、白井遺跡<21>、大夫台遺跡、長岡遺跡<20>、下谷貝遺跡<12>、中坪遺跡<2>、高内遺跡などである。当遺跡でも、平成13年度に行われた第1次調査で、阿玉台式期～加曾利E式期の堅穴住居跡6軒が確認されている⁴⁾。後・晩期の遺跡は、高内遺跡、下谷貝遺跡、中坪遺跡などである。高内遺跡からは、1片のみながら晩期の大洞式土器が出土している⁷⁾。

弥生時代の遺跡では、熊の宮遺跡で2軒、南椎尾小山遺跡で4軒、後期の堅穴住居跡が確認されている。

古墳時代の遺跡は、真壁地区では古墳及び古墳群が数多く確認されているが、集落の調査事例は少ない。古墳では、加波山西麓に、若林古墳群、弁天塚古墳、車塚古墳、十石塚古墳、隠坊塚古墳、白井中坪古墳群<22>、端上古墳群<23>がある。筑波山北麓には、おふじ権現古墳、吾妻塚古墳<10>、平塚古墳<9>、北椎尾天神塚古墳⁸⁾、仙原塚古墳、北原古墳、大柳古墳、松石古墳群、羽鳥天神塚古墳<13>、元寺家古墳群、南椎尾小山遺跡がある。観音川流域には、原方円鏡古墳<19>、八幡山古墳、鹿島神社古墳群、鹿島宮古墳があ

り、3群に大別することできる。北椎尾天神塚古墳は中期（5世紀中葉）の円墳で、二つの粘土層の埋葬施設からは、鉄鏝、鉄鉾、大刀、鉄剣、鉄斧と共に、県内で初例となる三角板葺衝角付冑が出土している。南椎尾小山遺跡からは、平成5年度に当財団によって行われた調査によって、後期の古墳1基が確認されている。

集落は、熊の宮遺跡で4軒（中期）、南椎尾小山遺跡で1軒（前期）、南椎尾八幡前遺跡で26軒（中～後期）の竪穴住居跡が確認されている。当遺跡では第1次調査にて、後期の竪穴住居跡13軒が確認されている。なお、南椎尾八幡前遺跡からは、6世紀前半に位置付けられる置き竈が出土している。

奈良・平安時代には、当遺跡の周辺は真壁郡（白壁郡）真壁郷に属しており、寺院跡や城館跡が確認されている。寺院跡では、山尾権現山廃寺跡<5>、下谷貝廃寺（谷貝廃寺跡）、源法院廃寺（源法寺廃寺跡）がある。これらの寺院跡は、筑波山の山岳信仰との関わりが考えられ、修験道の拠点として建立されたものと考えられる。山尾権現山廃寺跡では、昭和55年に確認調査が実施されており、中門・金堂・講堂・塔といった主要伽藍の礎石が確認されている。城館跡では、平良兼の館とされる平良兼館跡<6>がある。集落は、熊の宮遺跡で1軒（奈良時代）、南椎尾小山遺跡で4軒（平安時代）、南椎尾八幡前遺跡で3軒（平安時代）の竪穴住居跡が確認されている。当遺跡でも第1次調査にて、平安時代の竪穴住居跡2軒が確認されている。

中世には、真壁城<3>を中心に城館が築かれている。真壁城関連城館としては、椎尾城跡、瑠世城跡<16>、龜熊城跡<17>、谷貝城跡、谷貝峯城跡、大島城跡（つくば市）などがある。真壁城については、1174（承安3）年に多気重幹の四男真壁六郎長幹が真壁に入部したとされるが、築城された時期は不明である。真壁城を居城とした真壁氏は、戦国期には佐竹氏との結びつきを強め、やがて家臣団に組み込まれていくが、1602（慶長7）年に佐竹氏の出羽国への配置替えに伴い、十七代房幹も出羽角館に移された。近世においては、真壁城も廃城となった。

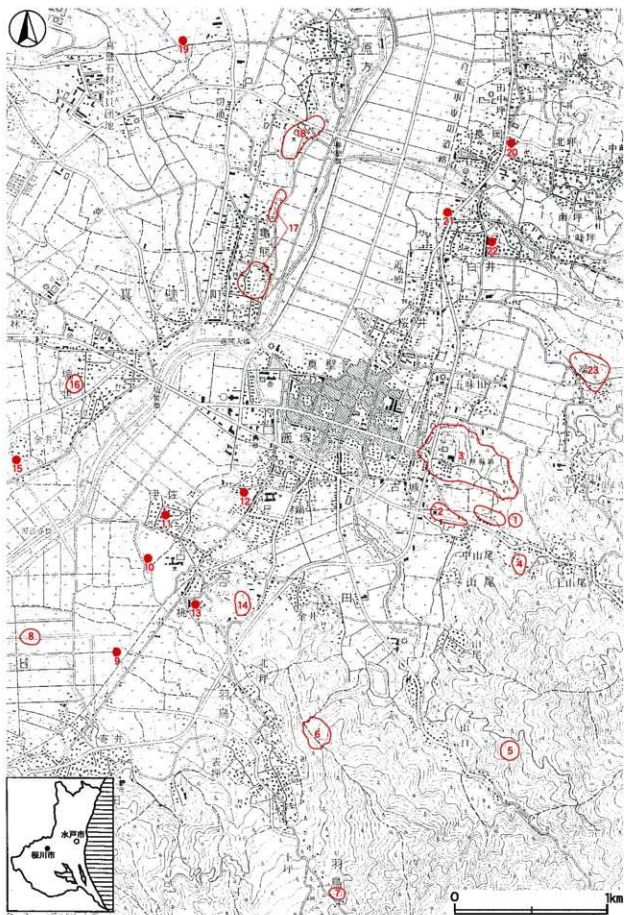
※文中の（ ）内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

注

- 1) 茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 真壁』1983年1月
- 2) 吹野富美夫（仮称）真壁町南椎尾地区住宅団地事業地内埋蔵文化財調査報告書 小山遺跡・八幡前遺跡『茨城県教育財団文化財調査報告』第99集 1995年3月
- 3) 注2）と同じ
- 4) a 長岡芳・川崎純徳『熊の宮遺跡発掘調査報告書』真壁町教育委員会 1984年3月
b 川崎純徳『真壁町史料 考古史料編Ⅳ 一 縄文時代遺跡一』真壁町 2000年3月
- 5) 長岡芳『真壁町史料 考古史料編Ⅰ』真壁町史編纂委員会 1980年10月
- 6) 黒澤秀雄「北田遺跡 主要な地方道石岡下館線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第206集 2003年3月
- 7) 注4）bと同じ
- 8) 川崎純徳「北椎尾天神塚古墳とその時代 ふるさと真壁文庫№3」真壁町歴史民俗資料館 2001年3月
- 9) a 真壁城跡発掘調査会編『真壁城跡 一 中世真壁の生活を探る一』真壁町教育委員会 1983年3月
b 星龍象・宇留野主税・岩松和光「史跡真壁城跡Ⅰ 一 外曲輪南部の調査概要一」『史跡真壁城跡発掘調査報告』第1集 真壁町教育委員会 2004年3月

参考文献

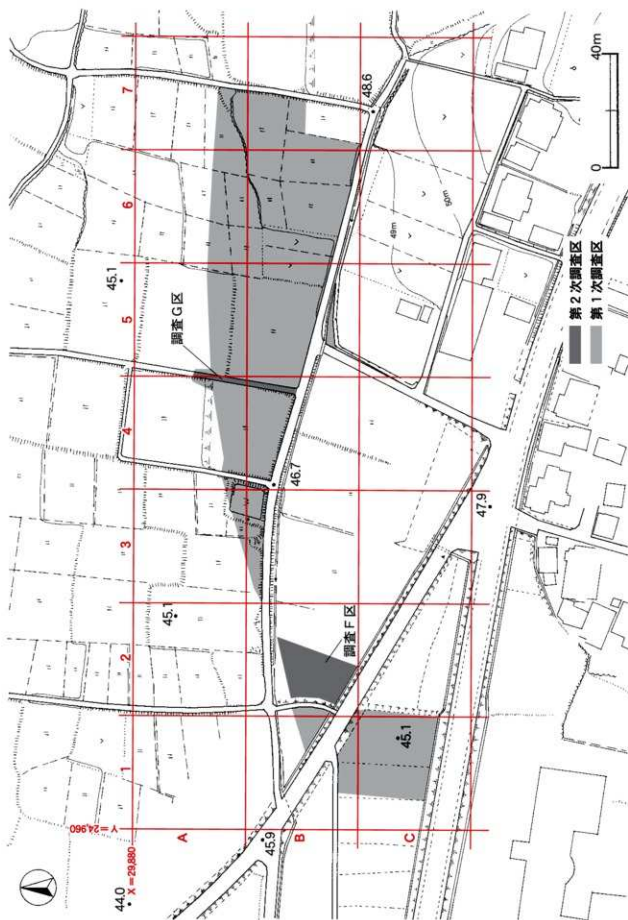
茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月



第1図 北田遺跡周辺遺跡位置図 (国土地理院 1:25,000 「真壁」「筑波」)

表1 北田遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世
①	北田遺跡		○		○	○			南椎尾八幡前遺跡	○	○		○	○		
2	中坪遺跡		○						大夫台遺跡		○					
3	真壁城跡						○		高内遺跡		○					
4	真壁氏累代墓地及び墓碑群						○		若林古墳群				○			
5	山尾権現山廃寺跡					○			弁天様古墳				○			
6	平良兼館跡					○			車塚古墳				○			
7	御祓立場遺跡		○						十石塚古墳				○			
8	粕戸遺跡		○						隠坊塚古墳				○			
9	平塚古墳				○				おふじ権現古墳				○			
10	吾妻塚古墳				○				北椎尾天神塚古墳				○			
11	吾妻塚遺跡		○						仙原塚古墳				○			
12	下谷貝遺跡		○						北原古墳				○			
13	羽鳥天神塚古墳				○				大柳古墳				○			
14	日月遺跡		○						松石古墳群				○			
15	源法寺遺跡		○						元寺家古墳群				○			
16	壩世城跡						○		八幡山古墳				○			
17	龜熊城跡						○		鹿島神社古墳群				○			
18	熊の宮遺跡	○	○	○	○	○			鹿島宮古墳				○			
19	原方円鏡古墳				○				下谷貝廃寺 (谷貝廃寺跡)					○		
20	長岡遺跡		○						源法院廃寺 (源法寺廃寺跡)					○		
21	白井遺跡		○						椎尾城跡						○	
22	白井中坪古墳群				○				谷貝城跡						○	
23	端上古墳群				○				谷貝峯城跡						○	
-	南椎尾小山遺跡	○	○	○	○	○			大島城跡 (つくば市)						○	



第2図 北田遺跡調査区設定図(「真壁町都市計画図」から作成)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

北田遺跡は、桜川市の南部に位置し、桜川左岸の標高44～46mの山麓緩斜面の裾部に立地している。調査面積は628㎡で、調査前の現況は水田・道路である。

今回の調査は、平成13年度の調査区と隣接する調査F区・G区の2か所について行った。(以下、本文中にて平成13年度に行った当遺跡の調査を「第1次調査」と呼称する。)第1次調査の結果、縄文時代から奈良・平安時代にかけての複合遺跡であることが判明している。今回の調査では、竪穴住居跡13軒(縄文時代7、古墳時代6)、道路跡1条(時期不明)、土坑12基(縄文時代5、古墳1、時期不明6)、遺物包含層1か所(縄文時代)、流路跡1条(時期不明)が検出されている。遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に76箱が出土している。遺物は、縄文土器(蓋・深鉢・浅鉢・両耳壺・ミニチュア土器・器台)、弥生土器(壺)、土師器(坏・碗・高台付碗・小皿・器台・高坏・鉢・甕・甌)、須恵器(坏・盤・高盤)、土師質土器(内耳鍋)、陶器(灯明皿)、土製品(土器片円盤・耳飾りカ・三角板状土製品)、石器(尖頭器・石錐・石鏃・打製石斧・磨製石斧・石皿・磨石・敲石・凹石・砥石)、石製品(石棒・垂飾り・切子玉)、石製模造品(白玉・双孔円板・剣形模造品カ)などである。

第2節 基本層序

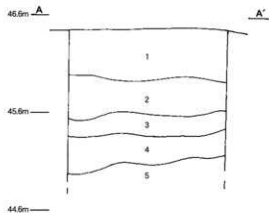
調査区は、現在は水田に利用されている調査F区と、道路として利用されている調査G区の2か所である。調査F区については、平成18年度の茨城県教育委員会が実施した試掘調査によって遺物包含層が確認されたため、調査区壁面に沿ってトレンチ(付図)を設定した。トレンチは、表土から深さ1.6mまで掘り下げ、基本土層(第3図)の観察を行った。なお、調査G区については、第1次調査にて基本土層を確認した調査D区と隣接していることから割愛した。

調査F区のトレンチでは、第1層が耕作土にあたり、層厚は50cm前後である。第1層は細分がさらに可能であり、水田耕作のための客土と考えられる土が堆積している。これらの堆積状況については、第3章第3節の「遺物包含層」の項にて掲載(第34図)の基本土層を参照されたい。第2～5層の観察結果は、以下の通りである。

第2層は黒褐色土層で、粘土粒子を中量、樹木等の植物遺体・砂粒を少量含んでいる。粘性は強く、締まりは普通である。層厚は39～48cmである。

第3層は黒色土層で、樹木等の植物遺体を少量含んでいる。粘性は強く、締まりは普通である。層厚は16～24cmである。

第4層は黒褐色土層で、樹木等の植物遺体・砂粒を



第3図 基本土層図

少量含んでいる。粘性は強く、締まりは普通である。層厚は21～38cmである。

第5層は褐色土層で、砂粒を多量に含んでいる。粘性は弱く、締まりは普通である。下層は未掘のため本来の層厚は不明である。

なお、湧水が著しく、トレンチの掘り下げは第5層までとしたが、第3～4層が縄文時代の遺物を主体とする遺物包含層と確認できた。遺構は、第3層上面から掘り込まれていることが確認できたが、遺構の覆土と遺物包含層の堆積土の差異が明確でないため、平面的に確認することが難しく、サブトレンチを設定し、遺構確認作業を行った。

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

竪穴住居跡7軒、土坑5基、遺物包含層1か所が確認できた。以下、確認できた遺構及び遺物について記述する。

なお、調査F区の遺構は、遺物包含層を掘り込んで構築されているため、覆土は明確でない。そのため、サブトレンチで確認した床面または底面を基準として、出土位置から遺構への帰属を判断した。また、湧水が著しく地盤が軟弱なため、遺物が原位置を保っていないことも考えられ、床面又は底面よりやや低い位置から出土している遺物については、時期を考慮した上で遺構への帰属を判断し、出土位置は床面または底面と表現した。

(1) 竪穴住居跡

第24号住居跡（第4～7図）

位置 調査F区南部のB2i6区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

規模と形状 南東側は調査区域外に延びているため、北西-南東径は5.33m、北東-南西径は4.18mしか確認できなかった。平面形は、径6.6mほどの円形又は楕円形と推測できる。壁は、北東壁の一部がやや外傾している以外は、ゆるやかに立ち上がっている。壁高は26～38cmである。

床 ほぼ平坦で、中央部に硬化面が認められる。また、北西壁の一部に10cmほどの高まりが確認できた。

ピット 6か所。P1～P6は深さ25～34cmで、位置と規模から柱穴と考えられる。P1・P3・P6とP2・P4には、それぞれの覆土に違いがあり、両者には時期差があるものと考えられる。

ピット土層解説

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子・砂粒微量 | 3 褐灰色 炭化粒子・砂粒微量 |
| 2 褐灰色 砂粒少量 | 4 灰黄褐色 砂粒中量 |

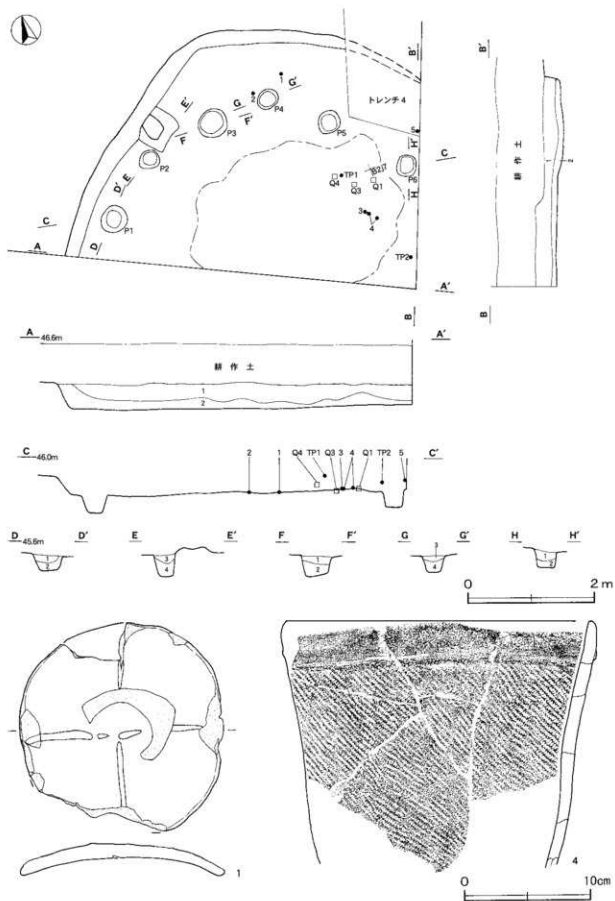
覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

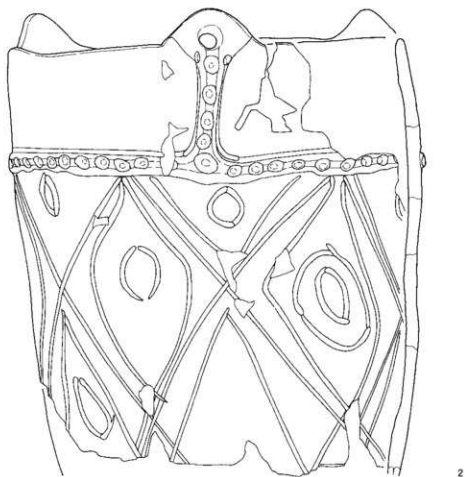
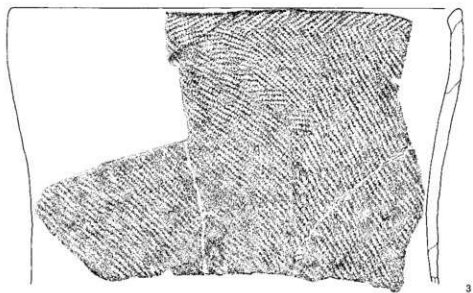
- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 樹木等の植物遺体少量、炭化粒子・砂粒微量 | 2 褐灰色 砂粒少量、炭化粒子・樹木等の植物遺体微量 |
|----------------------------|----------------------------|

遺物出土状況 縄文土器片1,379点、土製品3点（土器片円盤）、石器13点（打製石斧2、磨製石斧1、石皿3、磨石1、敲石1、凹石5）、剥片3点のほか、混入した陶器片1点が出土している。土器は細片が多く、覆土上層から床面まで散在して出土しているが、床面から出土している土器は、大形の破片が多い。3・4は中央部、2は北東壁寄りの床面から、それぞれ横位のつぶれた状態で出土している。

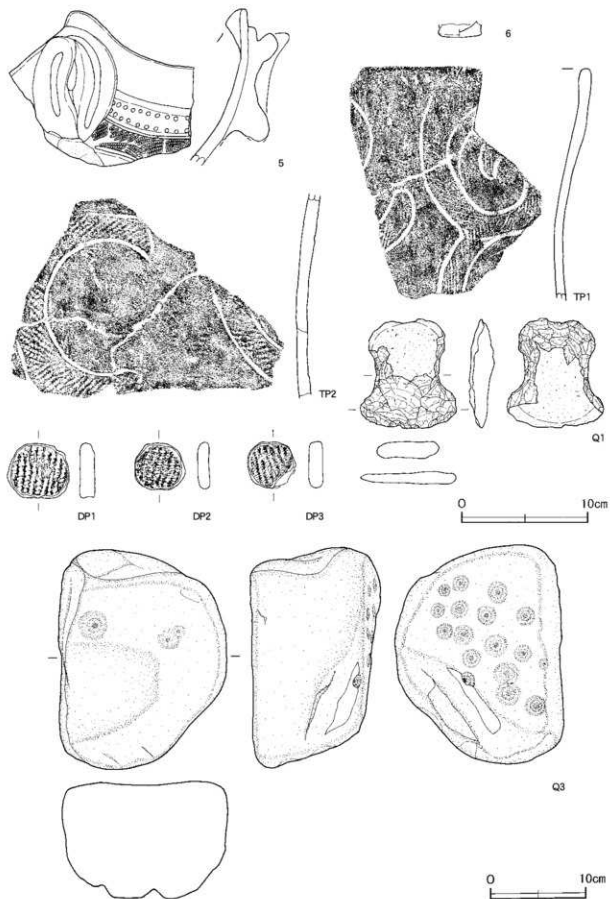
所見 時期は、出土土器から後期前葉（堀之内1式併行期）と考えられる。



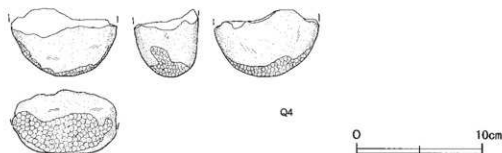
第4図 第24号住居跡・出土遺物実測図



第5图 第24号住居跡出土遺物実測図(1)



第6图 第24号居跡出土遺物実測図(2)



第7図 第24号住居跡出土遺物実測図(3)

第24号住居跡出土遺物観察表(第4～7図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	蓋	15.9	(2.4)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい・黄褐色	普通	沈線文 頂部にハダレ	床面	90%
2	縄文土器	深鉢	(30.6)	(36.9)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい・黄褐色	普通	底部部から円形の凹溝を有する隆帯を垂下させ、口縁部区画である隆帯と連結 胴部は斜位と円形の沈線文	床面	90% P.9
3	縄文土器	深鉢	(35.6)	(22.0)	—	長石・石英・雲母	にぶい・黄褐色	普通	L.Rの単筋縄文を口唇部は横位施文し、以下は縦位施文	床面	10%
4	縄文土器	深鉢	(24.2)	(19.5)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい・黄褐色	普通	口唇部に散点帯が認め L.Rの単筋縄文	床面	15%
5	縄文土器	深鉢	—	(12.4)	—	長石・石英・雲母	にぶい・黄褐色	普通	底部部直下に沈線を有する屈付文 円形刺突文を有する隆帯が認め L.Rの単筋縄文	覆土中層	5% P.10
6	縄文土器	コップ?	—	(0.9)	3.4	長石・石英・雲母	にぶい・黄褐色	普通	無文	覆土中	20%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい・黄褐色	普通	沈線による曲線的な区画文 L.Rの単筋縄文	覆土上層	P.10
TP2	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい・黄褐色	普通	沈線による曲線的な区画文 L.Rの単筋縄文	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	特徴	出土位置	備考
DP1	土器片円盤	4.2	4.9	1.2	—	33.4	両縁部研磨	覆土中	
DP2	土器片円盤	3.7	4.0	1.0	—	17.0	両縁部研磨	覆土中	
DP3	土器片円盤	3.7	3.8	1.2	—	(19.6)	両縁部研磨 一部欠損	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	打製石皿	6.7	7.6	2.1	117.5	安山岩	分割形 両面調整 表面及び裏面に粗礫面を残す	床面	P.15
Q3	石皿	23.0	17.4	13.5	(7860)	花崗岩	表面が粗状にわずかに凹凸 両石併用	床面	
Q4	礫石	(5.3)	(9.3)	(5.0)	(29.0)	安山岩	下部に敲打痕 磨石併用	覆土中層	

第25号住居跡(第8～10図)

位置 調査F区北部のB 2 d5区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第30号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 確認面が床面であったため、壁は確認できなかった。また、北側の調査区壁面の土層観察でも、掘り込みは検出されなかったが、炉と柱穴の位置から、主軸方向がN-16°-Wで、長径7.0m、短径6.2mほどの楕円形と推測できる。

床 ほぼ平坦で、炉の周囲に硬化面が認められる。

炉 ほぼ中央部に付設されていたと推測できる。径70cmほどの円形を呈する石組炉である。東側及び南側の炉石には接合関係があり、礫塊を割って設置したものと考えられる。また、一部に石皿や凹石が転用されている。炉床は床面から10cmの深さに位置する第1層下面と考えられるが、焼土や変硬化した範囲は検出されておらず、明確ではない。

伊土層解説

1 黒 色 ローム粒子・炭化粒子・鉄分微量

ピット 2か所。P 1・P 2は深さ35cm・27cmで、位置と規模及び覆土にも共通性が認められることから、柱穴と考えられる。

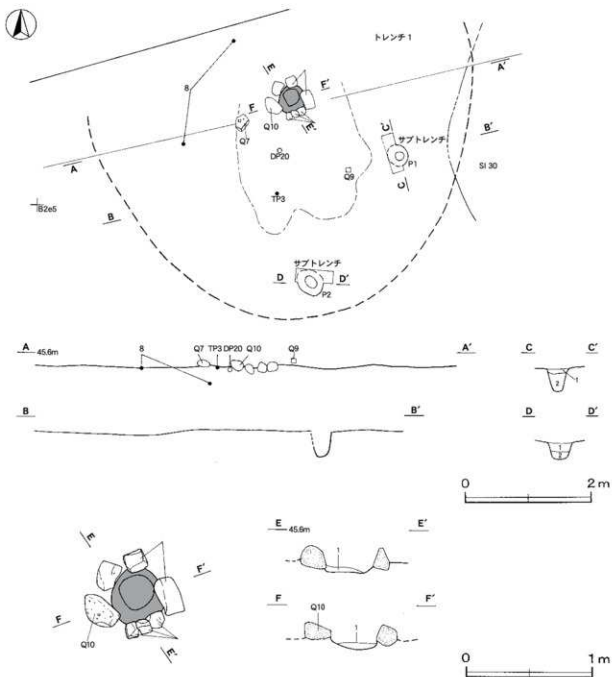
ピット土層解説

1 黒 褐色 炭化粒子・砂粒微量

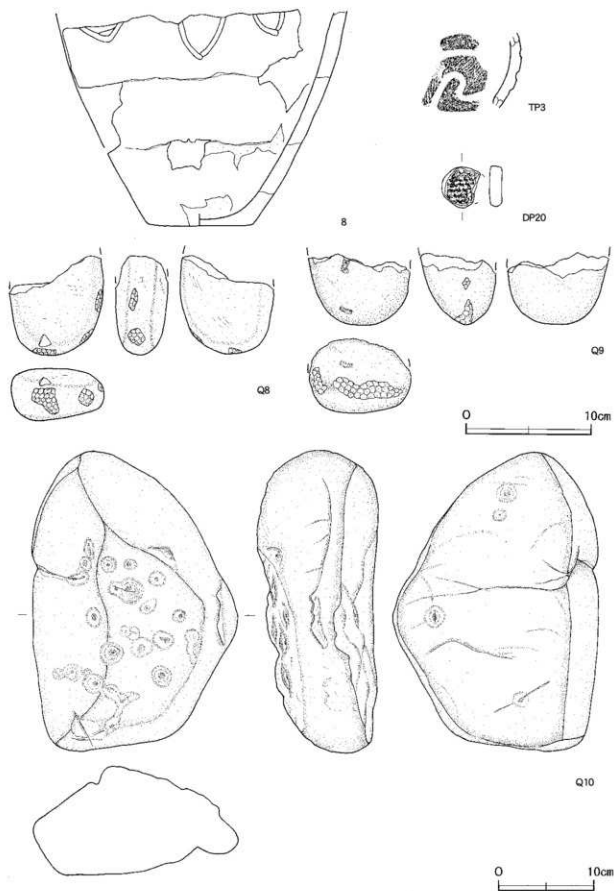
2 黒 色 砂粒微量

遺物出土状況 縄文土器片396点、土製品1点（土器片円盤）、石器18点（石皿4、磨石4、蔽石1、凹石9）が出土している。8は、炉西側の床面と北側のトレンチから、それぞれ出土している。Q10は、石組炉に使用されていた凹石である。

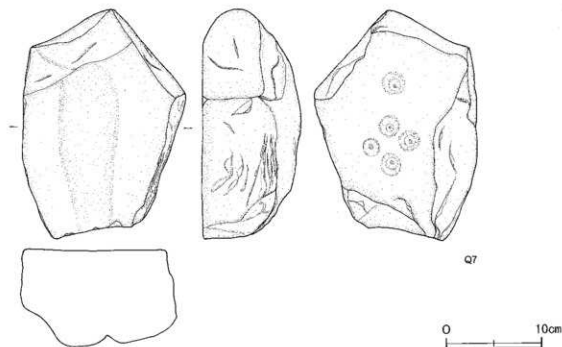
所見 時期は、出土土器から後期初頭（称名寺式期）と考えられる。



第8図 第25号住居跡実測図



第9图 第25号住居跡出土遺物実測図(1)



第10図 第25号住居跡出土遺物実測図(2)

第25号住居跡出土遺物観察表(第9・10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	粘土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
8	縄文土器	四鉢	—	(16.9)	8.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい様	普通	沈線文	床面	30%
TP3	縄文土器	四鉢	長石・石英				にぶい様	普通	沈線による曲線的な区画文。L.Rの半部縄文	床面	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	特 徴			出土位置	備考
BP20	土器片(片楕)	3.2	(3.1)	1.0	—	(19.9)	両縁部研磨 一部欠損			床面	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴			出土位置	備考
Q7	石皿	24.2	17.0	10.3	5740	花崗岩	表面が皿状にわずかに凹む 凹石併用			床面	
Q8	磨石	(7.8)	7.4	4.1	(300.8)	安山岩	両面に磨面 磨石併用			覆土中	PL16
Q9	磨石	(5.7)	(8.0)	(6.0)	(285.8)	安山岩	下端に磨行痕 磨石併用			覆土下層	
Q10	凹石	31.2	21.6	12.6	9620	花崗岩	両面に複数の断面形がV字状の凹み			卵石	

第26号住居跡(第11・12図)

位置 調査G区中央部のB 4 c9区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第86号土坑を掘り込み、第11・20・21号住居、第85号土坑及び第4号流路に掘り込まれている。本跡の覆土上面に第1号道路が構築されている。また、第83号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 確認面が床面であったため、壁は確認できなかった。床も明確でないため、規模及び形状は不明である。土層観察で確認された壁は直立しており、壁高は27cmである。

床 遺存している床はほぼ平坦で、特に硬化した部分は認められなかった。

炉 長径57cm, 短径50cmの方形を呈する石組炉である。炉石の一部に、石皿や凹石が転用されている。床面を深さ25cmほど掘りくぼめ、炉石を斜め方向に設置している。炉の覆土からは焼土・炭化物は検出されず、炉床は確認できなかった。

伊土層解説

- | | |
|-----------------|-------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量 | 4 濃い黄褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック微量 | 5 黒褐色 ローム粒子数量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量 | 6 濃い黄褐色 ロームブロック少量 |

ピット 3か所。P1・P2は深さ22cm・46cmで、位置と規模から柱穴と考えられる。P3は深さ27cmで、性格不明である。

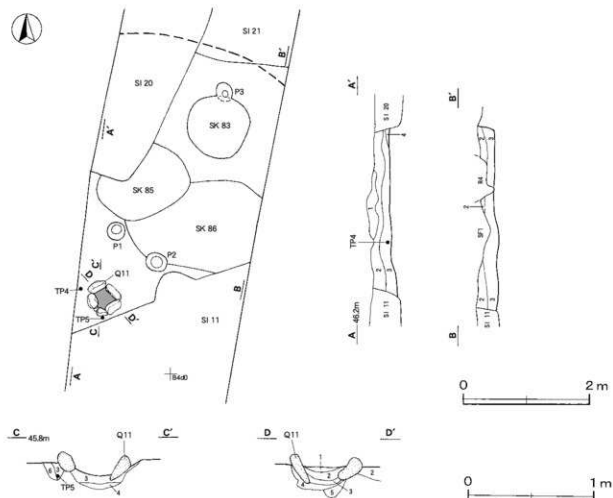
覆土 4層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

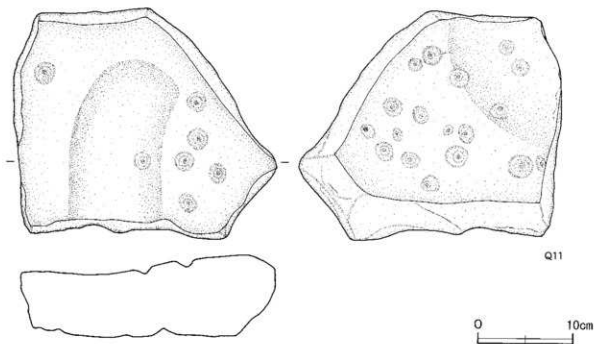
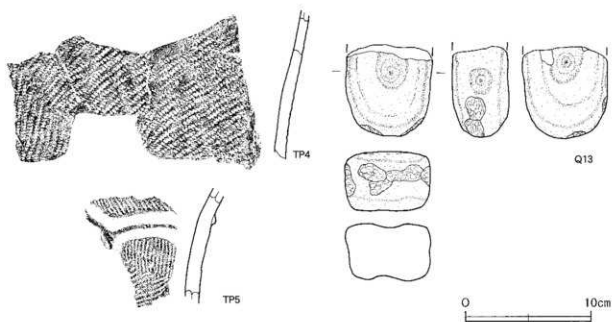
- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1 褐色 砂粒中量, ローム粒子数量 | 3 濃い黄褐色 ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 4 黄褐色 ロームブロック少量 |

遺物出土状況 縄文土器片52点, 石器3点(石皿1, 凹石2)のほか, 混入した土師器片4点, 須恵器片1点が出土している。TP4は西壁寄りの覆土下層, TP5は炉の掘方への埋土からそれぞれ出土している。Q11は, 石組炉に使用された石皿である。

所見 時期は, 出土土器から中期後葉(加曾利E III式期)と考えられる。



第11図 第26号住居跡実測図

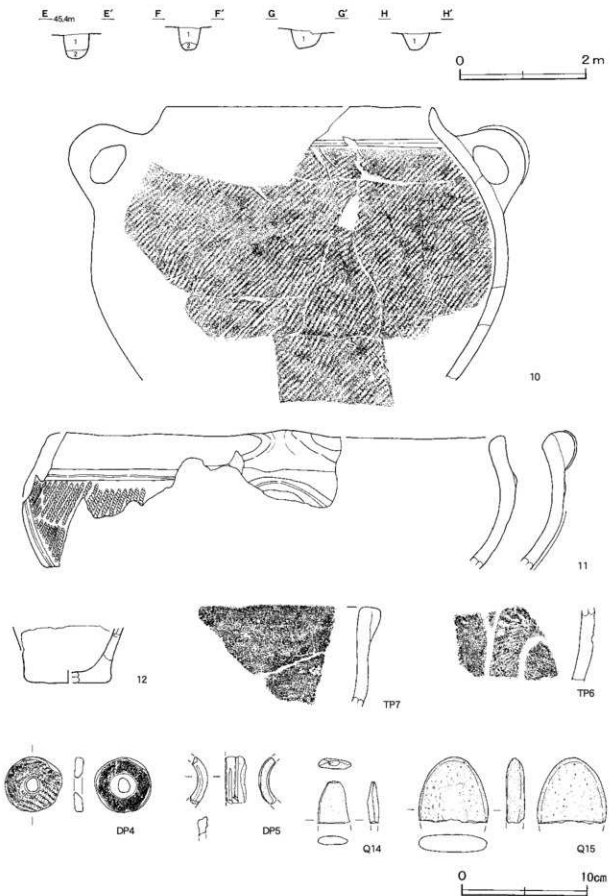


第12図 第26号住居跡出土遺物実測図

第26号住居跡出土遺物観察表 (第12図)

番号	種別	図種	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP4	縄文土器	図鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	灰黄褐色	普通	R.L.の単踏縄文	塚土下層	
TP5	縄文土器	図鉢	長石・石英・雲母	にじみ、 黄褐色	普通	沈線が沿う縄帯文 R.L.の単踏縄文	炉	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q11	石皿	24.1	27.5	8.9	7980	花崗岩	表面が凹状にわずかに凹む 凹石併用	炉石	丸16
Q13	凹石	7.2	6.8	4.6	1423.0	安山岩	両面・両側面に凹状の加み 磁石・磨石併用	塚土中	



第14图 第27号住居跡・出土遺物実測図

第27号住居跡出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
10	縄文土器	両耳壺	∅21.0	(21.8)	—	長石・石英・ 雲母、赤い粘土	にぶい黄	普通	口唇部に鉄線帯が施す	R.L.の単面縄文	床面 20% PL.9
11	縄文土器	深鉢	[36.6]	(11.8)	—	長石・石英・ 雲母	にぶい黄	普通	口唇部に鉄線帯が施す	胴部は鉄線帯で文様を描出し、L.R.の単面縄文を施す	床面 5%
12	縄文土器	深鉢	—	(4.5)	[6.6]	長石・石英・ 雲母	灰黄緑	普通	無文		床面 5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP6	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄	普通	沈線による曲線的な区画文	R.L.の単面縄文	覆土下層
TP7	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	口唇部肥厚	無文	床面

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	特徴	出土位置	備考
DP4	土器片円筒	4.3	4.5	0.8	1.1	36.0	両縁部研磨 有孔	床面	PL15
DP5	耳輪リヤ	∅3.7	(1.4)	(1.8)	—	(5.3)	沈線文により文様を描出	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q14	磨製石斧	∅3.3	2.1	0.9	(11.3)	緑色顔灰岩	先端を研磨 刃部欠損	床面	
Q15	磨石	(5.1)	5.5	1.4	(73.4)	安山岩	両面に磨面	覆土下層	

第28号住居跡（第15・16図）

位置 調査F区中央部のB2f4区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第29号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 壁は確認できなかったが、炉と柱穴の位置及び硬化面の範囲から、径8mほどの円形を呈していたと考えられる。

床 北西側にやや傾斜している。炉の周囲から南東側にかけて硬化面が認められる。

炉 ほぼ中央部に付設されていたと推測できる。長径120cm、短径80cmの楕円形を呈する石組炉である。炉石の一部に、石皿や凹石が転用されている。第1～3層は炉の堀方への埋土であり、炉床は第1層上面と考えられるが、焼土や赤変硬化した範囲は確認できなかった。

伊土層解説

- 1 黒 色 砂粒・樹木等の植物遺体微量 3 黒 褐色 炭化粒子・樹木等の植物遺体微量
2 黒 褐色 砂粒少量、樹木等の植物遺体微量

ピット 5か所。P1～P3は深さは45～50cm、P4・P5は深さ25cm・32cmである。位置と規模及び覆土にも共通性があることから柱穴と考えられる。

ピット層解説

- 1 黒 褐色 砂粒少量、炭化粒子微量 3 褐 灰色 砂粒中量
2 黒 褐色 砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量 4 黒 褐色 炭化粒子・砂粒微量

覆土 暗褐色の単一層である。堆積状況は不明である。

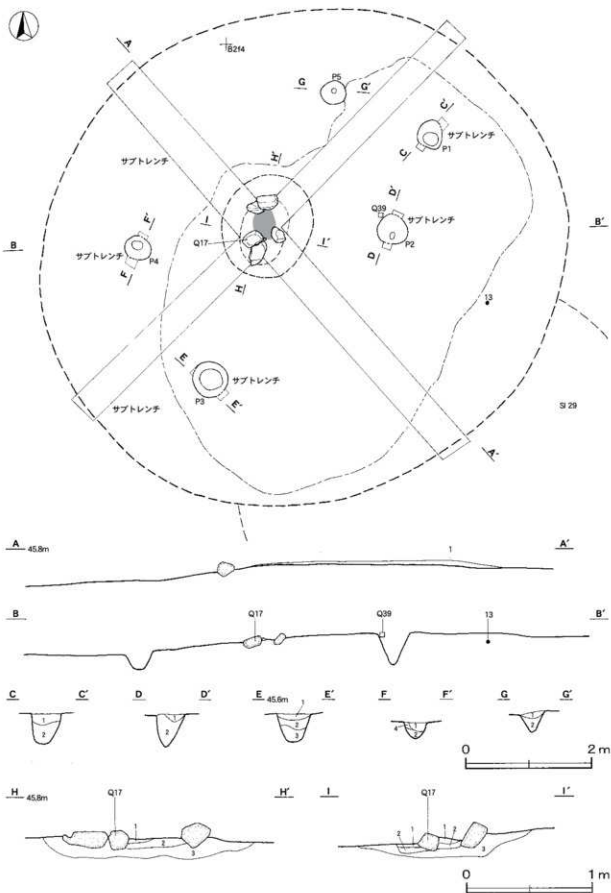
土層解説

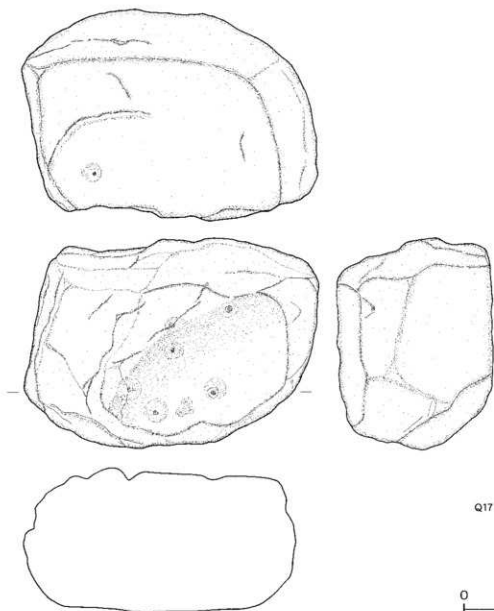
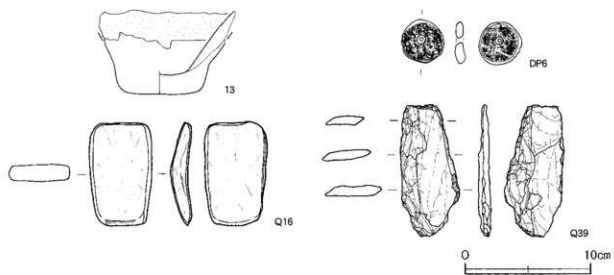
- 1 暗 褐色 ロームブロック・炭化粒子・樹木等の植物遺体微量

遺物出土状況 縄文土器片551点、石器6点（砥石1、石皿1、磨石2、凹石2）、剥片3点が出土している。

土器は細片が多く、覆土上層から集中して出土している。Q17は、石組炉に使用された石皿である。

所見 時期は、重複関係や炉の形態から、中期後葉～後期初頭と考えられる。





第16图 第28号住居跡出土遺物実測図

第28号住居跡出土遺物観察表 (第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
13	縄文土器	深鉢	—	6.6	6.1	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	無文	灰面	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	特 徴			出土位置	備考
DP6	土器片円盤	3.3	3.4	0.7	0.3	9.0	黄緑部研磨	有孔		覆土中	PL15
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴			出土位置	備考
Q16	砥石	8.2	5.0	1.7	101.3	安山岩	全面を研磨	下端に使用痕		伊	PL15
Q17	石皿	22.1	30.8	16.3	16350	花崗岩	表面がわずかに皿状に凹む	凹石併用		伊石	
Q39	剥片	10.5	4.8	0.9	59.5	雲母片岩	横長剥片を素材に側縁部に二次加工痕を有する	一側縁面に研磨痕		灰面	

第29号住居跡 (第17～20図)

位置 調査F区中央部のB2g4区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第28号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺存している壁、炉と柱穴の位置及び硬化面の範囲から、主軸方向がN-64°-Wで、長径7.60m、短径6.70mの楕円形と推測できる。遺存している南東壁は外傾して立ち上がり、壁高は25cmである。

床 遺存している床は、ほぼ平坦である。炉を中心として硬化面が認められる。

炉 中央部からやや南西側に付設されていたと推測できる。長軸68cm、短軸57cmの長方形を呈する石組炉である。炉石の一部に、石皿や凹石が転用されている。東側から南側にかけての炉石は、火を受けてやや赤変している。炉床は第2層下面と考えられるが、焼土や赤変硬化した範囲は検出されておらず、明確ではない。掘方への埋土である第5層から、多量の土器片が重なり合って出土している。土器片の出土範囲は、平面的には炉石内の範囲とほぼ重なるが、北西部に一部張り出している。出土している土器片から、明確な被熱の痕跡は認められなかった。

炉土層解説

- | | |
|-------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子・砂粒微量 | 4 黒褐色 砂粒微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・砂粒微量 | 5 黒褐色 砂粒少量、炭化粒子微量 (跡まり弱い) |
| 3 黒褐色 砂粒少量、炭化粒子微量 | |

ピット 5か所。深さは28～38cmで、位置と規模及び覆土にも共通性があることから柱穴と考えられる。

ピット土層解説

- | | |
|-------------------------|------------|
| 1 黒褐色 炭化物・砂粒・樹木等の植物遺体微量 | 2 褐灰色 砂粒少量 |
|-------------------------|------------|

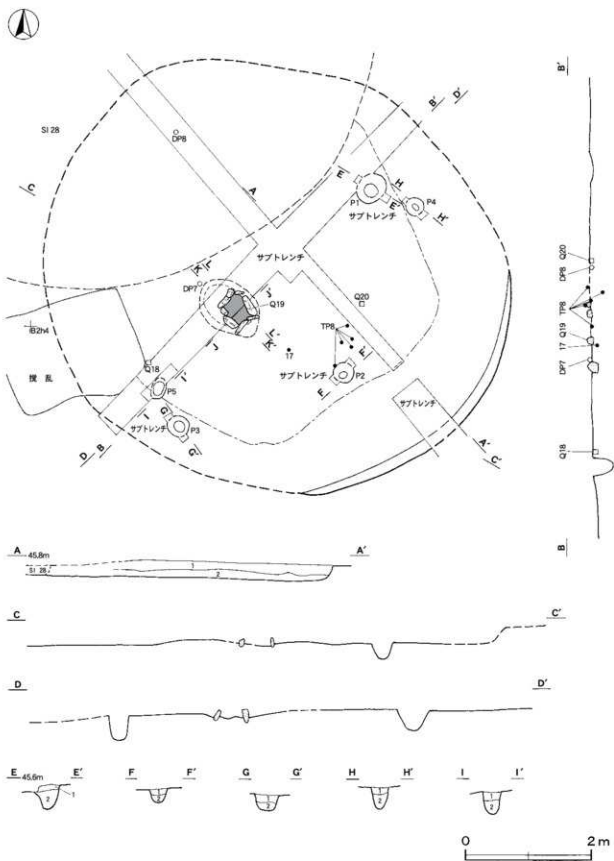
覆土 2層に分層できる。全体に含有物も少なく、堆積に乱れもないことから、自然堆積と考えられる。

土層解説

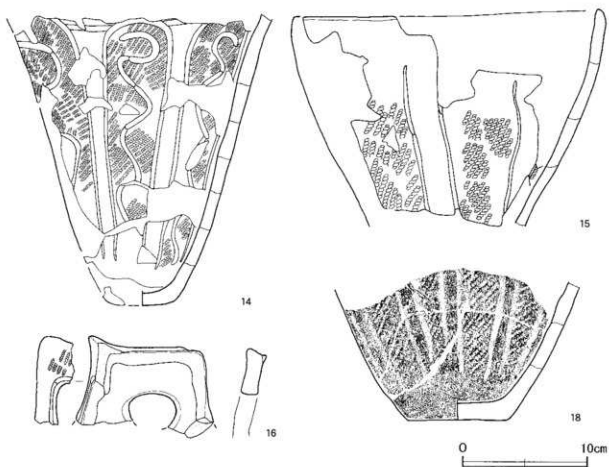
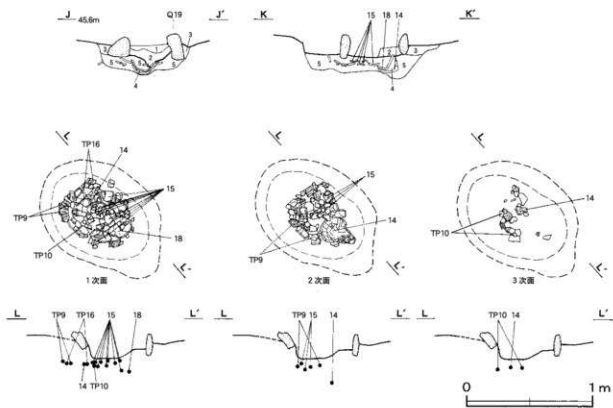
- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子・細礫・樹木等 | 2 黒色 細礫・砂粒・樹木等の植物遺体微量の植物遺体微量 |
|------------------------------|------------------------------|

遺物出土状況 縄文土器片1,320点、土製品3点(土器片円盤)、石器16点(石鏃2、打製石斧2、石皿5、磨石5、敲石1、凹石1)、石製品1点(石棒)、剥片1点が出土している。14・15・18・TP9・TP10・TP16は、炉の掘方への埋土から出土している。14は口縁部に欠く深鉢で、斜位で出土している。15も同じ層位から出土しているが、散在して出土している破片が接合したものである。Q19は、石組炉に使用された石皿である。

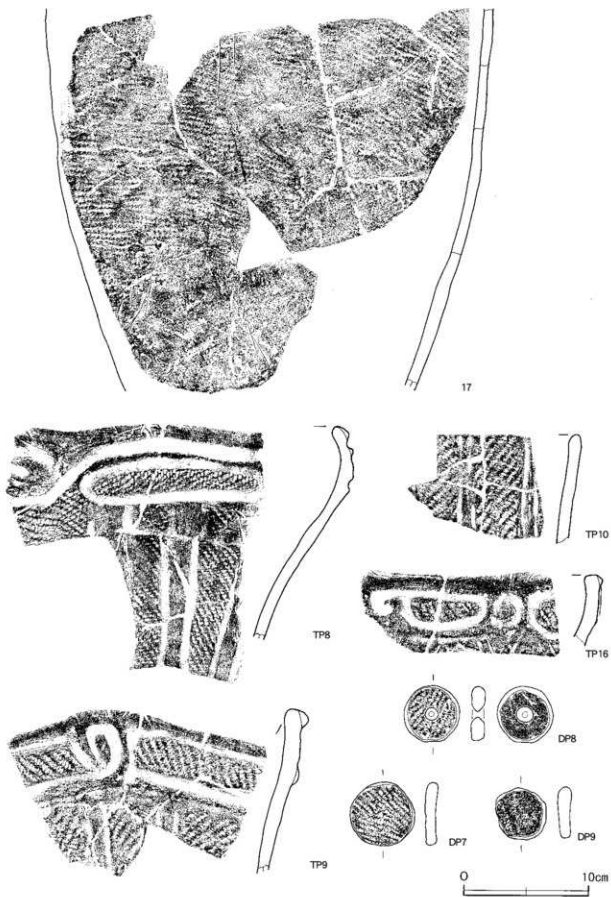
所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利EⅢ式期)と考えられる。



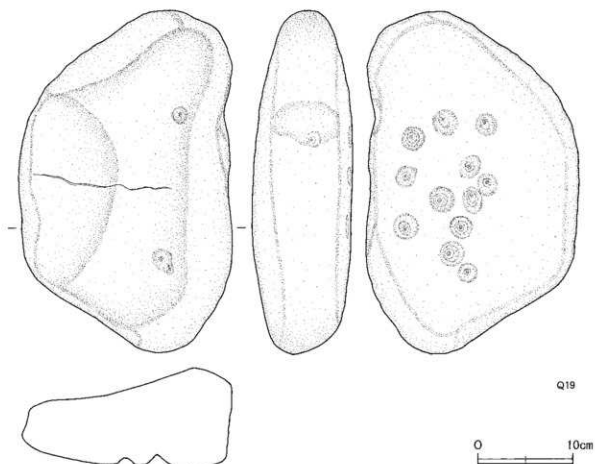
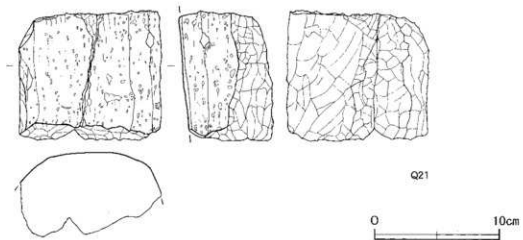
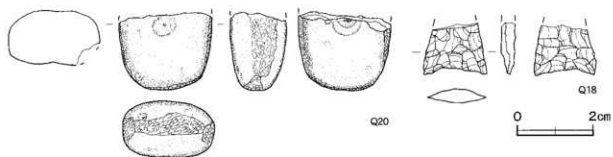
第17図 第29号住居跡実測図



第18图 第29号住居跡・出土遺物実測図



第19图 第29号住居跡出土遺物実測図(1)



第20图 第29号住居跡出土遺物実測図(2)

第29号住居跡出土遺物観察表（第18～20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考	
14	縄文土器	深鉢	—	(23.2)	5.0	長石・石英・雲母		灰焼	普通	沈澱による懸垂文を磨り消し R.Lの単筋縄文 内部に二次焼成痕をわずかに認める	炉	38%
15	縄文土器	深鉢	(24.2)	(17.3)	—	長石・石英・雲母		灰焼	普通	口縁部無文・胴部は沈澱による懸垂文を磨り消し R.Lの単筋縄文	炉	40%
16	縄文土器	深鉢	—	(8.0)	—	長石・石英・雲母		焼	普通	円孔を有する把手 L.Rの単筋縄文	覆土中	5%
17	縄文土器	深鉢	—	(30.5)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子		にぶい焼	普通	L.Rの単筋縄文	床面	20%
18	縄文土器	深鉢	—	(11.0)	2.8	長石・石英・雲母・赤色粒子		にぶい焼	普通	沈澱による懸垂文を磨り消し R.Lの単筋縄文	炉	39%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP8	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にぶい・濁橙	普通	口縁部は沈澱が白う隆帯による渦巻文・区画文 胴部は沈澱による懸垂文を磨り消す L.Rの単筋縄文	床面	P.10
TP9	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい・濁橙	普通	口縁部は沈澱が白う隆帯による渦巻文・区画文 胴部は沈澱による懸垂文を磨り消す O段多条によるR.Lの単筋縄文	炉	P.10
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰焼	普通	沈澱による懸垂文を磨り消す O段多条によるR.Lの単筋縄文		
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒焼	普通	沈澱が白う隆帯による渦巻文・区画文 R.Lの単筋縄文	炉	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	特徴	出土位置	備考
DP7	土器片円盤	5.0	5.1	1.0	—	28.8	周縁部研磨	覆土下層	P.15
DP8	土器片円盤	4.4	4.4	1.1	0.5	27.7	周縁部研磨 有孔	床面	P.15
DP9	土器片円盤	4.1	4.0	1.2	—	21.7	周縁部研磨	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q18	石鏝	(1.3)	1.7	0.4	(0.9)	チャート	両面凹凹削磨 凹基無茎跡	床面	P.15
Q19	石皿	35.7	22.3	10.4	10540	花崗岩	両面が直状にわずかに凹状 凹石併用	炉石	P.16
Q20	載石	(6.2)	7.4	4.5	(209.3)	安山岩	外面・両側面に敲打痕 磨石・凹石併用	床面	
Q21	石棒	(10.4)	(11.2)	(7.5)	(1219)	安山岩	断面は楕円形	覆土中	P.16

第30号住居跡（第21～24図）

位置 調査F区北部のB 2 d7区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第91号土坑を掘り込んでいる。また、第25号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 北側の調査区壁面の土層観察では、掘り込みは検出されなかったが、遺存している壁から、本来は径6.5mほどの楕円形又は円形を呈していたと考えられる。壁は外傾して立ち上がり、壁高は30～36cmである。

床 遺存している床は、ほぼ平坦である。炉を中心として硬化面が認められる。

炉 ほぼ中央部に付設されていたと推測できる。一辺が43cmほどの方形を呈する石組炉である。炉石の一部に、石皿が転用されている。炉床は床面から3cmの深さに位置する第2・3層上面と考えられるが、焼土や赤変硬化した範囲は検出されておらず、明確ではない。

炉土層解説

- | | |
|-------------------------|-----------------|
| 1 黒色 炭化粒子・樹木等の植物遺体微量 | 3 暗褐色 炭化粒子・砂粒微量 |
| 2 黒褐色 樹木等の植物遺体少量、炭化粒子微量 | 4 焼灰色 白色粒子微量 |

ピット 5か所。覆土には共通性が認められる。P 1・P 2・P 5は深さは26～50cmで、位置と規模から主柱穴と考えられる。P 3・P 4は深さ26cm・36cmでほぼ同規模であり、補助的な柱穴の可能性もある。

ピット土層解説

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1 黒色 炭化粒子・樹木等の植物遺体・白色粒子微量 | 2 黒褐色 砂粒少量、炭化粒子・白色粒子微量 |
|---------------------------|------------------------|

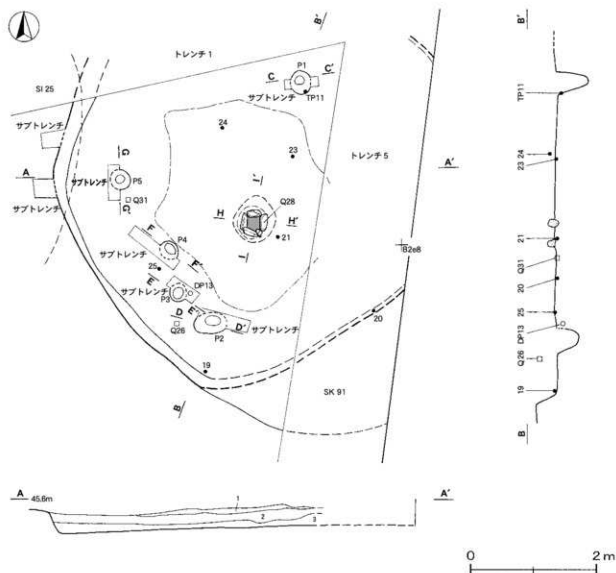
覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

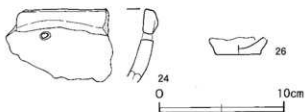
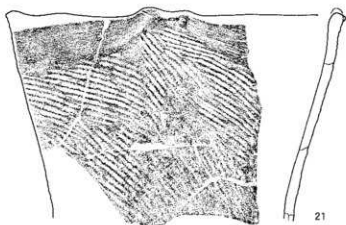
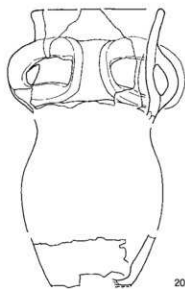
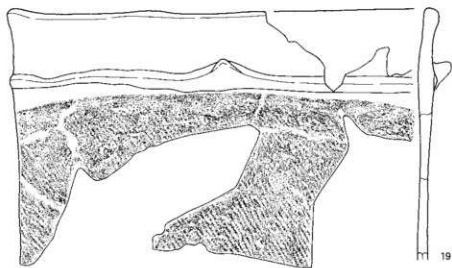
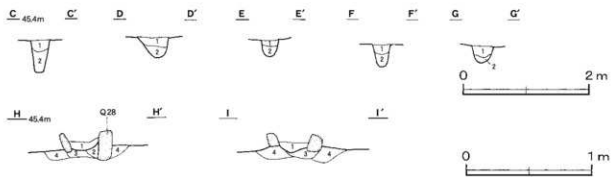
- 1 にごり・黄褐色 砂粒少量、炭化粒子・樹木等の植物遺体微量 3 暗褐色 炭化粒子・砂粒・樹木等の植物遺体微量
 2 黒色 樹木等の植物遺体中量、砂粒・白色粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片4,169点、土製品6点（土器片円盤）、石器33点（尖頭器1、石錐1、石核1、石鏃1、打製石斧1、磨製石斧2、石皿4、磨石19、敲石1、凹石2）、剥片14点、焼成粘土塊2点のほか、混入した鉄滓1点が出土している。土器は細片が多く、覆土上層から床面まで散在して出土しているが、床面から出土している土器は、大形の破片が多い。19は南壁際の覆土下層から、21は炉の南東側の床面から出土しており、時期決定の指標となる遺物である。20はトレンチから出土している遺物であるが、第91号土坑が阿玉台式期の土坑であることから、本跡に伴う遺物として判断した。Q28は、石組炉に使用された石皿である。

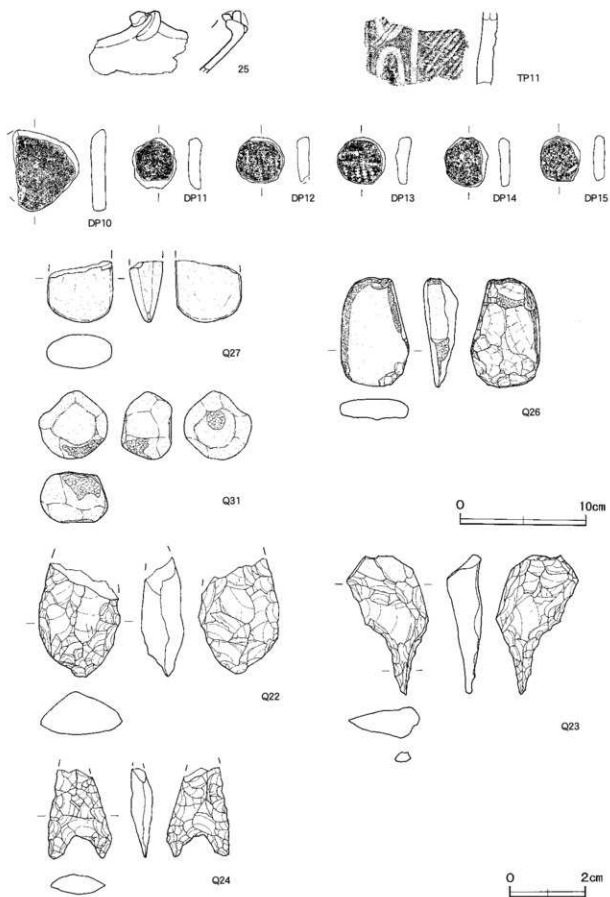
所見 時期は、出土土器から後期初頭（称名寺式併行期）と考えられる。



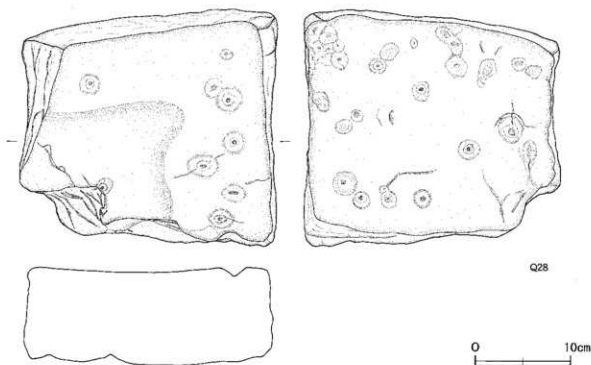
第21図 第30号住居跡実測図



第22图 第30号住居跡・出土遺物実測図



第23图 第30号住居跡出土遺物実測図(1)



第24図 第30号住居跡出土遺物実測図(2)

第30号住居跡出土遺物観察表(第22~24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
19	縄文土器	深鉢	[33.0]	(20.3)	—	長石・石英	橙	普通	口縁部に舌状突起を有する低隆帯が施る L.Rの単部縄文	縄土下層	40%
20	縄文土器	深鉢	[10.0]	[22.0]	[6.2]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	4単位の桶状把手 外面赤彩	床面	30% P.9
21	縄文土器	深鉢	[25.6]	(16.9)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部に低隆帯が施る。0段多葉によるL.Rの単部縄文	床面	10% P.10
23	縄文土器	浅鉢	—	05.80	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	無文	床面	5%
24	縄文土器	深鉢	—	05.80	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部に隆帯が施る	縄土下層	5% P.10
25	縄文土器	浅鉢	—	05.11	—	長石・石英	にぶい橙	普通	底頂部に隆帯による渦巻文	床面	5%
26	縄文土器	ニチャフ	—	0.30	3.7	長石・石英	浅黄橙	普通	無文	縄土中	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	沈線文目を磨り消し。0段多葉によるR.Lの単部縄文	P.1 縄土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	特徴	出土位置	備考
DP10	土器片円盤	6.5	(5.2)	1.2	—	(44.4)	周縁部研磨 一部欠損	縄土中	
DP11	土器片円盤	4.0	3.4	1.1	—	14.3	周縁部研磨	縄土中	
DP12	土器片円盤	(3.6)	3.9	1.0	—	(15.1)	周縁部研磨 一部欠損	床面	P.15
DP13	土器片円盤	3.7	3.8	1.4	—	19.3	周縁部研磨	床面	P.15
DP14	土器片円盤	3.9	3.5	0.9	—	14.2	周縁部研磨	縄土中	
DP15	土器片円盤	3.6	3.2	1.0	—	13.7	周縁部研磨	縄土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q22	尖頭器	(3.0)	2.1	1.1	(7.4)	チャート	両面調整 尖頭部欠損	縄土中	
Q23	石鏃	3.7	2.2	0.9	4.8	チャート	両面調整 丁字状押圧剝離調整で刃部を成形	縄土中	P.15
Q24	石鏃	(2.4)	1.6	0.6	(2.2)	チャート	両面押圧剝離 凹基無蓋部	縄土中	P.15
Q26	打製石斧	8.7	5.4	2.7	171.5	緑色凝灰岩	表面・側面の磨礫面を残す 剝離調整後、裁打による成形痕が一部有り	縄土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
Q27	磨製石斧	(4.7)	5.2	(2.7)	(87.6)	砂岩	定角式	器体研磨入念	基部欠損	覆土中	PL15
Q28	石皿	24.9	36.7	10.4	12280	花崗岩	表面が風状にわずかに凹凸	珪石俵用		伊石	PL16
Q31	磨石	5.4	5.4	4.0	39.1	安山岩	全面を使用	磨石俵用		床面	PL16

表2 縄文時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	ピット			伊	覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古一順)	
								主柱穴	出入口	不明						
24	B 2 16	—	[円形] [楕円形]	(5.33×4.18) (6.6)	36~38	平垣	—	—	—	—	—	自然	縄文土器・土器片 内巻・打製石斧	後期後葉		
25	B 2 65	N-16°-W	[楕円形]	[7.0×6.2]	—	平垣	—	—	—	—	—	石組伊	縄文土器・土器片 内巻・石皿・磨石	後期初期	SI30と重複不明	
26	B 4 c9	—	不明	—	27	平垣	—	—	—	—	—	石組伊	自然	縄文土器・石皿・ 内巻	中期後葉	SK86→本跡→SI11・20・21, SK85, SK-1, R-4 SK83と重複不明
27	B 2 e4	—	[円形]	(3.13×7.17) (7)	5~10	積料	—	—	—	—	—	入海	縄文土器・土器片 内巻・砥石	中期後葉		
28	B 2 f4	—	[円形]	[8]	—	積料	—	—	—	—	—	石組伊	不明	縄文土器・土器片 内巻・砥石	中期後葉	SI29→本跡
29	B 2 g1	N-66°-W	[楕円形]	[7.60×6.70]	25	平垣	—	—	—	—	—	石組伊	自然	縄文土器・土器片 内巻・石皿・砥石	中期後葉	本跡→SI28
30	B 2 d7	—	[円形] [楕円形]	[6.5]	30~36	平垣	—	—	—	—	—	石組伊	自然	縄文土器・土器片 内巻・石皿・石鏡	後期初期	SK91→本跡 SI25と重複不明

(2) 土坑

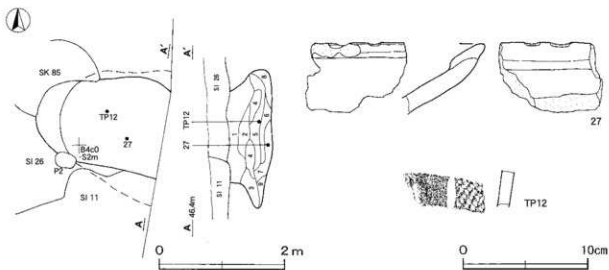
第86号土坑 (第25図)

位置 調査G区中央部のB 4 c0区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第11・26号住居及び第85号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 フラスコ状土坑である。重複する遺構があり、東側が調査区域外に延びているため、開口部は、南北径が1.50mで、東西径は2.06mしか確認できなかった。平面形は楕円形と推測される。底面はほぼ平垣で、南北径2.10m、東西径1.67mのみを確認した。第26号住居跡の床面からの深さは72cmで、南北方向の壁は内傾している。

覆土 9層に分層できる。ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。



第25図 第86号土坑・出土遺物実測図

土層解説

1 暗褐色	炭化粒子少量, ロームブロック微量	6 黒褐色	炭化粒子少量, ロームブロック微量
2 黒褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	7 濃い黄褐色	ロームブロック少量
3 灰黄褐色	ロームブロック少量	8 黒褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量
4 濃い黄褐色	ロームブロック中量	9 黒色	ローム粒子・炭化粒子微量
5 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量		

遺物出土状況 縄文土器片36点が出土している。TP12と27は、中央部の覆土中層及び覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から中期後葉と考えられる。

第86号土坑出土遺物観察表（第25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
27	縄文土器	浅鉢	34.2	5.6	-	長石・石英・雲母	濃い褐	普通	無文	覆土下層	5%
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考			
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐	普通	沈澱による懸垂文を磨り消し、R.Lの単純調文	覆土中層				

第88号土坑（第26図）

位置 調査G区南部のB4d9区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第11号住居に掘り込まれている。

規模と形状 上部は第11号住居に掘り込まれており、東側が調査区域外に延びているため、長径は1.94mで、短径は1.66mしか確認できなかった。平面形は楕円形で、長径方向はN-10°-Wである。第11号住居跡の床面からの深さは71cmで、底面は皿状であり、壁は緩やかに立ち上がっている。

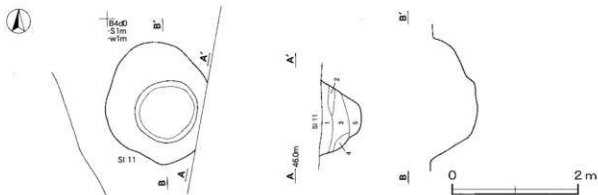
覆土 5層に分層できる。ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量	4 明黄褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ロームブロック少量	5 黒褐色	ロームブロック少量(第2層よりやや明るい色調)
3 濃い黄褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量		

遺物出土状況 縄文土器片4点が、覆土中から出土している。いずれも細片で、図示することができない。

所見 時期は、出土土器から中期と考えられる。



第26図 第88号土坑実測図

第89号土坑（第27～29図）

位置 調査F区南部のB 2 h6区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

規模と形状 径3.4mほどの円形である。深さは44cmで、底面は南壁側に一部高まりがあるが、ほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

ピット 中央部に位置している。深さは22cmである。

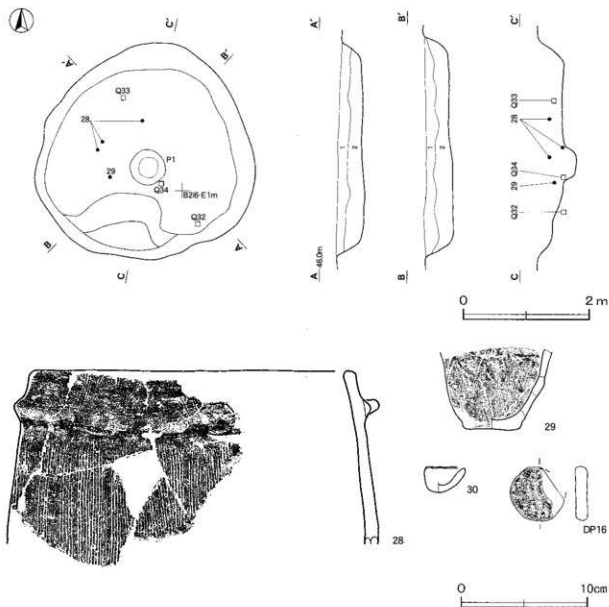
覆土 2層に分層できる。水平堆積の状況から埋め戻されている。

土層解説

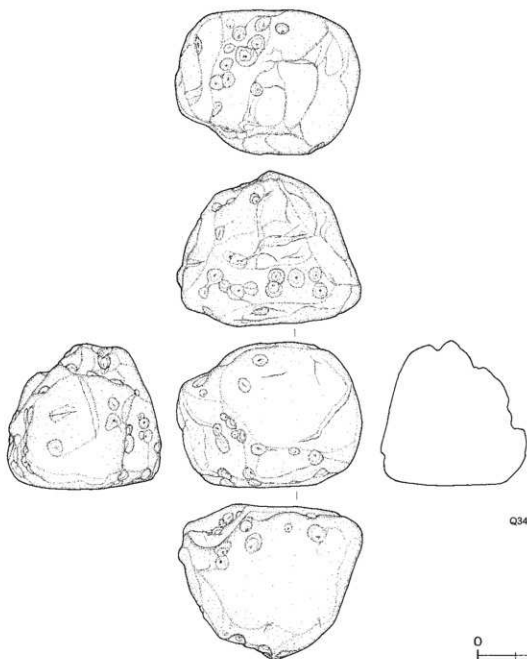
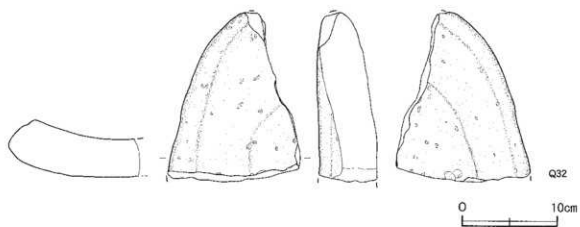
- 1 黒 褐色 樹木等の植物遺体少量、炭化粒子微量 2 暗 褐色 炭化粒子・砂粒少量

遺物出土状況 縄文土器片589点、土製品1点（土器片円盤）、石器7点（石皿3、磨石1、凹石3）、剥片3点、焼成粘土塊1点が出土している。遺物は、覆土上層から下層にかけて散在して出土しており、出土位置に特異な傾向は認められない。28は、中央部の覆土中層から下層にかけて出土している。

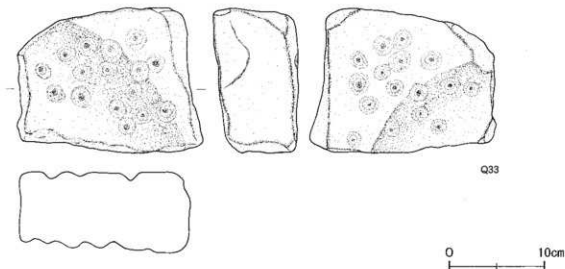
所見 時期は、出土土器から中期末葉～後期初頭と考えられる。



第27図 第89号土坑・出土遺物実測図



第28图 第89号土坑出土遗物实测图(1)



第29図 第89号土坑出土遺物実測図(2)

第89号土坑出土遺物観察表(第27~29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
28	縄文土器	陶鉢	[26.0]	(13.7)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	口唇部に隆帯が走る 胴部は縦位の条線文	覆土下層	10% PL10
29	縄文土器	土器片	—	(6.2)	4.5	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	胴部下半に条線文	覆土中層	60%
30	縄文土器	土器片	3.1	2.0	—	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	無文	覆土中	90%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	特徴	出土位置	備考
DP16	土器片(円盤)	4.3	(4.2)	0.9	—	(17.3)	周縁部研磨 一部欠損	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q32	石皿	(17.8)	(13.9)	(6.4)	(68.8)	安山岩	表面が凹状に凹む	底面	
Q33	円石	15.3	19.5	9.0	4280	花崗岩	石皿を転用 両面に複数の断面形がV字状の凹み	覆土中層	PL16
Q34	円石	19.4	24.5	20.4	11760	花崗岩	全面を使用 断面がV字状の凹み	底面	PL16

第90号土坑(第30・31図)

位置 調査F区北部のB 2 e7区, 標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

規模と形状 長径2.08m, 短径1.74mの不整形円形で, 長径方向はN-42°-Eである。深さは20cmで, 底面は平坦であり, 壁は外傾して立ち上がっている。

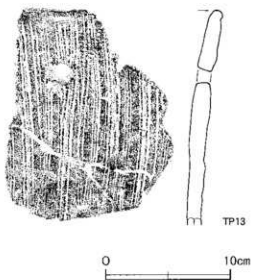
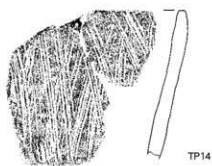
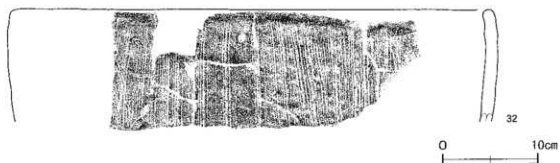
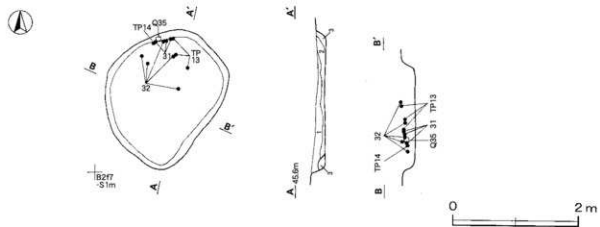
覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

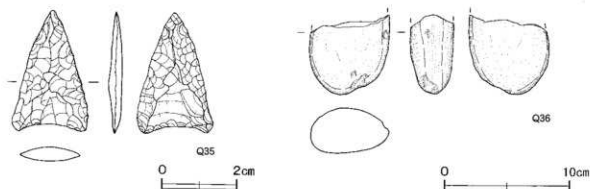
- 1 黒褐色 砂粒少量
2 褐色 砂粒少量, 白色粒子微量
3 暗褐色 砂粒・樹木の植物遺体微量

遺物出土状況 縄文土器片1,473点, 土製品3点(土器片円盤), 石器5点(石鏃1, 磨石4), 剥片10点, 焼成粘土塊1点のほか, 混入した土師器片1点が出土している。石器は覆土上層から中層にかけて集中して出土しており, 大形の破片が多い。32は, 北壁寄りの覆土中層から下層にかけて散在して出土している。

所見 遺物出土状況から, 廃絶後の埋没過程で土器が一括廃棄されたと考えられる。時期は, 出土土器から中期末葉~後期初頭と考えられる。32とTP13は接合しないが, 胎土や文様構成から同一個体と考えられる。



第30图 第90号土坑·出土遗物实测图



第31図 第90号土坑出土遺物実測図

第90号土坑出土遺物観察表 (第30・31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
31	縄文土器	深鉢	30.0	(12.3)	—	長石・石英・雲母	に白い赤黒	普通	口唇部は無文 R.Lの単筋縄文	覆土中層	10%
32	縄文土器	深鉢	30.0	(11.9)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	に白い埋	普通	条線文	覆土中層	10%
番号	種別	器種	胎土		色調	地成	文様の特徴ほか		出土位置	備考	
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子		に白い埋	普通	条線文	縮紗孔有り	覆土上層		
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母		埋	普通	条線文		覆土中層		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	特 徴		出土位置	備考	
DP17	土器片(内輪)	3.1	3.1	0.8	—	8.9	周縁部研磨 外・内面からの穿孔を施す 未製品か		覆土中	PL15	
DP18	土器片(内輪)	2.9	2.7	0.9	—	8.1	周縁部研磨		覆土中	PL15	
DP19	土器片(内輪)	3.2	3.1	1.0	—	12.5	周縁部研磨		覆土中		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴		出土位置	備考	
Q35	石器	3.2	2.0	0.4	1.9	チャート	両面押圧剥離 平基無葉縁		覆土中層	PL15	
Q36	磨石	06.23	6.4	3.5	(183.6)	安山岩	両面に使用痕		覆土中		

第91号土坑 (第32・33図)

位置 調査F区北部のB 2 e7区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第30号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北側は第30号住居に掘り込まれており、東側はトレンチによる掘り込みがあるため、形状は確認できなかった。深さは57cmで、底面は皿状であり、壁は緩やかに立ち上がっている。

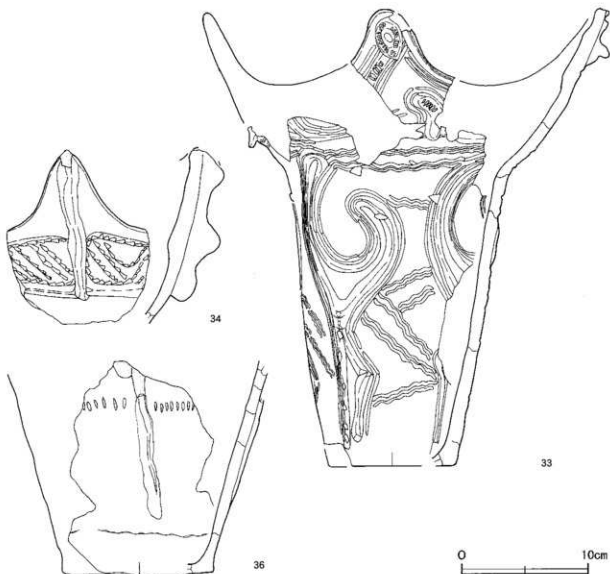
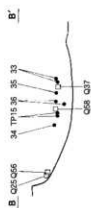
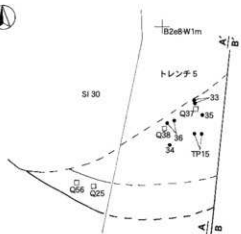
覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

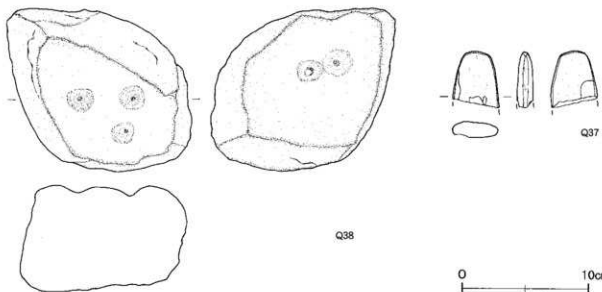
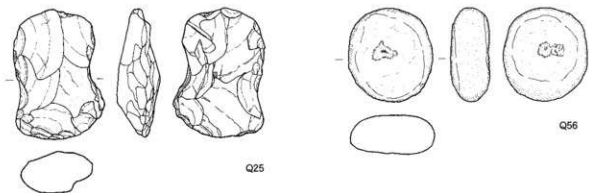
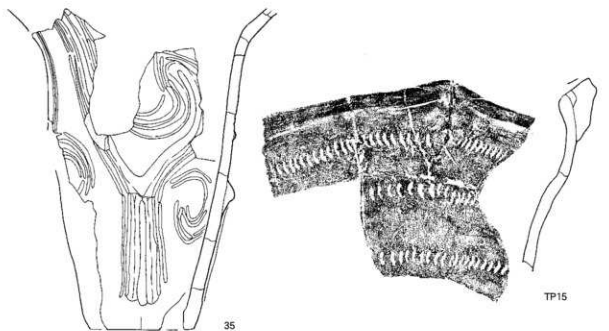
1 黒 褐色 樹木等の植物遺体少量、炭化粒子・砂粒微量 2 暗 褐色 砂粒少量、樹木等の植物遺体微量

遺物出土状況 縄文土器片121点、石器4点(打製石斧、磨製石斧、磨石、凹石)が出土している。土器は大形の破片が多く、覆土中層から集中して出土している。33は、覆土中層から横位で出土している。

所見 遺物出土状況から、廃絶後の埋没過程で土器が一括廃棄されたと考えられる。時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅱ式期)と考えられる。



第32図 第91号土坑・出土遺物実測図



第33图 第91号土坑出土遗物实测图

第91号土坑出土遺物観察表 (第32・33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
33	縄文土器	深鉢	φ1.0	36.4	19.9	長石・石英・雲母・赤色粘土	灰褐色	普通	波状部直下にキズミを有する隆帯を僅かに見付 口縁部は隆帯と区線で文様を構成 胴部は波線が凸隆帯を垂下	覆土中層	50% PL.9
34	縄文土器	深鉢	—	(13.8)	—	長石・石英・雲母・赤色粘土	にがい赤褐色	普通	波頂部から隆帯を垂下 隆帯と波状部で文様を構成	覆土中層	5% PL.10
35	縄文土器	深鉢	—	(25.4)	(8.2)	長石・石英・雲母	にがい赤褐色	普通	波線が凸隆帯を垂下させ文様を構成	覆土中層	30%
36	縄文土器	深鉢	—	(16.8)	(11.6)	長石・石英・雲母	灰黄褐色	普通	隆帯を垂下 キズミ目列が凸る	覆土下層	20% PL.10

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口唇部に隆帯文 キズミ目列が凸る	覆土中層	PL.10

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q25	打製石斧	10.3	7.1	3.4	242.2	ホルンフェルス	分銅形 両面調整	覆土中層	PL.15
Q27	磨製石斧	(4.5)	(3.6)	1.3	(29.1)	ホルンフェルス	器体研磨入念 刃部欠損	覆土中層	
Q38	円石	13.0	14.6	8.6	2280	花崗岩	両面に複数の彫面形がV字状の閉み	覆土中層	
Q46	磨石	7.4	6.7	3.1	196.4	安山岩	両面に使用痕 凹石併用	覆土中層	PL.16

表3 縄文時代土坑一覧表

番号	位置	開口部平面形	長径方向	規模			壁面	底面	ピット	覆土	主な出土遺物	備考 (古→新)		
				開口部 (長径×短径m)	底 部 (長径×短径m)	深さ (cm)								
86	B 4-a	楕円形	—	—	—	(2.06×1.50)	(2.10×1.67)	(72)	フラスコ	平皿	—	人為	縄文土器	本跡→S11・26、S885
88	B 4-b	楕円形	N-30°W	1.94×(1.66)	—	—	—	(71)	緩斜	皿状	—	人為	縄文土器	本跡→S11
89	B 2-6	円形	—	3.4	—	—	—	44	緩斜	一面直まり	1	人為	縄文土器・土器片片断・石皿・円石	
90	B 2-a	不整形円形	N-42°E	2.08×1.74	—	—	—	20	外傾	平皿	—	自然	縄文土器・土器片片断・石盤・磨石	
91	B 2-b	不明	—	—	—	—	—	57	緩斜	皿状	—	自然	縄文土器・打製石斧・磨製石斧・円石	本跡→S130

[3] 遺物包含層

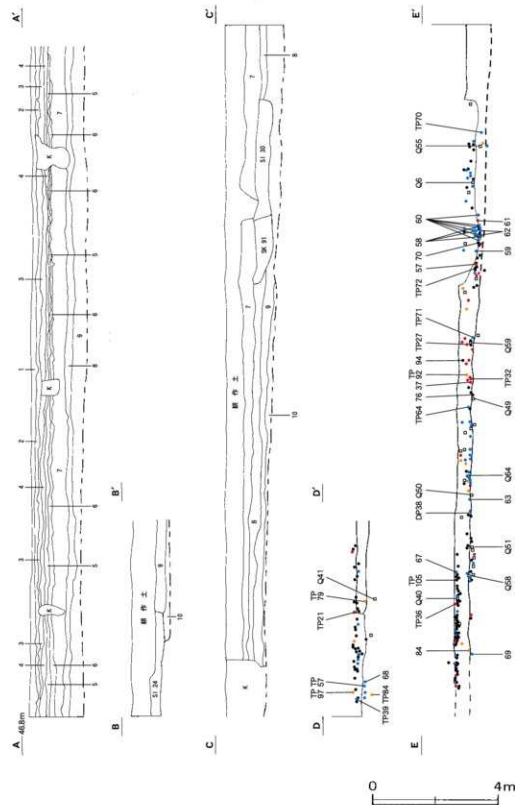
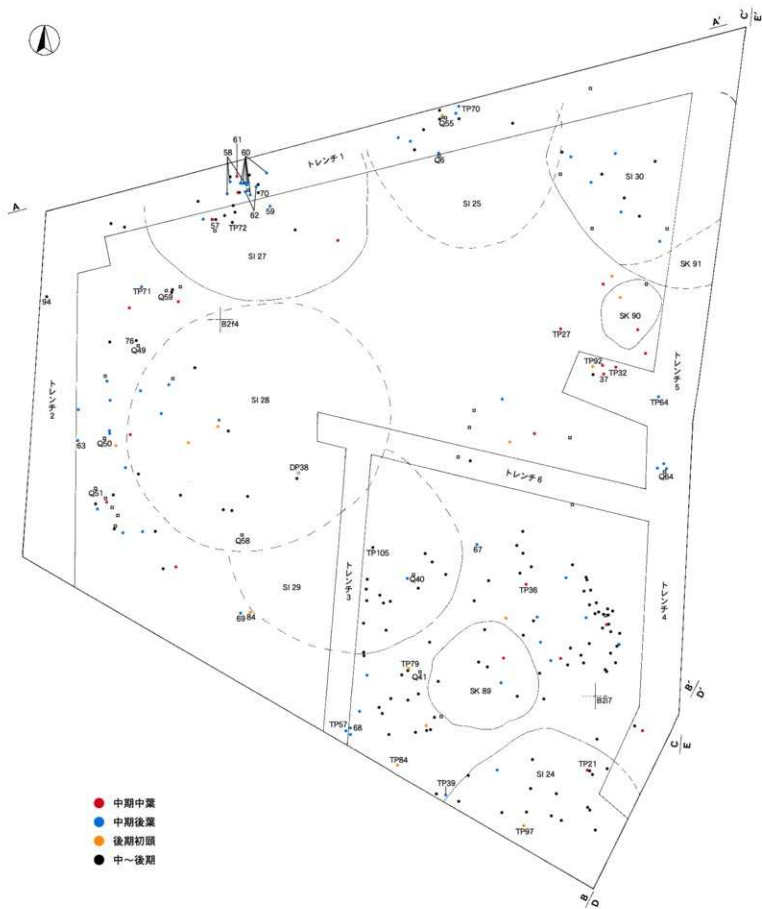
第2号遺物包含層 (第34~48図)

位置 調査F区、標高44~45mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

確認状況 表土を除去した段階で、調査F区全域から縄文土器片を含む黒褐色土及び黒色土が堆積していることを確認した。調査F区は、南北27m・東西24mの範囲であり、調査区域外にさらに広がりをもつものと考えられる。調査区は地形的に山麓緩斜面の裾部にあたり、南東側が山頂方向となる。

調査の方法 調査区の壁面に沿ってトレンチを設定し、土層観察から遺物の出土層位を確認した。ここでは、東西方向に設定した第1号トレンチ及び南北方向に設定した第4・5号トレンチの土層解説を掲載した。堆積状況を確認後、遺物の出土状況及び出土位置を記録しながら、掘り込みを行った。遺物が集中して出土している地点は、遺物包含層内に遺構が埋没している可能性が考えられ、サブトレンチを設定して遺構の確認作業を行い、縄文時代に帰属する竪穴住居跡6軒、土坑3基を確認した。

覆土 第1層から第6層は、水田耕作のための客土と考えられ、テストピットの第1層(第3図)に相当する。遺物を包含している層は、現地地表下70~110cmに自然堆積している厚層50~80cmの黒褐色を主体とする層であり、第8・9層(テストピットの第3・4層)が相当する。



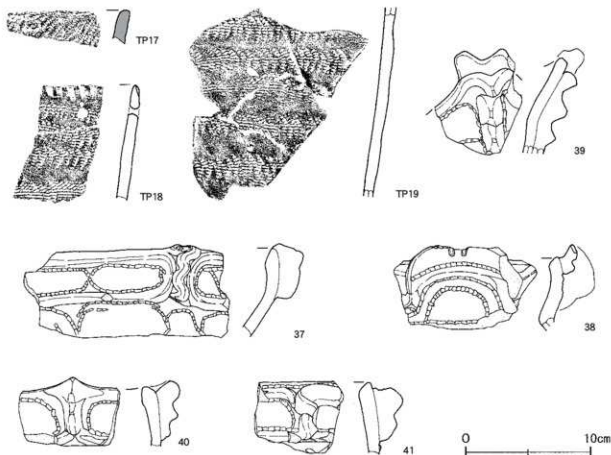
第34図 第2号遺物包含層出土状況実測図

土層解説

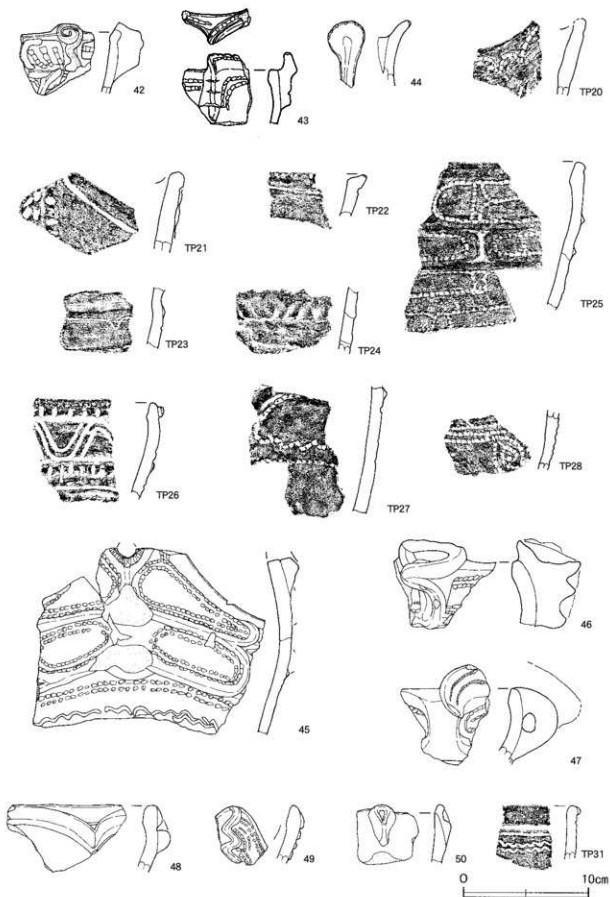
1	暗灰黄色	砂粒・鉄分少量, 炭化粒子・粘土粒子・細礫微量	6	黒褐色	粘土粒子・細礫・砂粒・樹木等の植物遺体少量
2	黒褐色	粘土粒子・細礫・砂粒・鉄分少量, 炭化物微量	7	黒褐色	粘土粒子中量, 砂粒・樹木等の植物遺体少量, 炭化物・ローム粒子・細礫微量
3	黒褐色	粘土粒子・砂粒・鉄分少量, 炭化粒子・細礫微量	8	黒褐色	樹木等の植物遺体少量, 炭化物・細礫・砂粒微量
4	灰黄褐色	細礫・砂粒・鉄分少量, 炭化物・粘土粒子微量	9	黒褐色	砂粒・樹木等の植物遺体少量, 細礫微量
5	黒褐色	砂粒中量, 粘土粒子・細礫少量, 炭化粒子・鉄分・樹木等の植物遺体微量	10	褐色	砂粒多量

遺物出土状況 縄文土器片10,347点, 土製品14点(土器片円盤13, 三角板状土製品1), 剥片を含む石器99点, 焼成粘土塊3点のほか, 混入したと考えられる弥生土器片1点, 土師器片134点, 須恵器片6点, 土師質土器片8点, 陶器片1点, 磁器片2点が出土した。縄文土器は, 前期5点, 中期9,646点(阿玉台式期596点, 加曾利E式期895点, 不明8,155点), 後期419点(称名寺式期182点, 不明237点), 中・後期の底部片277点が出土している。時期別の土器片の出土状況からは, 平面分布と垂直分布ともに顕著な違いは認められない。一部に大形の土器片が集中して出土している地点が存在するが, これは遺物包含層内に未検出の遺構が存在することが考えられる。

所見 出土土器の大半は, 阿玉台Ib式期から称名寺II式期のものであり, 同調査区から検出された遺構の時期より, やや先行する土器群構成である。トレンチの土層観察から, 遺物包含層が形成された後に, 住居等の遺構が掘り込まれたものと考えられる。傾斜方向から判断して, 調査区域外の南東方向に集落の中心が存在し, ゆるやかな斜面にむかって遺物が流れ込み, 遺物包含層が形成されたものと考えられる。



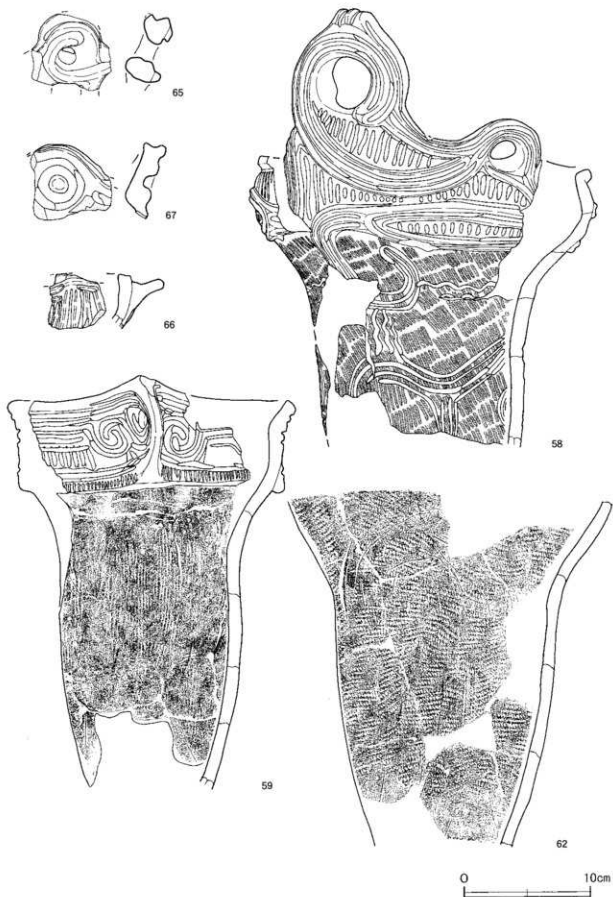
第35図 第2号遺物包含層出土遺物実測図(1)



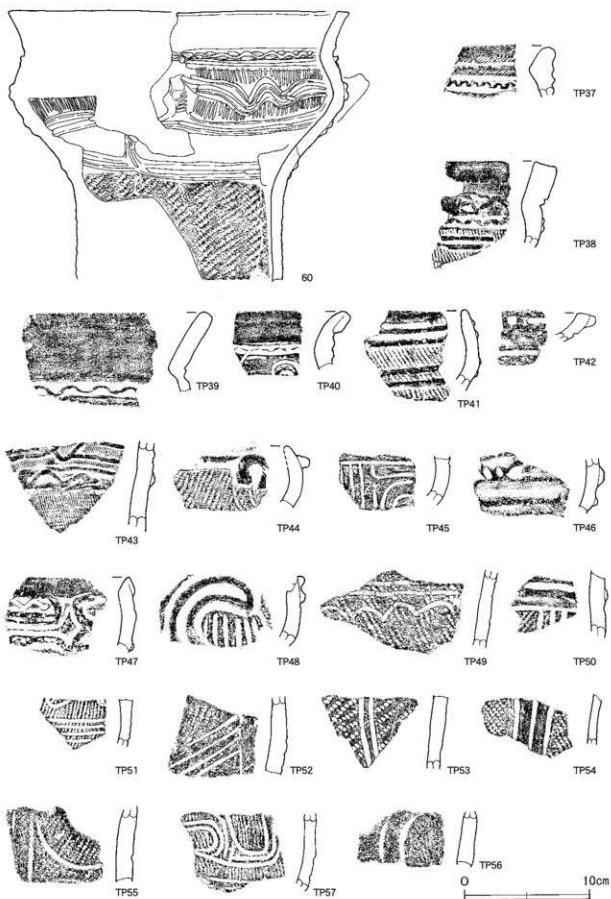
第36图 第2号遺物包含層出土遺物実測図(2)



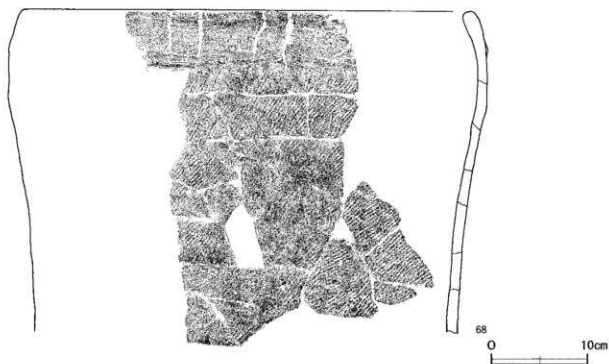
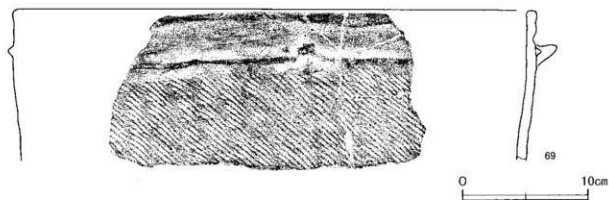
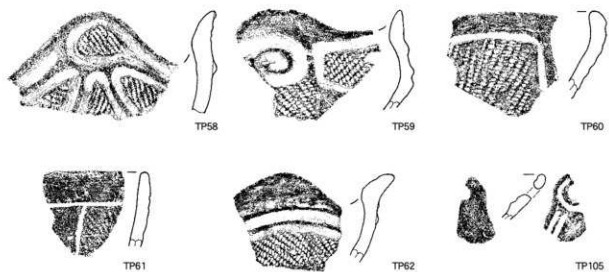
第37图 第2号遺物包含層出土遺物実測図(3)



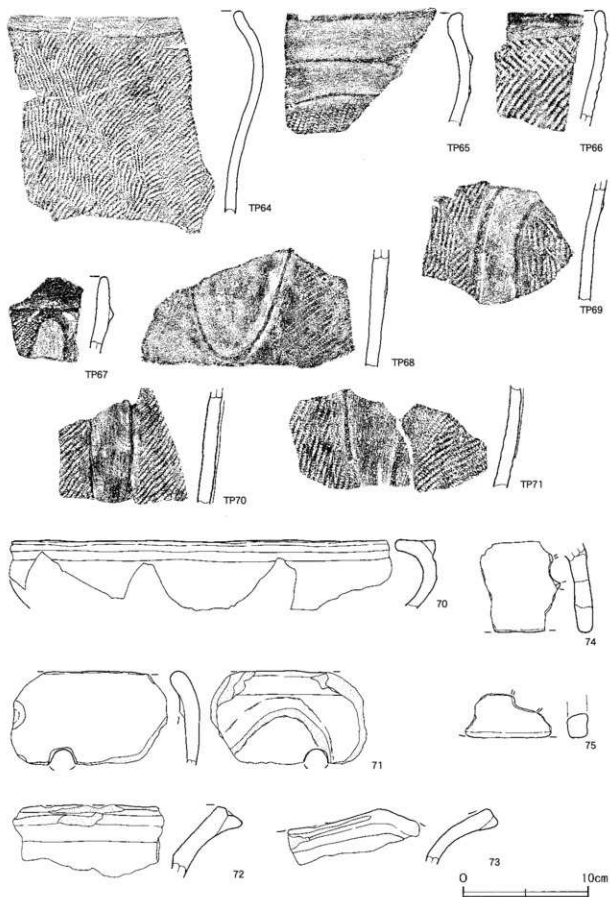
第38图 第2号遺物包含層出土遺物実測図(4)



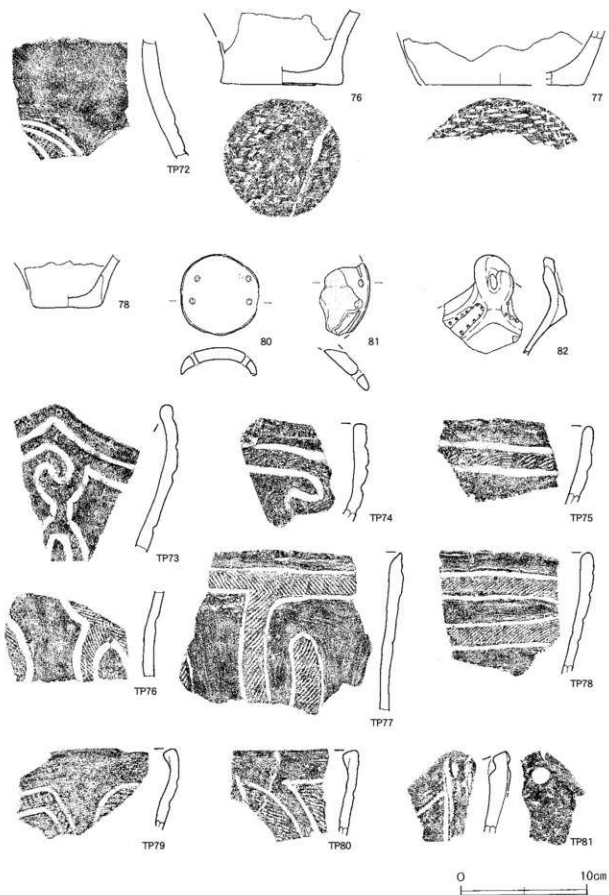
第39图 第2号遺物包含層出土遺物実測図(5)



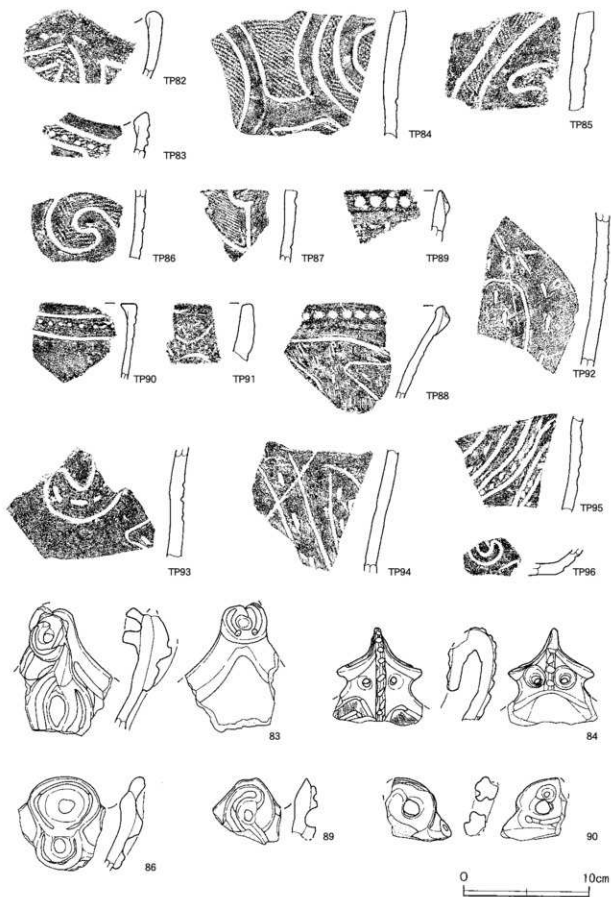
第40図 第2号遺物包含層出土遺物実測図(6)



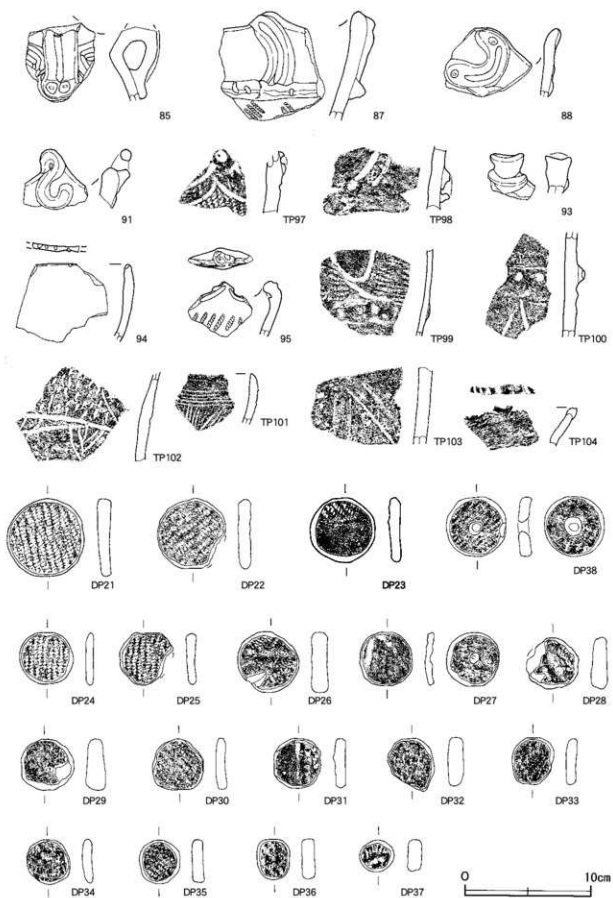
第41图 第2号遺物包含層出土遺物実測図(7)



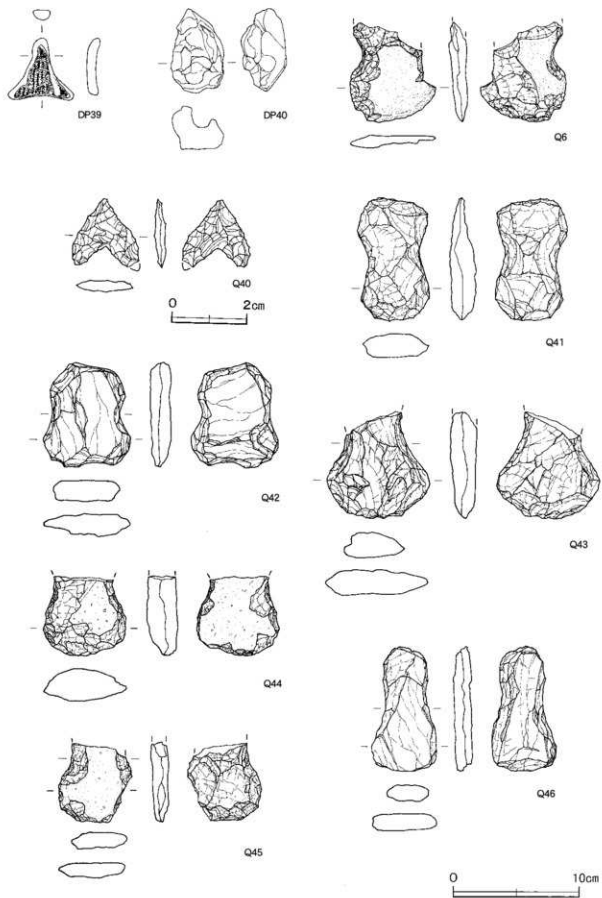
第42图 第2号遺物包含層出土遺物実測図(8)



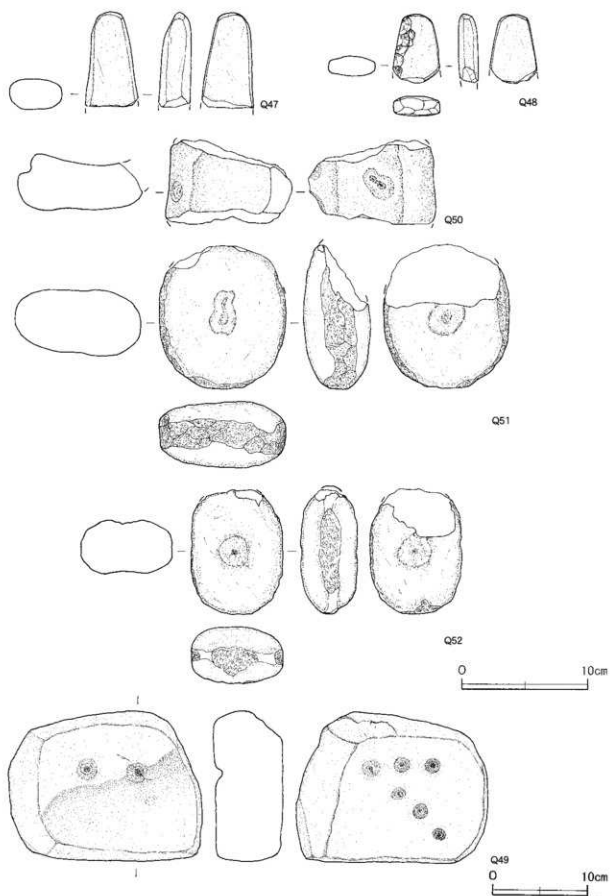
第43图 第2号遺物包含層出土遺物実測図(9)



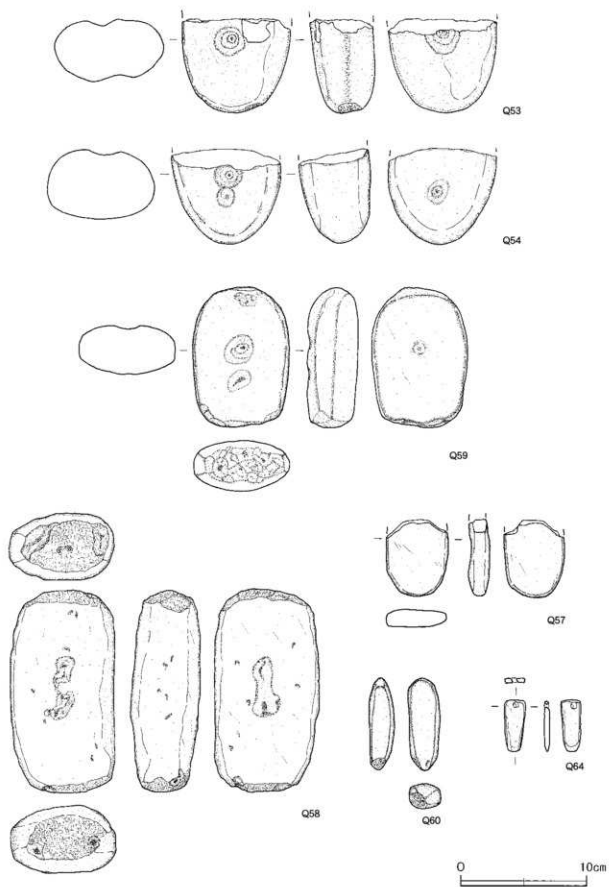
第44图 第2号遗址包舍层出土器物实测图(10)



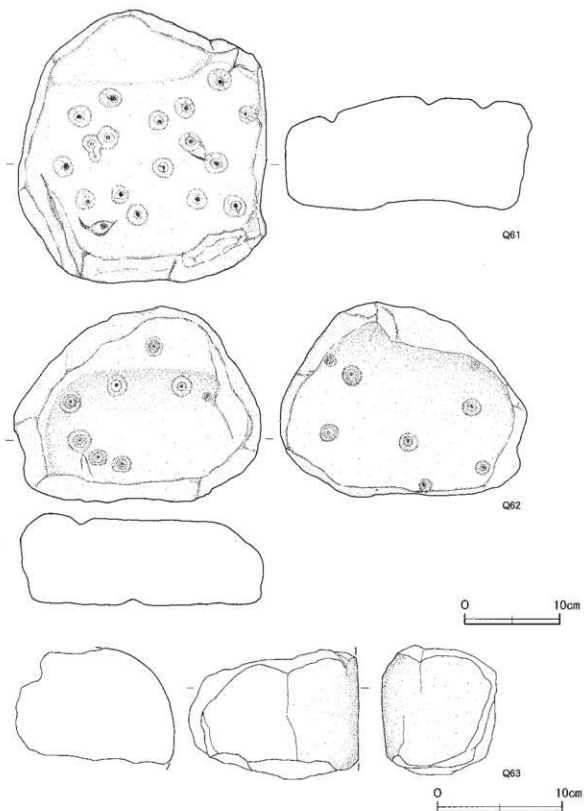
第45图 第2号遺物包含層出土遺物実測図(11)



第46図 第2号遺物包含層出土遺物実測図(12)



第47图 第2号遺物包含層出土遺物実測図(13)



第48図 第2号遺物包含層出土遺物実測図(14)

第2号遺物包含層出土遺物観察表(第35~48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP17	縄文土器	深鉢	-	(2.6)	-	灰石・石灰・ 雲母・繊維	にぶい橙	普通	L.Rの単線縄文	第4号 トレンチ	前期
TP18	縄文土器	深鉢	-	(3.2)	-	灰石・石灰・ 雲母・赤鉄粒子	にぶい赤橙	普通	口唇部外面に半截竹管による縦方向の条線文 貝殻押 捺文	第5号 トレンチ	前期 Ⅱ,Ⅲ

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	文様の特徴はか	出土位置	備考
TP19	縄文土器	深鉢	—	(15.1)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい赤焼	普通	貝殻押捺文	第5号トレンチ	前期中葉
37	縄文土器	深鉢	—	(7.3)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい赤焼	普通	珠帯にわたって結節状沈文 珠帯による渦巻き状のモチーフを口唇部から垂下	B 27	中期中葉 5% PL11
38	縄文土器	深鉢	—	(6.7)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい焼	普通	珠帯にわたって結節状沈文 口唇部にキズミと結節状沈文を有する突起	包含層中	中期中葉 5% PL11
39	縄文土器	深鉢	—	(8.3)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	焼成	普通	珠帯にわたって結節状沈文 底部部に突起貼付	包含層中	中期中葉 5% PL11
40	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい焼	普通	珠帯による楕円形区画文 珠帯にわたって結節状沈文	包含層中	中期中葉 5% PL11
41	縄文土器	深鉢	—	(5.7)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい焼	普通	珠帯による楕円形区画文 珠帯にわたって結節状沈文	包含層中	中期中葉 5% PL11
42	縄文土器	深鉢	—	(5.6)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい赤焼	普通	珠帯による楕円形区画文 珠帯による渦巻き状のモチーフを口唇部から垂下	第1号トレンチ	中期中葉 5% PL11
43	縄文土器	深鉢	—	(5.6)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい赤焼	普通	珠帯にわたって結節状沈文 口唇部にキズミと結節状沈文を有する突起	第5号トレンチ	中期中葉 5% PL11
44	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい赤焼	普通	キズミを有する突起	第5号トレンチ	中期中葉 5% PL11
TP20	縄文土器	深鉢	—	(6.1)	—	長石・石英・炭粉	灰焼	普通	口唇部に結節状沈文	第4号トレンチ	中期中葉 5% PL11
TP21	縄文土器	深鉢	—	(5.3)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい焼	普通	口唇部に沈文が凸る キズミを有する珠帯文	B 26	中期中葉 5% PL11
TP22	縄文土器	深鉢	—	(3.3)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい焼	普通	口唇部にキズミを有する珠帯が凸る 珠帯にわたって結節状沈文	第5号トレンチ	中期中葉 5% PL11
TP23	縄文土器	深鉢	—	(4.8)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい焼	普通	珠帯にわたって結節状沈文	第1号トレンチ	中期中葉 5% PL11
TP24	縄文土器	深鉢	—	(5.3)	—	長石・石英・炭粉	にぶい赤焼	普通	ヒダ状凸	包含層中	中期中葉 5% PL11
TP25	縄文土器	深鉢	—	(11.8)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい焼	普通	珠帯による楕円形区画文 珠帯にわたって結節状沈文	包含層中	中期中葉 5% PL11
TP26	縄文土器	深鉢	—	(7.6)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	焼	普通	キズミを有する珠帯文 珠帯にわたって結節状沈文	第1号トレンチ	中期中葉 5% PL11
TP27	縄文土器	深鉢	—	(10.1)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい焼	普通	珠帯にわたって結節状沈文	B 26	中期中葉 5% PL11
TP28	縄文土器	深鉢	—	(4.7)	—	長石・石英・炭粉	灰焼	普通	結節状沈文によって文様を挿入	包含層中	中期中葉 5% PL11
45	縄文土器	深鉢	—	(14.7)	—	長石・石英・炭粉	焼	普通	珠帯による楕円形区画文 珠帯にわたって複列の結節状沈文	包含層中	中期中葉 5% PL11
46	縄文土器	深鉢	—	(7.0)	—	長石・石英・炭粉	にぶい赤焼	普通	珠帯にわたって複列の結節状沈文 珠帯による文様を口唇部から垂下	包含層中	中期中葉 5% PL11
47	縄文土器	深鉢	—	(8.0)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい焼	普通	縦溝状把手に複列の結節状沈文を有する突起を貼付	第5号トレンチ	中期中葉 5% PL11
48	縄文土器	深鉢	—	(5.3)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい焼	普通	V字状の隆帯文	第5号トレンチ	中期中葉 5% PL11
49	縄文土器	深鉢	—	(4.9)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい焼	普通	複列の結節状沈文 底部部から波状の隆帯を垂下	包含層中	中期中葉 5% PL11
50	縄文土器	深鉢	—	(4.6)	—	長石・石英・炭粉	にぶい焼	普通	口唇部に珠帯による突起を貼付	第5号トレンチ	中期中葉 5% PL11
TP29	縄文土器	深鉢	—	(9.7)	—	長石・石英・炭粉	灰焼	普通	口唇部及び胴部にキズミ目列が凸る 隆帯文	第5号トレンチ	中期中葉 5% PL11
TP30	縄文土器	深鉢	—	(6.3)	—	長石・石英・炭粉	灰焼	普通	複列の結節状沈文で文様を挿入 口唇部にキズミ 隆帯文	包含層中	中期中葉 5% PL11
TP31	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい赤焼	普通	珠帯にわたって複列の結節状沈文 波状の並行沈文	包含層中	中期中葉 5% PL11
TP32	縄文土器	深鉢	—	(10.9)	—	長石・石英・炭粉	にぶい焼	普通	複列の結節状沈文で波状の文様を挿入 隆帯文	B 27	中期中葉 5% PL11
51	縄文土器	深鉢	—	(4.1)	—	長石・石英・炭粉	にぶい赤焼	普通	珠帯にわたって再押文	第5号トレンチ	中期中葉 5% PL11
52	縄文土器	深鉢	—	(4.8)	—	長石・石英・炭粉	にぶい焼	普通	珠帯にわたって複列の結節状沈文 波状の突起を有する隆帯文	第4号トレンチ	中期中葉 5% PL11
53	縄文土器	深鉢	—	(5.8)	—	長石・石英・炭粉	にぶい赤焼	普通	珠帯にわたって沈文 キズミを有する隆帯によって文様を挿入	包含層中	中期中葉 5% PL11
54	縄文土器	深鉢	—	(5.9)	—	長石・石英・炭粉	にぶい焼	普通	キズミを有する隆帯によって口唇部と胴部を区別 底部にわたって結節状沈文 胴部はLRの単節状沈文	第1号トレンチ	中期中葉 5% PL11
55	縄文土器	深鉢	—	(7.7)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい焼	普通	波状の突起を有する隆帯文 珠帯にわたって沈文・結節状沈文 R.Lの単節状沈文	第5号トレンチ	中期中葉 5% PL11
56	縄文土器	深鉢	—	(7.8)	—	長石・石英・炭粉	にぶい焼	普通	底部部・隆帯による波状の突起 LRの単節状沈文	第1号トレンチ	中期中葉 5% PL11
57	縄文土器	深鉢	—	(5.0)	—	長石・石英・炭粉	灰焼	普通	口唇部に隆帯文	B 263	中期中葉 5% PL11
TP33	縄文土器	深鉢	—	(5.7)	—	長石・石英・炭粉	にぶい焼	普通	口唇部に隆帯文 LRの単節状沈文	第4号トレンチ	中期中葉 5% PL11
TP34	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	長石・石英・炭粉	浅黄	普通	口唇部に隆帯が凸る 隆帯にはR.Lの単節状沈文を施す 口唇部には3本の沈文	第1号トレンチ	中期中葉 5% PL11
TP35	縄文土器	深鉢	—	(6.5)	—	長石・石英・炭粉	にぶい赤焼	普通	珠帯にわたって沈文 R.Lの単節状沈文	第5号トレンチ	中期中葉 5% PL11
TP36	縄文土器	深鉢	—	(5.3)	—	長石・石英・炭粉	浅黄焼	普通	横S字状の隆帯文	B 266	中期中葉 5% PL11
58	縄文土器	深鉢	(26.0)	(34.8)	—	長石・石英・炭粉	にぶい焼	普通	珠帯と沈文によって加飾された把手 口唇部は沈文が凸る隆帯によって区別 胴部はLRの単節状沈文	B 244	中期後葉 60% PL 9
59	縄文土器	深鉢	(21.8)	(32.9)	—	長石・石英・炭粉	緑赤焼	普通	縦溝状把手 口唇部は沈文によって文様を挿入 R.Lの単節状沈文	B 264	中期後葉 40% PL 9
60	縄文土器	深鉢	(27.0)	(31.7)	—	長石・石英・炭粉	にぶい赤焼	普通	口唇部に交互刺突による連続の字状文と波状の隆帯が凸る 胴部はR.Lの単節状沈文	B 244	中期後葉 40% PL 9
61	縄文土器	深鉢	—	(13.7)	—	長石・石英・炭粉・赤色粒子	にぶい赤焼	普通	口唇部に交互刺突による連続の字状文 R.Lの単節状沈文	B 244	中期中葉 100% PL11
62	縄文土器	深鉢	—	(27.6)	—	長石・石英・炭粉	にぶい焼	普通	R.Lの単節状沈文	B 244	中期中葉 40% PL11
63	縄文土器	深鉢	—	(11.7)	—	長石・石英・炭粉	灰黄焼	普通	沈文によって加飾された縦溝状把手	B 272	中期後葉 5% PL11
64	縄文土器	深鉢	—	(10.5)	—	長石・石英・炭粉	にぶい焼	普通	キズミを有する隆帯文 交互刺突による連続の字状文	第1号トレンチ	中期後葉 5% PL11
65	縄文土器	深鉢	—	(6.0)	—	長石・石英・炭粉	にぶい赤焼	普通	珠帯と沈文によって文様を挿入 円孔を有する	包含層中	中期後葉 5% PL11

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地産	文様の特徴ほか	出土位置	備考
66	縄文土器	深鉢	—	(4.1)	—	長石・石英・雲母・赤色粘土	橙	普通	口唇部に突起 隆帯と比較で文様を提出	第5号 I3c, IV11	中期後葉 5%
67	縄文土器	深鉢	—	(5.8)	—	長石・石英・雲母	にがい黄緑	普通	隆帯と沈線によって文様を提出	B2c6	中期後葉 5% IV11
TP27	縄文土器	深鉢	—	(4.0)	—	長石・石英・雲母・赤色粘土	にがい黄	普通	交互刺突による連続コの字状文	第5号 I3c, IV11	中期後葉
TP28	縄文土器	深鉢	—	(6.7)	—	長石・石英・雲母	黄灰	普通	交互刺突による連続コの字状文 染織文を施した後、沈線をもつ隆帯を帯付	第5号 I3c, IV11	中期後葉
TP29	縄文土器	深鉢	—	(6.3)	—	長石・石英・雲母	にがい黄	普通	交互刺突による連続コの字状文	B215	中期後葉
TP40	縄文土器	深鉢	—	(4.7)	—	長石・石英・赤色粘土	にがい黄緑	普通	交互刺突による連続コの字状文 沈線文	包含層中	中期後葉
TP41	縄文土器	深鉢	—	(6.4)	—	長石・石英・雲母・赤色粘土	にがい黄	普通	帯糸文施文後、隆帯を帯付	第2号 I3c, IV11	中期後葉
TP42	縄文土器	浅鉢	—	(2.4)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部に沈線と円形刺突文	包含層中	中期後葉
TP43	縄文土器	深鉢	—	(7.3)	—	長石・石英	橙	普通	帯糸文施文後、隆帯を帯付	第1号 I3c, IV11	中期後葉 10%
TP44	縄文土器	深鉢	—	(4.9)	—	長石・石英・雲母	灰褐	普通	隆帯で文様を提出 R.Lの単線縄文	包含層中	中期後葉
TP45	縄文土器	深鉢	—	(4.0)	—	長石・石英	にがい黄	普通	沈線で文様を提出	包含層中	中期後葉
TP46	縄文土器	深鉢	—	(4.0)	—	長石・石英・赤色粘土	浅黄緑	普通	隆帯で文様を提出 押Eを有する貼付文	第5号 I3c, IV11	中期後葉
TP47	縄文土器	深鉢	—	(5.9)	—	長石・石英・雲母	黄灰	普通	沈線が白う隆帯で文様を提出 隆帯上にL.Rの単線縄文を施文	第5号 I3c, IV11	中期後葉
TP48	縄文土器	深鉢	—	(5.5)	—	長石・石英	にがい黄	普通	沈線が白う隆帯で文様を提出 縦位の沈線文	包含層中	中期後葉
TP49	縄文土器	深鉢	—	(6.2)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	沈線で文様を提出 L.Rの単線縄文	第4号 I3c, IV11	中期後葉
TP50	縄文土器	深鉢	—	(5.3)	—	長石・石英	にがい黄	普通	沈線が白う隆帯文 R.Lの単線縄文	包含層中	中期後葉
TP51	縄文土器	深鉢	—	(3.8)	—	長石・石英・赤色粘土	灰褐	普通	沈線で文様を提出 帯糸文	第5号 I3c, IV11	中期後葉
TP52	縄文土器	深鉢	—	(6.3)	—	長石・石英・雲母	にがい黄	普通	沈線文を磨り消し L.Rの単線縄文	第2号 I3c, IV11	中期後葉
TP53	縄文土器	深鉢	—	(5.8)	—	長石・石英・雲母	にがい黄	普通	沈線による懸垂文を磨り消し R.Lの単線縄文	包含層中	中期後葉
TP54	縄文土器	深鉢	—	(4.0)	—	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	沈線による懸垂文を磨り消し R.Lの単線縄文	包含層中 I11	中期後葉 10%
TP55	縄文土器	深鉢	—	(6.0)	—	長石・石英	にがい黄緑	普通	沈線による懸垂文を磨り消し R.Lの単線縄文	包含層中	中期後葉
TP56	縄文土器	深鉢	—	(4.5)	—	長石・石英・赤色粘土	にがい黄緑	普通	沈線による懸垂文を磨り消し L.Rの単線縄文	包含層中	中期後葉
TP57	縄文土器	深鉢	—	(6.2)	—	長石・石英・雲母・赤色粘土	にがい黄	普通	沈線で文様を提出 帯糸文	B215	中期後葉 5% IV11
TP58	縄文土器	深鉢	—	(8.2)	—	長石・石英・雲母・赤色粘土	にがい黄緑	普通	沈線が白う隆帯で区画文 R.Lの単線縄文	第1号 I3c, IV11	中期後葉 10%
TP59	縄文土器	深鉢	—	(8.0)	—	長石・石英・雲母・赤色粘土	浅黄緑	普通	沈線が白う隆帯で溝垂文・区画文 L.Rの単線縄文	包含層中	中期後葉
TP60	縄文土器	深鉢	—	(6.9)	—	長石・石英・雲母	にがい黄	普通	沈線による区画文 R.Lの単線縄文	包含層中	中期後葉 I11
TP61	縄文土器	深鉢	—	(5.9)	—	長石・石英	明赤褐	普通	沈線による区画文 R.Lの単線縄文	包含層中	中期後葉
TP62	縄文土器	深鉢	—	(6.9)	—	長石・石英・雲母	にがい黄緑	普通	沈線が白う隆帯が底なる R.Lの単線縄文	包含層中	中期後葉 I11
68	縄文土器	深鉢	[16.4]	(33.8)	—	長石・石英	にがい黄	普通	口唇部に隆帯帯が底なる R.Lの単線縄文	B215	中期後葉 20%
69	縄文土器	深鉢	[41.0]	(12.0)	—	長石・石英・雲母	にがい黄	普通	口唇部に言状突起を有する隆帯帯が底なる L.Rの単線縄文	B216	中期後葉 5% IV11
TP64	縄文土器	深鉢	—	(16.0)	—	長石・石英・雲母	にがい黄	普通	口唇部に無文帯 R.Lの単線縄文	B217	中期後葉 I12
TP65	縄文土器	深鉢	—	(9.0)	—	長石・石英・雲母	浅黄緑	普通	口唇部に隆帯帯が底なる L.Rの単線縄文	包含層中	中期後葉
TP66	縄文土器	深鉢	—	(9.2)	—	長石・石英・赤色粘土	浅黄	普通	口唇部に無文帯 O段多量によるR.Lの単線縄文を以て縁部は横方向に施文、胴部は縦方向に施文	第4号 I3c, IV11	中期後葉
TP67	縄文土器	深鉢	—	(6.2)	—	長石・石英	にがい黄	普通	口唇部に隆帯帯が底なる 逆J字状の隆帯帯による懸垂文 R.Lの単線縄文	第5号 I3c, IV11	中期後葉 I12
TP68	縄文土器	深鉢	—	(9.2)	—	長石・石英・雲母	にがい黄緑	普通	J字状の隆帯帯による懸垂文 R.Lの単線縄文	包含層中	中期後葉
TP69	縄文土器	深鉢	—	(9.7)	—	長石・石英・雲母	にがい黄	普通	2本一組の隆帯帯による懸垂文 O段多量によるR.Lの単線縄文	包含層中	中期後葉
TP70	縄文土器	深鉢	—	(9.3)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	2本一組の隆帯帯による懸垂文 R.Lの単線縄文	B2c6	中期後葉
TP71	縄文土器	深鉢	—	(8.1)	—	長石・石英・雲母	にがい黄緑	普通	2本一組の隆帯帯による懸垂文 R.Lの単線縄文	B2c0	中期後葉
70	縄文土器	深鉢	[33.4]	(5.3)	—	長石・石英・雲母	にがい黄	普通	無文 口唇部に隆帯帯が底なる	B2c4	中期 5%
71	縄文土器	深鉢	—	(7.5)	—	長石・石英・雲母・赤色粘土	にがい黄緑	普通	円孔を有する 内面にハダレ	包含層中	中期 5%
72	縄文土器	浅鉢	—	(5.7)	—	長石・石英・雲母	にがい黄	普通	口唇部に隆帯帯が底なる	第4号 I3c, IV11	中期 5%
73	縄文土器	浅鉢	—	(4.4)	—	長石・石英・雲母・赤色粘土	橙	普通	口唇部に沈線文	第1号 I3c, IV11	中期 5%
74	縄文土器	器台	—	(7.1)	—	長石・石英・雲母・赤色粘土	にがい黄緑	普通	円孔を有する 無文	第5号 I3c, IV11	中期 5%
75	縄文土器	器台	—	(3.4)	—	長石・石英・雲母・赤色粘土	にがい黄	普通	円孔を有する 無文	第3号 I3c, IV11	中期 5%
76	縄文土器	深鉢	—	(5.7)	8.6	長石・石英・雲母・赤色粘土	明赤褐	普通	無文 底辺網代煎	B210	中・後期 5%
77	縄文土器	深鉢	—	(4.5)	[13.0]	長石・石英・雲母・赤色粘土	にがい黄	普通	無文 底辺網代煎	第5号 I3c, IV11	中・後期 5%
78	縄文土器	深鉢	—	(4.1)	4.3	長石・石英・雲母	にがい黄	普通	無文	第5号 I3c, IV11	中・後期 10%
TP72	縄文土器	深鉢	—	(9.3)	—	長石・石英・赤色粘土	にがい黄	普通	沈線で文様を提出 R.Lの単線縄文	B2c4	中期

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
80	縄文土器	蓋	6.4	2.1	—	長石・石英	灰青	普通	無文 円孔を有する	第1号 トレンチ B5	後期初期 P.15
81	縄文土器	蓋	9.3	3.3	—	長石・石英	灰黄青	普通	沈澱文 円孔を有する	包含層中 トレンチ	後期初期 30%
82	縄文土器	深鉢	—	7.7	—	長石・赤色粒子	灰白	普通	蓋頂部に隆帯によって文様を抽出 口唇部に隆帯によって突起を施す	第5号 トレンチ B5	後期初期 P.12
T73	縄文土器	深鉢	—	11.6	—	長石・石英	にぶい黄	普通	蓋頂部によってJ字状のモチーフを抽出 L.Rの単筋縄文	包含層中 トレンチ	後期初期
T74	縄文土器	深鉢	—	7.8	—	長石・石英・ 炭屑	黄	普通	沈澱による区画文 L.Rの単筋縄文	包含層中 トレンチ	後期初期
T75	縄文土器	深鉢	—	6.23	—	長石・石英・ 炭屑	にぶい黄	普通	沈澱による区画文 R.Lの単筋縄文	第2号 トレンチ B2	後期初期
T76	縄文土器	深鉢	—	6.8	—	長石・石英・ 炭屑	灰青	普通	沈澱による区画文 L.Rの単筋縄文	第1号 トレンチ B1	後期初期
T77	縄文土器	深鉢	—	12.5	—	長石・石英・ 炭屑	明赤黄	普通	沈澱区画によってJ字状のモチーフを抽出 R.Lの単筋縄文	第5号 トレンチ B5	後期初期
T78	縄文土器	深鉢	—	9.6	—	長石・石英・ 炭屑	にぶい赤	普通	沈澱による区画文 L.Rの単筋縄文	第2号 トレンチ B2	後期初期
T79	縄文土器	深鉢	—	6.4	—	長石・石英・ 炭屑	にぶい黄	普通	沈澱による区画文 R.Lの単筋縄文	B 2f5	後期初期
T80	縄文土器	深鉢	—	6.8	—	長石・石英・ 炭屑	にぶい黄	普通	沈澱による区画文 R.Lの単筋縄文	第4号 トレンチ B4	後期初期
T81	縄文土器	深鉢	—	6.6	—	長石・石英・ 炭屑	灰白	普通	蓋頂部より隆帯を造り 内面に円孔を有する 沈澱区画内はL.Rの単筋縄文	第1号 トレンチ B1	後期初期
T82	縄文土器	深鉢	—	5.4	—	長石・石英	浅黄	普通	沈澱による区画文 L.Rの単筋縄文	第4号 トレンチ B4	後期初期
T83	縄文土器	深鉢	—	6.4	—	長石・石英	にぶい黄	普通	沈澱による区画文 区画内はL.Rの単筋縄文・円形刺突文	第1号 トレンチ B1	後期初期
T84	縄文土器	深鉢	—	10.0	—	長石・石英・ 炭屑・赤色粒子	黒黄	普通	沈澱による区画文 L.Rの単筋縄文	B 215	後期初期
T85	縄文土器	深鉢	—	6.0	—	長石・石英・ 赤色粒子	黄	普通	沈澱による区画文 L.Rの単筋縄文	第4号 トレンチ B4	後期初期
T86	縄文土器	深鉢	—	5.5	—	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい黄	普通	沈澱による区画文 L.Rの単筋縄文	第4号 トレンチ B4	後期初期
T87	縄文土器	深鉢	—	5.8	—	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい黄	普通	沈澱による区画文 L.Rの単筋縄文	第1号 トレンチ B1	後期初期
T88	縄文土器	深鉢	—	7.3	—	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい黄	普通	沈澱による区画文 隆帯上には円形刺突文を施す 沈澱の単筋縄文	包含層中 トレンチ	後期初期 P.12
T89	縄文土器	深鉢	—	4.1	—	長石・石英	暗灰黄	普通	口唇部に隆帯を造り 隆帯上には円形刺突文を施す L.Rの単筋縄文	包含層中 トレンチ	後期初期
T90	縄文土器	深鉢	—	6.0	—	長石・石英	にぶい赤	普通	沈澱区画内に連続する円形刺突文	第4号 トレンチ B4	後期初期
T91	縄文土器	深鉢	—	4.7	—	長石・石英・ 炭屑	にぶい黄	普通	沈澱区による区画文	包含層中 トレンチ	後期初期
T92	縄文土器	深鉢	—	12.3	—	長石・石英・ 炭屑	にぶい黄	普通	沈澱区画内に列点文	B 2f6	後期初期
T93	縄文土器	深鉢	—	6.7	—	長石・石英・ 炭屑・赤色粒子	にぶい黄	普通	沈澱区画内に列点文	包含層中 トレンチ	後期初期 P.12
T94	縄文土器	深鉢	—	6.7	—	長石・石英・ 炭屑・赤色粒子	灰青	普通	沈澱区画内に列点文	第4号 トレンチ B4	後期初期
T95	縄文土器	深鉢	—	7.6	—	長石・石英	にぶい黄	普通	沈澱区画内に列点文	第1号 トレンチ B1	後期初期
T96	縄文土器	深鉢	—	1.9	2.2	長石・石英・ 赤色粒子	灰青	普通	沈澱区画によってJ字状のモチーフを抽出 R.Lの単筋縄文	第1号 トレンチ B1	後期初期
T97	縄文土器	深鉢	—	10.2	—	長石・石英	にぶい黄	普通	蓋頂部より沈澱を有する隆帯を造り 蓋頂部に隆帯と区画で連続するモチーフを抽出	包含層中 トレンチ	後期初期 P.12
94	縄文土器	深鉢	—	7.8	—	長石・石英・ 炭屑	暗赤黄	普通	キズミを有する隆帯と沈澱によって加飾された把手 中空で外・内面に対となる円孔を有する L.Rの単筋縄文	B 2f4	後期初期 5%, P.12
95	縄文土器	深鉢	—	6.2	—	長石・石英・ 炭屑	にぶい黄	普通	沈澱を有する隆帯による塊状把手	第2号 トレンチ B2	後期初期
96	縄文土器	深鉢	—	7.4	—	長石・石英	にぶい赤	普通	沈澱を有する隆帯によって8の字状のモチーフを抽出	包含層中 トレンチ	後期初期 5%, P.12
97	縄文土器	深鉢	—	6.6	—	長石・石英	灰青	普通	沈澱を有するノの字状の隆帯を施す L.Rの単筋縄文	第5号 トレンチ B5	後期初期
98	縄文土器	深鉢	—	5.4	—	長石・石英・ 炭屑・赤色粒子	黄	普通	沈澱を有するCの字状の隆帯を施す	包含層中 トレンチ	後期初期 5%, P.12
99	縄文土器	深鉢	—	5.2	—	長石・石英・ 炭屑	灰青	普通	沈澱を有する隆帯によって文様を抽出	包含層中 トレンチ	後期初期 5%
90	縄文土器	深鉢	—	5.1	—	長石・石英	にぶい黄	普通	隆帯と沈澱、円形附付文で文様を抽出	第4号 トレンチ B4	後期初期 5%
91	縄文土器	深鉢	—	4.4	—	長石・石英	にぶい黄	普通	隆帯によって逆S字状の文様を抽出	包含層中 トレンチ	後期初期 5%, P.12
T97	縄文土器	深鉢	—	5.0	—	長石・石英・ 炭屑	にぶい黄	普通	沈澱と円形附付文によって文様を抽出 R.Lの単筋縄文	B 2f6	後期初期
T98	縄文土器	深鉢	—	5.0	—	長石・石英・ 炭屑	にぶい黄	普通	隆帯上の沈澱端部に円形刺突文を施す	包含層中 トレンチ	後期初期
93	縄文土器	深鉢	—	3.7	—	長石・石英・ 炭屑	にぶい黄	普通	蓋頂部に円状の突起を有する 隆帯文	第1号 トレンチ B1	後期 5%
94	縄文土器	深鉢	—	6.1	—	長石・石英・ 炭屑	にぶい黄	普通	無文 口唇部にキズミを有する	B 2e2	後期 5%
95	縄文土器	深鉢	—	4.2	—	長石・石英・ 炭屑	にぶい黄	普通	蓋頂部に刺突を有する突起を施す 口唇部に沈澱文 L.Rの単筋縄文	第2号 トレンチ B2	後期 5%
T99	縄文土器	深鉢	—	7.0	—	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい黄	普通	キズミを有する隆帯が造る L.Rの単筋縄文	第5号 トレンチ B5	後期
T100	縄文土器	深鉢	—	6.3	—	長石・石英	にぶい黄	普通	キズミを有する隆帯が造る 沈澱文	第4号 トレンチ B4	後期
T101	縄文土器	深鉢	—	4.0	—	長石・石英	にぶい黄	普通	沈澱によって文様を抽出	包含層中 トレンチ	後期 P.12
T102	縄文土器	深鉢	—	7.2	—	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい黄	普通	沈澱と列点文によって文様を抽出	包含層中 トレンチ	後期
T103	縄文土器	深鉢	—	6.1	—	長石・石英	にぶい黄	普通	平行する沈澱文を造る	包含層中 トレンチ	後期
T104	縄文土器	深鉢	—	3.6	—	長石・石英・ 炭屑	黒黄	普通	口唇部に突起とキズミ	第5号 トレンチ B5	後期 P.12
T105	縄文土器	浅鉢	—	3.6	—	長石・石英・ 炭屑	にぶい黄	普通	円孔を有する 内面に沈澱で文様を抽出	B 2f5	中期

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	特 徴	出土位置	備考
DP21	土器片円盤	6.2	6.1	1.0	—	48.1	両縁部研磨	包含層中	P.15
DP22	土器片円盤	5.5	5.5	1.0	—	(36.0)	両縁部研磨 一部欠損	包含層中	
DP23	土器片円盤	5.1	5.2	1.0	—	30.7	両縁部研磨	包含層中	P.15
DP24	土器片円盤	4.1	4.3	0.6	—	14.3	両縁部研磨	第1号 トレント	
DP25	土器片円盤	4.1	4.3	0.8	—	(17.2)	両縁部研磨 一部欠損	包含層中	
DP26	土器片円盤	4.8	4.9	1.3	—	(38.5)	両縁部研磨 一部欠損	包含層中	P.15
DP27	土器片円盤	4.2	4.2	0.7	—	15.5	両縁部研磨 内面からの穿孔を施す	包含層中	P.15
DP28	土器片円盤	4.1	4.1	1.3	—	(22.3)	両切部研磨 一部欠損	包含層中	
DP29	土器片円盤	4.1	4.2	1.5	—	28.5	両縁部研磨 一部欠損	第5号 トレント	
DP30	土器片円盤	4.0	4.0	0.8	—	14.8	両縁部研磨	包含層中	
DP31	土器片円盤	3.9	3.7	1.0	—	17.1	両縁部研磨	包含層中	P.15
DP32	土器片円盤	4.2	3.8	1.2	—	21.8	両縁部研磨 未製品	包含層中	
DP33	土器片円盤	3.7	3.2	0.9	—	14.2	両縁部研磨	第1号 トレント	
DP34	土器片円盤	3.5	3.4	0.8	—	12.3	両縁部研磨	包含層中	
DP35	土器片円盤	3.4	3.2	0.9	—	12.6	両縁部研磨	包含層中	P.15
DP36	土器片円盤	3.2	2.8	1.1	—	11.7	両縁部研磨	第4号 トレント	P.15
DP37	土器片円盤	2.5	2.8	1.2	—	7.8	両縁部研磨	第1号 トレント	P.15
DP38	土器片円盤	4.7	4.8	1.1	0.7	24.3	両縁部研磨 有孔	B 2 g	P.15
DP39	三角板状 土製品	5.0	5.2	1.0	—	15.6	両縁部を入念に研磨し、捺りを作す	包含層中	P.15
DP40	焼成粘土塊	6.5	4.2	3.6	—	64.9	指頭痕を有する	包含層中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q 6	打製石斧	(7.9)	6.8	1.4	(82.5)	安山岩	分銅形 両面調整 表面及び裏面に磨礫面を残す	B 2 c	
Q 9	石鏃	(1.8)	1.8	(3.3)	(6.4)	チャート	両面押込形 両基無茎痕	B 2 b	P.15
Q 41	打製石斧	9.7	5.7	2.1	128.5	ホルンフェルス	分銅形 両面調整	B 2 b	P.15
Q 42	打製石斧	8.3	7.0	1.7	(42.1)	雲母片岩	分銅形 両面調整	包含層中	P.15
Q 43	打製石斧	(8.4)	8.2	2.1	(65.7)	雲母片岩	分銅形 両面調整	第2号 トレント	
Q 44	打製石斧	(6.3)	6.6	2.4	(33.4)	安山岩	分銅形 両面調整 表面及び裏面に磨礫面を残す	第4号 トレント	
Q 45	打製石斧	(6.3)	(5.9)	1.4	(42.2)	安山岩	分銅形 両面調整 表面に磨礫面を残す	包含層中	
Q 46	打製石斧	9.9	5.2	1.4	86.2	雲母片岩	板形 両面調整	第4号 トレント	P.15
Q 47	磨製石斧	(7.4)	4.1	2.5	(36.5)	砂岩	定角式 全面を研磨 刃部欠損 板熱痕を有する	第1号 トレント	P.15
Q 48	磨製石斧	(5.5)	(3.8)	1.6	(8.6)	ホルンフェルス	定角式 全面を研磨 刃部欠損 下部は単純し、割れ口は不明瞭	第4号 トレント	
Q 49	石皿	15.8	20.1	7.4	249.6	花崗岩	表面がわずかに凹む 両石併用	B 2 c	
Q 50	石皿	(6.6)	10.1	4.6	(33.1)	安山岩	表面が皿状に凹む 両石併用	B 2 c	
Q 51	磨石	(11.3)	10.0	5.3	(88.8)	安山岩	両面に使用痕 下部部及び側面に敲打痕 両石併用	B 2 g	
Q 52	磨石	(9.9)	7.3	4.3	(33.7)	安山岩	両面に使用痕 磨石・両石併用	第1号 トレント	
Q 53	磨石	(7.4)	(8.7)	(5.2)	(36.8)	安山岩	両面に使用痕 磨石・両石併用	第1号 トレント	
Q 54	磨石	(7.6)	(6.7)	(5.8)	(28.4)	安山岩	両面に使用痕 両石併用	包含層中	
Q 55	磨石	(6.0)	5.0	1.7	(36.9)	安山岩	両面に使用痕	第5号 トレント	
Q 56	磨石	16.2	8.2	5.7	190.6	安山岩	両面に敲打痕 磨石・両石併用	B 2 g	P.16
Q 59	磨石	11.1	7.7	4.1	56.6	安山岩	下部部に軽い敲打痕 磨石・両石併用	B 2 c	P.16
Q 60	磨石	7.3	2.6	2.1	33.3	砂岩	下部部に敲打痕 板熱痕を有する	第2号 トレント	
Q 61	両石	28.4	25.9	12.0	(372)	花崗岩	表面に複数の磨面形がV字状の凹み	第1号 トレント	
Q 62	両石	20.5	25.7	9.7	830	花崗岩	石皿を転用 両面に複数の磨面形がV字状の凹み	包含層中	P.16
Q 63	石棒	(10.3)	(13.6)	(8.2)	(108.9)	花崗岩	膠体研磨入念	包含層中	
Q 64	意匠石	4.0	1.8	0.4	6.5	乾成岩	全面を入念に研磨 上部に両面からの穿孔	B 2 g	P.15

2 古墳時代の遺構と遺物

調査G区から当時代の遺構は、竪穴住居跡6軒、土坑1基が確認できた。以下、確認できた遺構及び遺物について記述する。

なお、調査G区は、第1次調査を行った調査D区・E区と隣接しており、各遺構の実測図は既調査分も再録した。柱穴・貯蔵穴の番号については、今回の調査で確認したピット・貯蔵穴を含め、番号を新たに付け直した。第1次調査分の詳細については、『茨城県教育財団文化財調査報告』第206集を参照されたい。

(1) 竪穴住居跡

第3号住居跡（第49・50図）

位置 調査G区北部のA4j0区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第5・22・31号住居跡を掘り込み、第81号土坑に掘り込まれている。また、本跡の覆土上面に第1号道路が構築されている。また、本跡は第4号住居跡を拡張し構築している。

規模と形状 第1次調査分と合わせて、主軸方向がN-35°-Eで、長軸6.65m、短軸5.86mの長方形と推測できる。壁は、南東壁の一部が直立している以外は、やや外傾して立ち上がっている。壁高は26～48cmである。

床 ほぼ平坦で、南東壁及び南西壁際を除き貼床が確認されている。竈周辺から南西壁にかけて硬化面が認められる。また、北西壁を除く壁下には、壁溝が確認されている。貼床は、ロームブロックを中量含んだ、にぶい黄褐色土を積み上げて構築されている。

竈 右袖部のみが確認されており、北東壁の中央部に付設されている。第8～10層は袖部で、多量の砂を含む粘土を主体として構築されている。第11層は、掘方への埋土である。

覆土層解説

- | | | | |
|------|-----------------------|----------|-----------------|
| 8 褐色 | 砂質粘土粒子多量、炭化粒子少量 | 10 灰黄褐色 | 砂質粘土粒子中量、炭化粒子微量 |
| 9 褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 11 にぶ黄褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 |

ピット 7か所。P1～P3は深さ66～80cmで、位置と規模から主柱穴と考えられる。P4・P5は、深さ30cm・52cmで、南西壁際の中央部に位置し、土手状の高まりと合わせて、出入り口施設を形成していたものと考えられる。P6は深さ30cmで、壁外に位置しているが、壁からの距離と規模から本跡に伴うものと考えられる。P7は深さ8cmで、性格不明である。

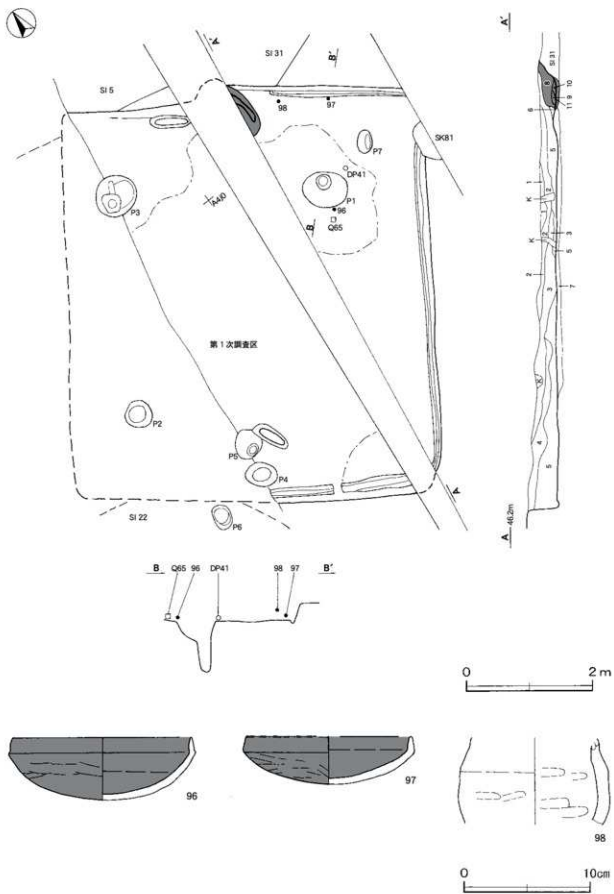
覆土 6層に分層できる。各層にロームブロックや炭化物を含む不均質な堆積状況から埋め戻されている。また、第7層は貼床の構築土である。

土層解説

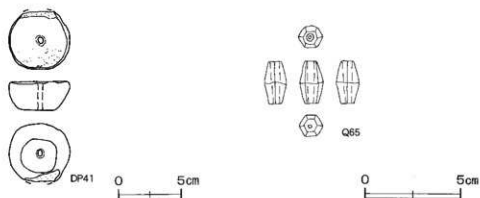
- | | | | |
|-------|------------------|---------|--------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 7 にぶ黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 今回の調査区からは、土師器片116点（坏7、鉢1、甕1、甕・瓶類23、不明84）土製品1点（紡錘車）、石製品1点（切子玉）のほか、混入した縄文土器片29点、須恵器片1点、打製石斧1点、磨石1点、凹石1点、剥片1点が出土している。97は北東壁際、DP41はP1の北側、96・Q65はP1の南側の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉に比定できる。第4号住居跡の床面に貼床を構築し、南東・南西方向に壁を移動させ床を拡張している。



第49图 第3号住居跡・出土遺物実測図



第50図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表 (第49・50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
96	土師器	杯	14.2	5.0	—	長石・石英・雲母	にぶ・黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部外面へうすり後、ナゲ 内面横ナゲ・ナゲ	覆土下層	95% PL13
97	土師器	杯	13.2	3.8	—	石英・雲母	褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部外面へうすり後、ナゲ	覆土下層	90%
98	土師器	鉢	—	16.9	—	長石・石英・雲母	灰黄	普通	口縁部外面横ナゲ 体部外・内面ナゲ	覆土中層	15%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	特徴	出土位置	備考
DP41	紡錘車	4.9	2.2	0.7	(08.7)	両面・側面ナゲ	覆土下層	

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q65	切子玉	2.3	1.3	0.2 ~0.4	4.1	水晶	全面研磨 一方から穿孔	覆土下層	PL16

第4号住居跡 (第51図)

位置 調査G区北部のA4j0区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第3号住居の床面下で確認された。第5・31号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 第1次調査分と合わせて、主軸方向がN-35°-Eで、長軸5.34m、短軸5.20mの方形と推測できる。第3号住居に上部を掘り込まれているが、確認できた壁は外傾して立ち上がり、壁高は8cmである。

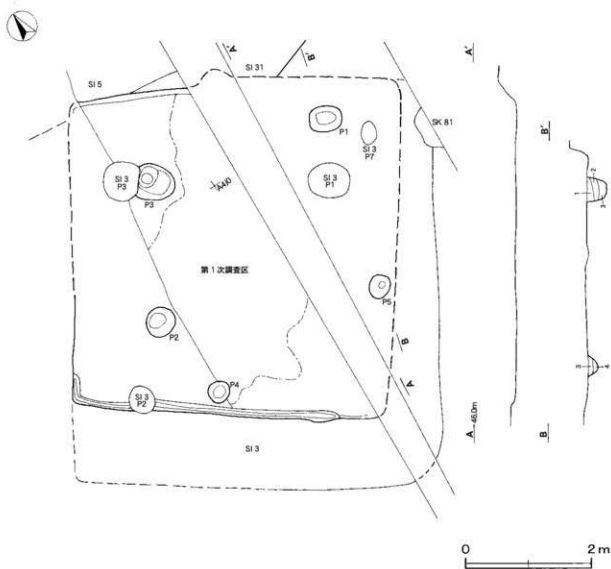
床 ほぼ平坦で、北西壁から南西壁にかけて硬化面が認められる。また、北西壁及び南西壁下には、壁溝が確認されている。

ピット 5か所。P1・P2・P3は、それぞれ深さ32cm・68cm・60cmで、規模にやや差があるものの、配置から主柱穴と考えられる。P4は、深さ22cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5は深さ18cmで、性格不明である。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|-----------|
| 1 褐色 | ロームブロック・粘土粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 4 黄褐色 | ロームブロック中量 |

所見 本住居は、第3号住居の建て替え前の住居である。時期差はあまりないものと考えられ、時期は6世紀後葉に比定できる。



第51図 第4号住居跡実測図

第11号住居跡（第52～55図）

位置 調査G区南部のB4d0区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第26号住居跡及び第86・88号土坑を掘り込み、第87号土坑に掘り込まれている。本跡の覆土上面に第1号道路が構築されている。また、第10号住居跡と重複しており、土層では確認できなかったが、出土土器から、本跡が古いと考えられる。

規模と形状 第1次調査分と合わせて、主軸方向がN-20°-Wで、長軸6.04 m、短軸5.88 mの方形と推測できる。壁はほぼ直立しており、壁高は26～30cmである。

床 ほぼ平坦な貼床で、コーナー部を除き竈周辺から貯蔵穴2にかけて硬化面が認められる。また、東壁から南壁にかけての壁下には、壁溝が確認されている。覆土中層から床面にかけて、西壁際に焼土が、ほぼ全域から炭化材が確認されている。

竈 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで158cm、燃焼部幅39cmである。焚口部は、長さが26～31cmの角柱状の花崗岩を両側に直立させ構築している。竈上面から、長さが46cmほどの板状の花崗岩が出土しているが、本来は焚口部の施設の一部であったと考えられる。第7～9層は袖部で、粘土を主体として構築している。第10・11層は掘方への埋土で、火床部は床面を12cmほど掘り込み、床面の高さまで埋め戻して構築している。火床面は赤変硬化しており、12cmほどの焼土層が確認できた。火床面の北側には、長さが15cmの角柱状の花崗岩が掘えられており、やや赤変している。石材は、支脚として使用されたものと考えられる。煙道部は壁外に27cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1 褐 灰 色	ロームブロック・炭化粒子微量	7 黄 灰 色	粘土粒子多量
2 黒 褐 色	ロームブロック・炭化物微量	8 黄 褐 色	粘土粒子多量、焼土粒子微量
3 暗 褐 色	ロームブロック少量、炭化物微量	9 黒 褐 色	粘土粒子中量、炭化物微量
4 黒 褐 色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	10 橙 色	焼土粒子中量
5 暗 褐 色	焼土粘土少量、ローム粒子・炭化粒子微量	11 暗オリーブ色	ローム粒子微量
6 黒 褐 色	炭化物・ローム粒子微量		

ピット 3か所。P1・P2・P3は、それぞれ深さ60cm・30cm・72cmで、規模にやや差があるものの、配置から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は南西コーナー部に位置しており、確認できた長径68cm、短径42cmで、楕円形と考えられる。深さは56cmである。底面は平坦で、壁は直立している。

貯蔵穴2は南壁際の中央部に位置している。確認できた長軸70cm、短軸72cmで、方形又は長方形と考えられる。二段の掘り込みを有し、深さは40cmである。

貯蔵穴1土層解説

8 暗 褐 色	炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量	10 暗 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
9 黄 褐 色	ロームブロック少量、炭化物微量	11 黒 褐 色	炭化物少量、ローム粒子微量

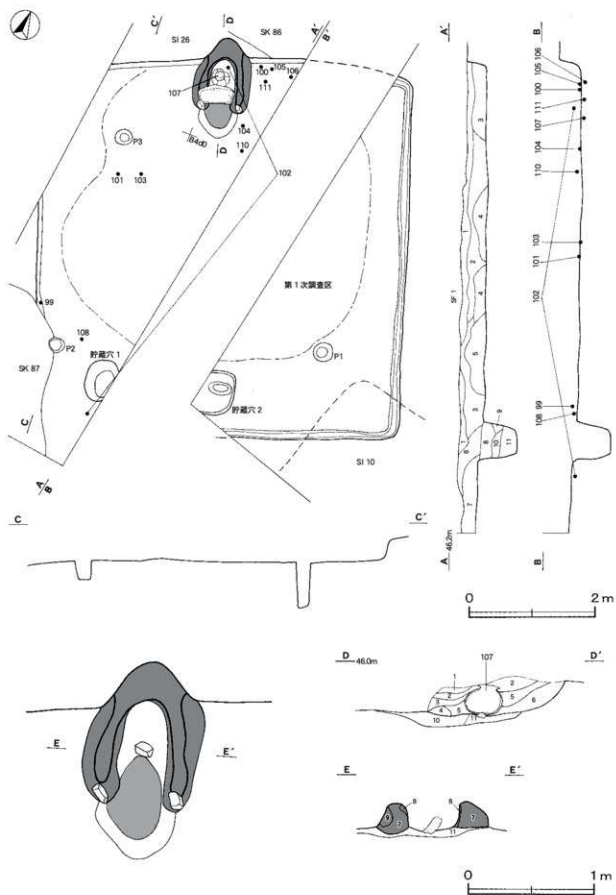
覆土 7層に分層できる。第1次調査では「自然堆積」と判断したが、ブロック状の堆積状況から埋め戻されていると考えられる。

土層解説

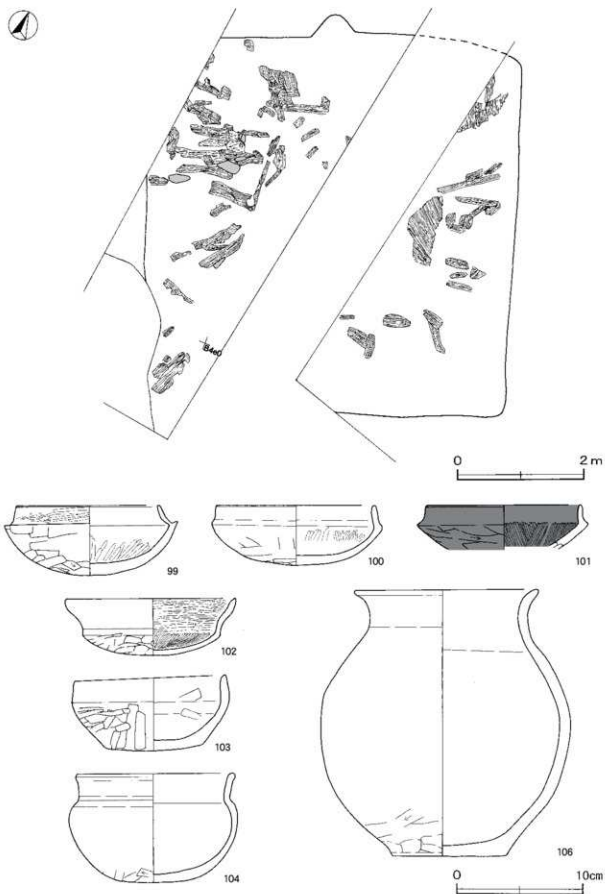
1 黒 褐 色	炭化物少量、ローム粒子微量	5 暗 褐 色	炭化物少量、ロームブロック微量
2 黒 褐 色	炭化物少量、ロームブロック微量	6 暗 褐 色	ロームブロック少量、炭化物微量
3 暗 褐 色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量	7 暗 褐 色	ローム粒子・炭化粒子微量
4 暗 褐 色	炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子微量		

遺物出土状況 今回の調査区からは、土師器片126点（坏18、碗1、鉢2、甕13、瓶1、甕・瓶類23、不明68）、石製模造品4点（白玉1、双孔円板2、剣形模造品カ1）のほか、混入した縄文土器片220点、打製石斧1点が出土している。遺物は、竈周辺及び南西コーナー部の覆土下層から床面にかけて集中して出土している。107は竈火床面の北側から、正位で出土している。108は西壁際の床面から斜位で出土している。111は竈右袖外側の床面から逆位で出土しており、土器内の覆土からQ66が検出されている。102は竈内の覆土上層、南西コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。

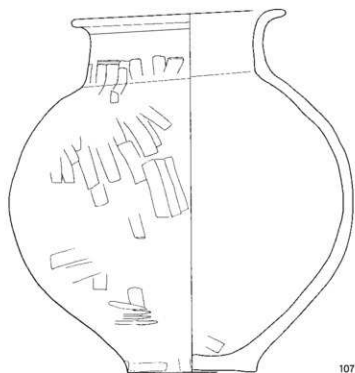
所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。また、炭化材や焼土の出土状況から、焼土住居と考えられる。竈の焚口部に花崗岩を使用している住居跡は、第1次調査にて第13・20号住居跡の2軒が確認されている。なお、第10号住居跡と重複しており、第1次調査では「本跡が新しい」と報告したが、今回の調査にて良好な資料が出土したことにより、本跡の時期が明確になった。両遺構は、土層による新旧関係が確認できなかった遺構であり、これらの事実関係から「出土土器から本跡が古いと考えられる」と訂正したい。



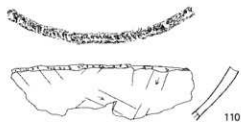
第52図 第11号住居跡実測図



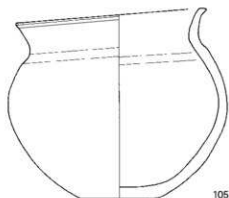
第53图 第11号住居跡・出土遺物実測図



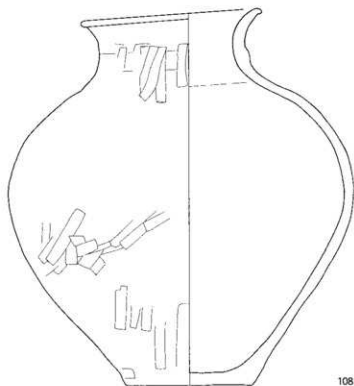
107



110



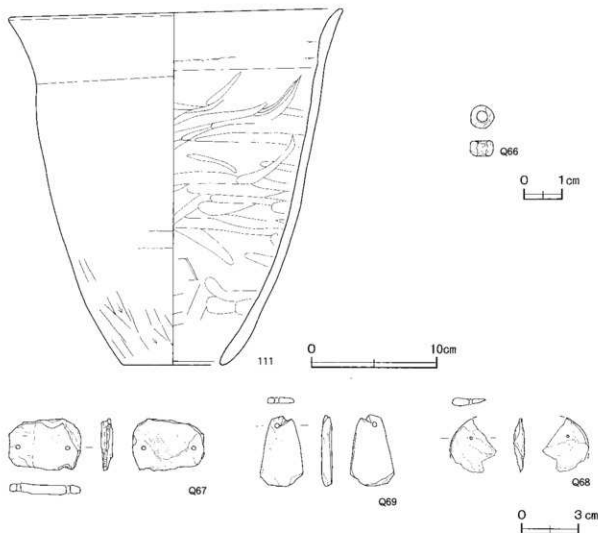
105



108



第54图 第11号住居跡出土遺物実測図(1)



第55図 第11号住居跡出土遺物実測図(2)

第11号住居跡出土遺物観察表(第53~55図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
99	土師器	坏	11.3	5.5	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面へラ磨き 内面横ナゲ 体部外面へラ削り後、ナゲ 内面へラ磨き	覆土下層	100% PL13
100	土師器	坏	12.5	4.8	—	長石	橙	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部外面へラ削り後、ナゲ 内面へラ磨き	覆土下層	90%
101	土師器	坏	12.2	0.30	—	長石・石英	褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部外面へラ削り後、ナゲ 内面へラ磨き	覆土下層	55%
102	土師器	坏	13.5	4.5	—	長石・雲母	橙	普通	口縁部外面横ナゲ 内面へラ磨き 体部外面へラ削り後、ナゲ 内面へラ磨き	覆土下層	90% PL13
103	土師器	碗	12.0	6.1	7.8	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部外面へラナゲ 内面横ナゲ・ヘラナゲ 底部へラ削り後ナゲ	覆土下層	100% PL13
104	土師器	鉢	12.4	8.7	4.9	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面横ナゲ 内面ナゲ 体部外・内面ナゲ 底部周縁へラ削り後、ナゲ	覆土下層	70% PL14
105	土師器	甕	15.0	15.0	6.0	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナゲ	覆土下層	80%
106	土師器	甕	14.5	21.2	9.0	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部外・内面ナゲ 底部周縁へラ削り後、ナゲ	覆土下層	80% PL14
107	土師器	甕	16.4	28.8	10.2	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナゲ 頸部へラナゲ 体部外面へラナゲ・ナゲ 内面ナゲ下半へラナゲ 底部周縁へラナゲ	覆土下層	90% PL14
108	土師器	甕	14.0	30.0	10.0	長石・石英・白色粒子	浅黄	普通	口縁部外・内面横ナゲ 頸部へラナゲ 体部外面へラナゲ・ナゲ 内面ナゲ	床面	85%
110	土師器	甕	—	0.90	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部へラ削り後、ナゲ 接合面にキズミ	覆土下層	5%
111	土師器	瓶	26.4	28.5	7.9	長石・石英・赤色粒子	褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部外面下半へラ削り後、ナゲ 内面上半へラ磨き下半へラ削り後、ナゲ 編織肌	床面	90% PL14

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q66	白玉	0.6	0.4	0.3	0.1	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	P111 覆土中	Pt.16

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q67	双孔円板	2.6	3.8	0.6	0.2	10.3	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	覆土下層	Pt.16
Q68	双孔円板	(2.8)	(2.4)	0.5	0.2	(2.7)	滑石	一方向からの穿孔	覆土下層	Pt.16
Q69	不明硬品	3.7	2.3	0.5	0.2	7.8	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	覆土下層	Pt.16

第20号住居跡（第56・57図）

位置 調査G区中央部のB4b9区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第21・22・26号住居跡及び第71・73・85号土坑を掘り込み、第4号流路に掘り込まれている。

規模と形状 第1次調査分と合わせて、主軸方向がN-23°-Eで、長軸5.64m、短軸5.00mの長方形と推測できる。壁は、南西壁がゆるやかに立ち上がっている以外は、ほぼ直立している。壁高は12~46cmである。

床 南西壁に向かってやや傾斜している。竈周辺から南西壁際にかけて硬化面が認められる。また、削平された北西壁を除き、壁下には壁溝が巡っている。覆土中層から床面にかけて、東コーナー部に焼土が、ほぼ全域から炭化材が確認されている。

ピット 6か所。P1~3は深さは68~76cmで、位置と規模から主柱穴と考えられる。P2・P3から、丸木の柱材が確認されている。P4は深さ13cmで、P1に隣接していることから、補助的な柱穴の可能性もある。P5・P6は深さ12cm・18cmで、性格不明である。

貯蔵穴 東コーナー部に位置しており、長軸73cm、短軸55cmの長方形である。二段の掘り込みを有し、深さは38cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 炭化物少量、ロームブロック微量
 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
 3 黒色 炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子微量

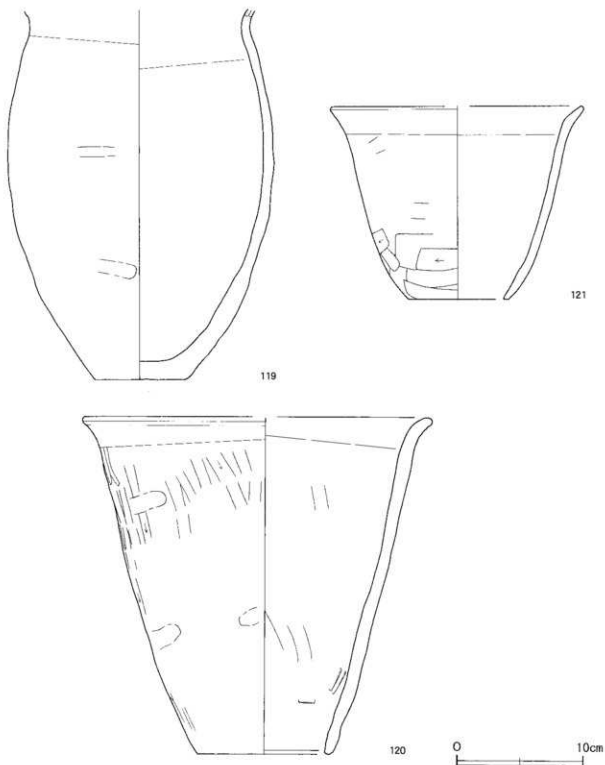
覆土 6層に分層できる。ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
 2 褐灰色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
 3 暗褐色 ロームブロック・炭化物・樹木等の植物遺体微量
 4 黒黄褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子・樹木等の植物遺体微量
 5 黒褐色 炭化材・樹木等の植物遺体少量、ロームブロック・焼土粒子微量
 6 黒黄褐色 ロームブロック・炭化材少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 本年度の調査区からは、土師器片80点（坏22、鉢2、甕2、甕・甕類9、不明43）のほか、混入した縄文土器片53点、須恵器片2点、剥片1点が出土している。遺物は、貯蔵穴の覆土下層及び東コーナー部の覆土中層から床面にかけて出土している。112~115は、4個体が重なり合って出土している。117は北東壁際の覆土下層、118・120・121は東コーナー部の覆土中層から床面にかけてそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉に比定できる。また、炭化材や焼土の出土状況から、焼土住居と考えられる。



第57図 第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表 (第56・57図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
112	土師器	杯	13.2	5.2	—	長石・雲母・ 赤色粘土	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ	体部外面へラ削り施。ナデ	貯蔵穴 中層	95%
113	土師器	杯	12.8	4.6	—	長石・石英・ 赤色粘土	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面横ナデ・ナデ	体部外面へラ削り施。ナデ	貯蔵穴 平層	90%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	粘土	色調	構成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
114	土師器	杯	12.8	4.4	—	長石・石英・炭粒	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面横ナデ・ナデ	貯蔵穴 中層	95% PL13
115	土師器	杯	12.8	3.6	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう取り後、ナデ 内面横ナデ・ナデ	貯蔵穴 中層	90% PL13
116	土師器	杯	14.8	4.6	—	長石・石英・炭粒・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう取り後、ナデ 内面横ナデ・ナデ	覆土下層	95%
117	土師器	鉢	11.2	9.6	7.0	長石・石英・炭粒・赤色粒子	灰白	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう取り後、ナデ 内面横ナデ・ナデ	覆土下層	90% PL13
118	土師器	鉢	16.2	13.6	7.0	長石・石英・炭粒・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう取り後、ナデ 内面横ナデ・ナデ	覆土中層 ～区画	45% PL14
119	土師器	甕	—	(29.3)	7.2	長石・石英・赤色粒子	暗赤褐	普通	頸部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ	覆土中層	60%
120	土師器	瓶	[27.2]	36.7	10.4	長石・石英	にぶい暗褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう取り後、ナデ 内面へうナデ・ナデ	覆土中層 ～区画	60%
121	土師器	瓶	[19.9]	15.3	8.0	長石・石英・炭粒	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう取り後、ナデ 内面ナデ	覆土中層 ～区画	60%

第21号住居跡（第58・59図）

位置 調査G区中央部のB 4a0区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第26号住居跡及び第76号土坑を掘り込み、第20号住居及び第1・4号流路に掘り込まれている。また、本跡の覆土上面に第1号道路が構築されている。

規模と形状 第1次調査分と合わせて、主軸方向がN-6°-Eで、一辺が7.0mの方形と推測できる。壁はほぼ直立しており、壁高は8～28cmである。

床 ほぼ平坦で、中央部から東側に硬化面が認められる。東壁下には壁溝及び間仕切り溝が確認されている。また、北東部に焼土が、北東コーナー部に10cmほどの青灰色の粘土の高まりが確認されている。

竈 左袖部のみが確認されており、北壁の中央部に付設されている。袖部は、粘土を主体として構築されている。

覆土層解説

6 層 灰 色 粘 土 粒 子 多 量

ピット 6か所。P 1・P 2・P 4は深さ62～66cm、P 3は深さ38cmで、規模にやや差があるものの、配置から主柱穴と考えられる。P 5は、深さ18cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ36cmで、性格不明である。

貯蔵穴 北東部に位置しており、長軸82cm、短軸64cmの長方形で、深さは30cmである。底面は平坦で、壁はやや外傾している。

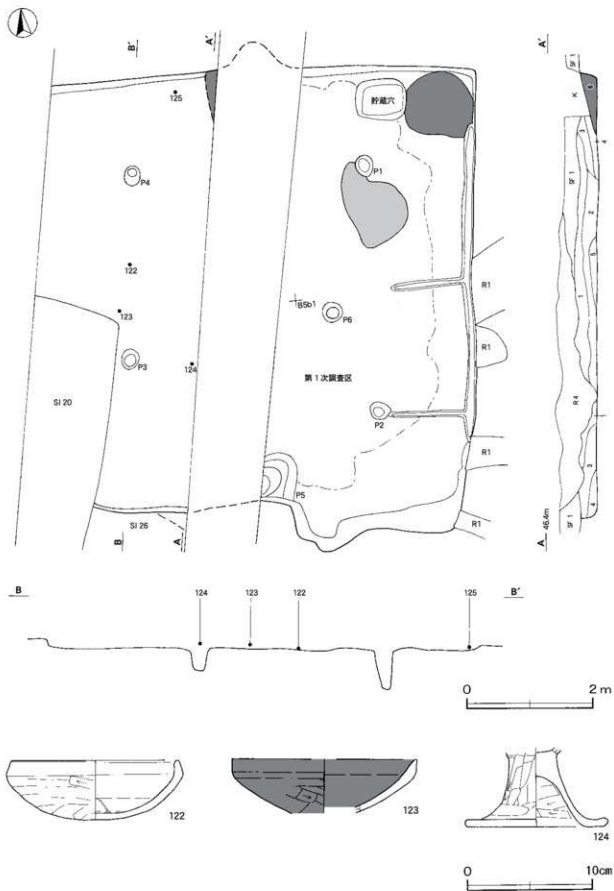
覆土 5層に分層できる。ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

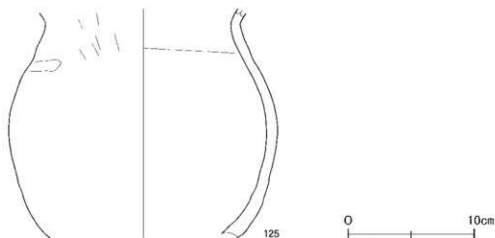
- | | | | |
|---------|------------------|----------|--------------------|
| 1 暗 褐 色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 にぶい赤褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 黒 褐 色 | 炭化物少量、ローム粒子微量 | 5 黒 褐 色 | 炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 黒 褐 色 | ロームブロック・炭化物微量 | | |

遺物出土状況 今回の調査区からは、土師器片65点（杯51、高杯1、甕2、瓶2、甕・瓶類1、不明8）のほか、混入した縄文土器片91点、土師器片3点、須恵器片2点、陶器片1点、剃片1点が出土している。122～124は中央部、125は北壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉に比定できる。



第58图 第21号住居跡・出土遺物実測図



第59図 第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表 (第58・59図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	粘土	色調	構成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
122	土師器	杯	13.2	4.7	—	長石・石英・雲母	にぶい黒	普通 口縁部外・内面横ナデ	体部外面へラ削り後、ナデ	覆土下層	90% PL13
123	土師器	杯	14.8	(4.2)	—	長石・石英・雲母	灰黄黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へラ削り後、ナデ 内面ナデ	覆土下層	35%
124	土師器	高杯	—	(6.3)	10.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒	普通	口縁部外・内面へラ削り後、ナデ	覆土下層	50% PL14
125	土師器	甕	—	(18.2)	—	長石・石英・雲母	灰黒	普通	口縁部内面横ナデ 体部外面へラ削り後、ナデ 内面ナデ	覆土下層	15%

第31号住居跡 (第60図)

位置 調査G区北部のA410区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第80号土坑を掘り込み、第3・4号住居に掘り込まれている。また、木跡の覆土上面に第1号道路が構築されている。

規模と形状 南壁跡の一部が確認されただけで、南北軸1.14m、東西軸2.34mしか確認できなかった。平面形は方形又は長方形と考えられる。壁は外傾して立ち上がり、壁高は28cmである。

床 ほぼ平坦で、一部硬化面が確認できた。また、壁下には壁溝が確認できた。

貯蔵穴 南壁跡に位置しており、確認できた長軸85cm、短軸36cmで、方形又は長方形と考えられる。深さは45cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。

貯蔵穴土層解説

- 6 黒褐色 炭化物少量、ロームブロック・赤色粒子微量 8 にぶい黄色 ロームブロック中量
7 にぶい黄褐色 ロームブロック少量、炭化物粒子・赤色粒子微量

覆土 5層に分層できる。全体にロームブロックや炭化物等の含有物を含み、不均質な堆積状況から埋め戻されている。

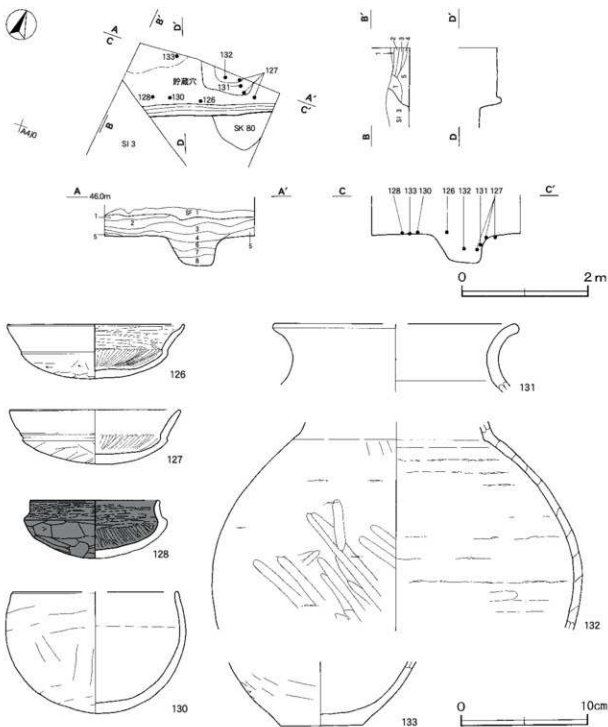
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物粒子微量 4 黒褐色 炭化物粒子少量、ロームブロック微量
2 黒褐色 ロームブロック・炭化物粒子少量 5 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量
3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物粒子微量

遺物出土状況 今回の調査区からは、土師器片49点(坏7, 鉢1, 甕3, 甕・甕類14, 不明24)のほか、混入した縄文土器片6点が出土している。127は、南壁跡の床面及び貯蔵穴の覆土から出土した破片が接合したものである。131・132は貯蔵穴の覆土中層から出土している。126・128・130は南壁跡、133は貯蔵穴の西側の覆

土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第60図 第31号住居跡・出土遺物実測図

第31号住居跡出土遺物観察表 (第60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
126	土師器	杯	14.0	4.3	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁外面横ナデ 内面へラ磨き 体部外面へラ磨り 肌、ナデ 内面へラ磨き	礎土下層	90% P.13
127	土師器	杯	13.6	4.4	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へラ磨り肌、ナデ 内面へラ磨き	床面 貯蔵穴	90% P.13

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
128	土師器	坏	10.2	4.6	—	長石・石英・ 炭粒・赤色粒子	赤黒	普通	口縁部外・内面へリ磨き 体部外面へリ削り後、ナゲ内面へリ磨き	覆土下層	90%
130	土師器	鉢	[13.0]	9.6	—	長石・石英	灰赤	普通	口縁部内面横ナゲ 体部外面へリ削り後、ナゲ内面ナゲ	覆土下層	90%
131	土師器	甕	[19.0]	(5.4)	—	長石・石英・ 赤色粒子	に深い明	普通	口縁部外・内面横ナゲ	貯蔵穴(中層)	5%
132	土師器	甕	—	(16.5)	—	長石・石英・ 赤色粒子	に深い明	普通	頸部外・内面横ナゲ 体部外面上半へリ削り後、ナゲ下半へリ削り後、ナゲ内面ナゲ 輪痕あり	貯蔵穴(中層)	10%
133	土師器	甕	—	(5.0)	6.5	長石・石英・ 炭粒	明赤褐	普通	体部外面へリ削り後、ナゲ内面ナゲ	覆土下層	5%

表4 古墳時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)	
								主柱穴	出入口	ピット	貯蔵穴					
3	A 4.0	N-35°-E	[長方形]	[6.65×5.86]	26~48	平坦	一部	3	2	2	—	1	人馬	土師器・胡羅車・ 切子玉	6 C 後葉	S1 4・5・22・31→本跡→ SR81, 5F 1
4	A 4.0	N-35°-E	[方形]	[5.34×5.20]	8	平坦	一部	3	1	1	—	—	—	—	6 C 後葉	S1 5・21→本跡→S1 3
11	B 4.0	N-20°-W	[方形]	[6.04×5.88]	26~30	平坦	一部	3	—	2	1	1	人馬	土師器・白土・双孔 白灰・胡羅車遺品	6 C 中葉	S126, SR06→88→本跡→ S119, SR27, 5F 1
20	B 4.6	N-22°-E	[長方形]	[5.64×5.00]	12~46	傾斜 及び 全周	一部	3	—	3	1	1	人馬	土師器	6 C 後葉	S121・22・28, SR71・72・85 →本跡→R 4
21	B 4.6	N-6°-E	[方形]	[7.0]	8~26	平坦	一部	4	1	1	1	1	人馬	土師器	6 C 後葉	S126, SR26→本跡→S120, SF 1, R 1・4
31	A 4.0	—	不明	[2.34×1.14]	28	平坦	一部	—	—	1	—	—	人馬	土師器	6 C 中葉	SR0→本跡→S1 3・4, 5F 1

(2) 土坑

第87号土坑 (第61図)

位置 調査G区南部のB 4 e9区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第11号住居跡を掘り込んでいる。また、本跡の覆土上面に第1号道路が構築されている。

規模と形状 南西側が調査区域外に伸びているため、南北径2.30m、東西径1.70mしか確認できなかった。平面形は不明である。深さは62cmで、底面はほぼ平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がっている。

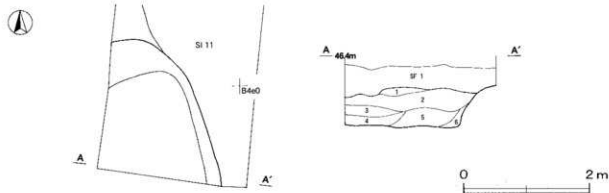
覆土 6層に分層できる。ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|----------|----------------------|----------|-------------------|
| 1 黒褐色 | 樹木等の植物遺体少量、ローム粒子微量 | 4 に深い黄褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | 樹木等の植物遺体少量、ロームブロック微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 に深い黄褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量、鹿沼パミス微量 |

遺物出土状況 土師器片3点(坏2, 甕1)のほか、混入した縄文土器片27点が出土している。土師器片は、いずれも細片で、図示することができない。

所見 時期は、出土土器や重複関係から後期と考えられる。



第61図 第87号土坑実測図

3 その他の遺構と遺物

時期が明確でない道路跡1条、流路跡1条、土坑6基が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

(1) 道路跡

第1号道路跡 (第62・63図)

位置 調査G区のA5h1～B4e9区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第3・11・21・26・31号住居跡及び第81・87号土坑の覆土上面に構築している。第4号流路に掘り込まれている。

規模と形状 平面的には確認できなかったため、規模や主軸方向等は明確でない。土層観察では、路面は長さ30mの範囲で確認できた。調査G区の北側に設定したトレンチでは、耕作による攪乱が著しく、路面が一部確認されたのみで、道路幅は確認できなかった。

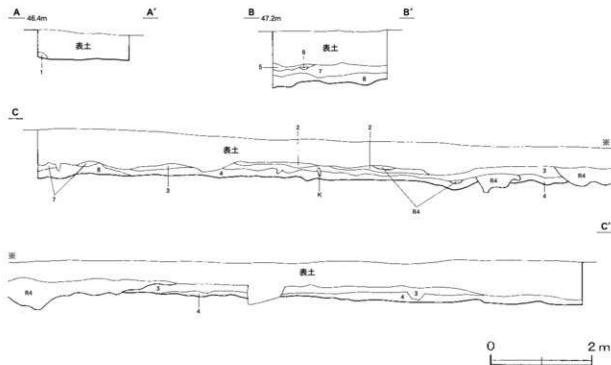
覆土 8層に分層できる。第1～6層は硬化した層である。南北方向の土層観察から、道路の構築層は3層に大別され、3時期に区分できる。

土層解説

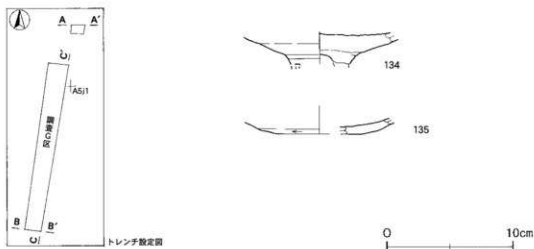
- | | |
|-----------------------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 砂粒多量 |
| 2 黒色 砂粒少量、炭化粒子微量 | 7 黒褐色 樹木等の植物遺体少量、炭化物・ローム粒子・砂粒微量 |
| 3 黒褐色 砂粒微量 | 8 黒褐色 ローム粒子・樹木等の植物遺体少量、炭化物微量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量 | |
| 5 褐色 砂粒中量、樹木等の植物遺体微量 | |

遺物出土状況 道路の構築層から抜き取りした資料は、縄文土器片29点、土師器片30点(坏5, 高坏1, 甕・瓶類6, 不明18), 須恵器片5点(坏1, 盤1, 高盤1, 不明2), 打製石斧1点である。

所見 時期は、出土土器や重複関係から9世紀より新しいが、伴う遺物が出土していないため明確にできない。調査G区の現況は農道であり、真壁城の外曲輪跡に通じていることから、中世の道路跡の可能性はある。



第62図 第1号道路跡実測図



第63図 第1号道路跡・出土遺物実測図

第1号道路跡出土遺物観察表 (第63図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
134	須恵器	高瓶	—	1.55	—	長石・石英	灰	良好	3単位の透し孔	構築層中	5%
135	須恵器	壺	—	1.30	1.60	長石・石英	灰白	良好	底部回転ヘラ削り	構築層中	5%

(2) 流路跡

第4号流路跡 (第64図)

位置 調査G区中央部のB 4 a0～B 4 c0区、標高46mの山麓緩斜面の裾部に位置している。

重複関係 第20・21・26号住居跡及び第1号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 土層観察では、幅8.75m、深さ62cmの範囲に4か所が確認できた。平面的には確認できなかったため、形状は不明である。

覆土 5層に分層できる。堆積状況から流路の移動が想定される。

土層解説

- | | | | |
|----------|------|----------|------|
| 1 堆 灰 黄色 | 砂粒少量 | 4 灰 白色 | 砂粒多量 |
| 2 黄 灰 色 | 砂粒少量 | 5 帯ワラフ灰色 | 砂粒中量 |
| 3 黒 褐色 | 砂粒微量 | | |

遺物出土状況 覆土中からの出土または土層観察面から抜き取りした資料は、縄文土器片41点、土師器片103点(坏6, 甕・甌類5, 不明92), 須恵器片18点(坏10, 甕2, 不明6), 土器片円盤1点である。いずれも細片で、図示することができない。

所見 時期は、出土土器から平安時代以降と考えられるが、伴う遺物が出土していないため明確にできない。第1次調査で確認された第1号流路跡とは、位置的に同一遺構の可能性があるが、平面的な関連は明確でなく、別遺構とした。



第64図 第4号流路跡実測図

(3) 土坑 (第65図)

今回の調査で、時期・性格ともに不明の土坑6基が確認されている。これらの土坑については、規模・形状等について一覧表と実測図を掲載する。

第80号土坑土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

2 暗オリーブ褐色 ロームブロック微量

第81号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

2 オリーブ褐色 ロームブロック少量

第82号土坑土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第83号土坑土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

3 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物・鹿沼バミス微量

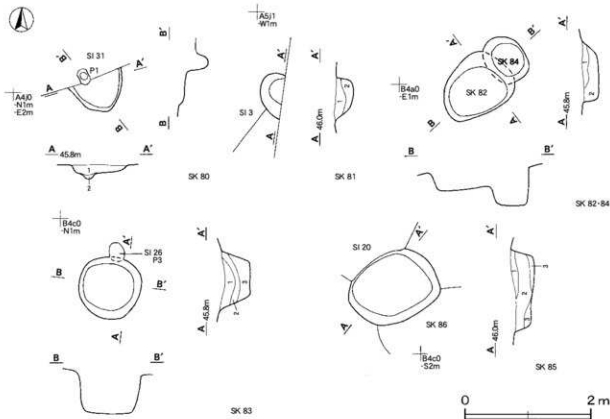
2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

第85号土坑土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

3 黒褐色 ローム粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量



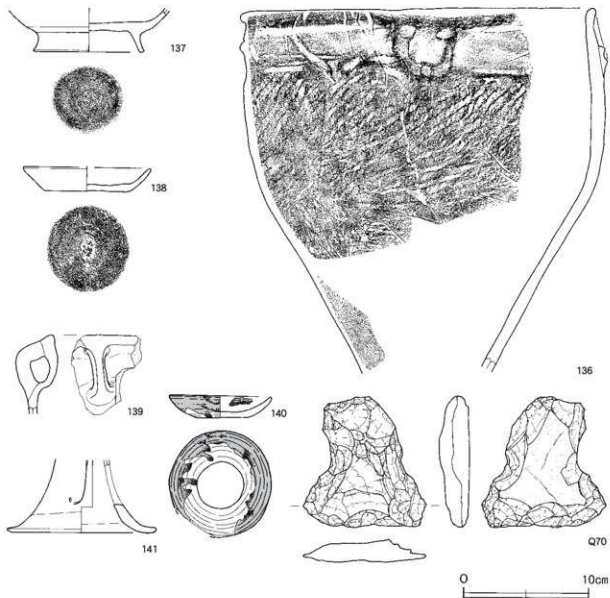
第65図 その他の土坑実測図

表5 時期不明土坑一覧表

番号	位置	平面形	長短方向	規模		壁面	底面	ピット	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				原径×相径 (m)	深さ (cm)						
80	A 4 10	不明	-	(0.83×0.50)	10	外瓶	平皿	1	人為		本跡→S131
81	A 4 8	不明	-	(0.59×0.41)	30	外瓶 礎石	皿状	-	人為		S13→本跡→SF1
82	B 4 40	楕円形	N-S1°-E	[1.18]×[0.94]	28	外瓶 礎石	平皿	-	人為	縄文土器	SK84とSK81不明
83	B 4 40	円形	-	1.00	62	直立 外瓶	平皿	-	自然	縄文土器	S126とSK81不明
84	A 4 8	楕円形	N-30°-W	0.77×[0.62]	60	外瓶	平皿	-	-		SK82とSK81不明
85	B 4 49	楕円形	N-50°-E	1.38×[1.08]	30	外瓶	平皿	-	人為	縄文土器	SK86→本跡→S120, R-4

(4) 遺構外出土遺物 (第66図)

遺構に伴わない遺物のうち、特徴的なものを実測図と遺物観察表で記述する。



第66図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第66図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様(手法)の特徴ほか*	出土位置	備考
136	縄文土器	西鉢	[28.5]	[28.5]	—	長石・石英・炭粒	にぶい焼	普通	沈澱を有するUの字状の隆帯を帯付。LRの単部縄文	縄跡面	35%
137	土師器	高台付碗	—	[3.5]	8.6	長石・石英・炭粒・赤色粒子	にぶい焼	良好	底部へラ切り後、ナデ 裏台貼付	包含層	20%
138	土師器	小皿	[10.0]	1.9	6.6	長石・石英・炭粒・赤色粒子	黄橙	普通	底部へラ切り後、ナデ	S121	30%
139	土師質土器	内耳鍋	—	[6.3]	—	長石・石英・炭粒・赤色粒子	橙	普通	耳貼付	包含層	5%
140	陶器	灯明瓦	8.0	1.8	3.8	長石・石英・炭粒	にぶい焼	良好	底部凹陥へラ切り 外・内面煤付着 鉄粒	表土	95%
141	土師器	蹄行	—	[5.8]	11.2	長石・石英	橙	普通	脚部厚減のため、調整不明 底部外・内面横ナデ	S121	30% PL14

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q70	打製石斧	10.3	9.8	2.4	245.7	ホルンフェルス	両面調整 裏面の原産面を残す	S13	PL15

第4節 ま と め

1 はじめに

北田遺跡は、平成13年度に行った第1次調査¹⁾(以下、「第1次調査」)で、縄文時代から平安時代にかけての集落跡であることが明らかになっている。各時代ごとのあり方については、『茨城県教育財団文化財調査報告』第206集において詳細に述べられている。

平成19年度に行った第2次調査(以下、「今回の調査」)では、縄文時代及び古墳時代の集落跡が確認できた。古墳時代の遺構の多くは、第1次調査で既に確認されているものであり、隣接する旧調査区から延びる未調査部分を今回調査した。縄文時代の遺構は、新たに竪穴住居跡7軒、土坑5基、遺物包含層1か所が確認できた。ここでは、第1次調査の成果も踏まえ、当遺跡の縄文時代における²⁾の形態について考察する。また、今回の調査で確認できた道路跡について、真壁城との関連を考え、まとめたい。

2 縄文時代の屋内炉の形態について

第1次調査で、縄文時代の竪穴住居跡6軒が確認されている。炉の形態を考察するにあたって、これらの住居跡について、今回の調査と同じ土器編年を使用し、時期を細分する。なお、編年については主に『日本土器辞典』³⁾に依拠し、時間軸については中期中葉が阿玉台式、中期後葉は加曾利E式、後期初頭は称名寺式、後期前葉は堀之内式の編年を基準としている。

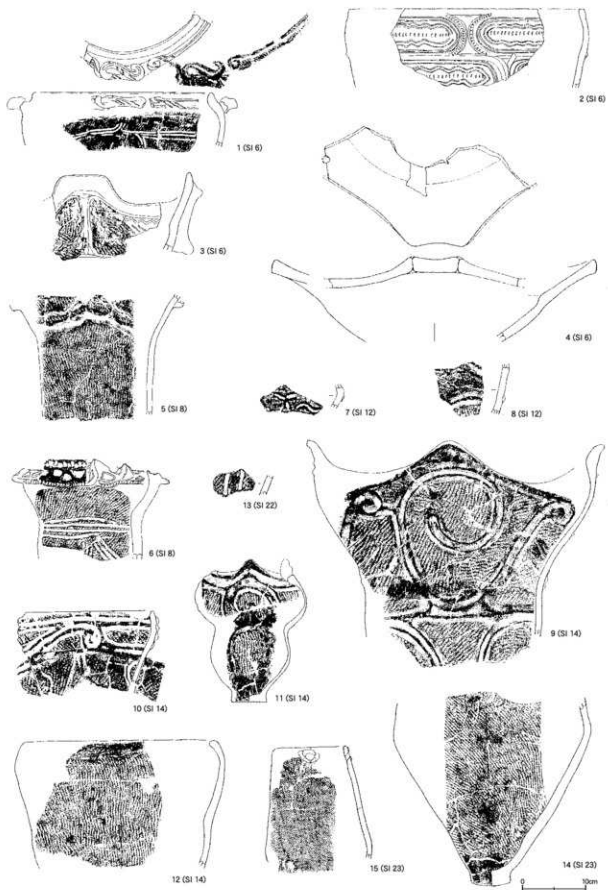
(1) 出土土器(第67図)及び時期の検討

第1次調査で確認されている当該期の竪穴住居跡について、出土土器や重複関係、住居の構造等について再確認しながら、時期を細分する。

第6号住居跡は、調査区域外に延びており、平面形は隅丸長方形と考えられる。壁溝を有し、主柱穴は、長軸線を対称として4か所確認されている。炉は検出されていない。図示されている土器は19点にのぼる。土器は層位によってやや時期差があり、自然堆積による埋没過程は、ゆるやかなものであったと考えられる。ここでは、覆土下層から出土した土器4点を抽出した。1はキャリパー形の深鉢形土器で、口唇部にS字状の突起が付き、縄文を施文した隆帯が巡っている。胴部には、縄文の地文上に3条一組の平行沈線によって文様が描出されており、大木式系統の土器と考えられる。2は断面が三角形の隆帯によって、口縁部が区画されており、区画内には平行沈線とキザミ目列によって文様が描出されている。3は口縁部文様帯を区画する隆帯が下方に突出し、隆帯上には縄文が施文されている。やや新しい土器様相を示す。4は、補修孔を有する無文の浅鉢である。これらの土器様相から、時期は、やや時間幅を持たせて、阿玉台Ⅱ～Ⅳ式期とする。当遺跡において、最も古い段階に属する住居跡である。

第8号住居跡は、壁は削平されており、平面形は円形又は楕円形と考えられる。土器埋設炉を有する住居跡で、5は炉体土器である。縄文が器面全体に施文され、口縁部を隆帯で区画し、波状の沈線が巡っている。6は覆土中から出土した深鉢であるが、キャリパー形の器型で、大形の橋状把手を有している。胴部は、縄文の地文上に3条一組の平行沈線によって文様を描出されており、1の深鉢と同様に、大木式系統の土器と考えられる。時期は、5の炉体土器から阿玉台Ⅳ式期と考えられる。

第12号住居跡は、調査区域外に延びており、平面形は円形又は楕円形と考えられる。炉は検出されていない。7は隆帯上に沈線を有する土器で、8は隆帯で区画され、区画内には縄文が施文されている。図示



第67図 北田遺跡出土土器

されている土器はいずれも覆土中からの出土であるが、土器にあまり時期差はなく、時期は加曾利EⅠ式期と考えられる。

第14号住居跡は、壁は一部が遺存しているのみであるが、平面形は楕円形と推測できる。土器埋設炉を有し、胴部下半を欠く2個体の炉体土器が確認されている。9の炉体土器は、隆帯による溝巻状のモチーフが、器面全体に表現されている。もう一方の炉体土器である10は、口縁部を沈線が沿う隆帯で区画し、胴部には沈線を垂下させている。やや古手の土器様相を示す。11は床面から出土しているが、9の深鉢と同様に隆帯による文様が器面全体に展開している。12は「床面出土」と報告されているが、出土状況から埋設土器の可能性があり、口唇部に無文帯があり、以下は縄文が施文されているキャリバー形の深鉢である。これらの土器にはやや時期差があるが、時期は9の炉体土器から、加曾利EⅢ式期とする。

第22・23号住居跡は互いに重複する住居跡であるが、壁は削平されており、覆土が確認できたのは一部である。平面形は、ともに円形と考えられる。第22号住居跡からは、炉は検出されていない。図示された土器は1点のみで、覆土中からの出土である。13は沈線間を磨り消している。時期は、加曾利EⅡ式期と考えられる。第23号住居跡は、「炉体土器を伴う石組炉」と報告されている。14は口縁部を欠く炉体土器である。器面全体に縄文が施文されている。15は床面から出土しており、「注口」土器として報告されている。これらの土器から、時期は加曾利EⅣ式期と考えられる。第22・23号住居跡の重複関係については、第22号住居跡が「第23号住居跡を掘り込んでいる」と報告されている。ただし、ともに壁が確認できなかった住居跡であり、ここでは出土土器の時期を優先する⁹⁾。

以上、6軒の住居跡について時期を細分したが、今回の調査で確認した竪穴住居跡7軒を加えて、当遺跡における炉の形態について概観し、若干の考察を加えたい。

(2) 炉の形態について

当遺跡で確認できた縄文時代の竪穴住居跡は13軒である。時期ごとに炉の形態を記述したのが、以下の表6である。

表6 北田遺跡における炉の形態について

住居跡番号	時期	炉の形態	調査時期	備考
第6号住居跡	阿玉台Ⅱ～Ⅳ	(無)	第1次調査	
第8号住居跡	阿玉台Ⅳ式期	土器埋設炉	第1次調査	
第12号住居跡	加曾利EⅠ式	—	第1次調査	
第22号住居跡	加曾利EⅡ式	—	第1次調査	
第14号住居跡	加曾利EⅢ式期	土器埋設炉	第1次調査	炉体土器が2個体
第26号住居跡	加曾利EⅢ式期	石組炉	第2次調査	
第29号住居跡	加曾利EⅢ式期	石組炉	第2次調査	掘方への埋土から土器片が出土
第23号住居跡	加曾利EⅣ式期	石組炉	第1次調査	炉体土器が伴う石組炉
第27号住居跡	加曾利EⅣ式期	—	第2次調査	
第28号住居跡	中期後葉～後期初頭	石組炉	第2次調査	
第30号住居跡	称名寺式併行期	石組炉	第2次調査	
第25号住居跡	称名寺式期	石組炉	第2次調査	
第24号住居跡	堀之内Ⅰ式併行期	—	第2次調査	

炉が確認できなかった住居跡の多くは、調査区域外にかかっていることから、遺構全体が調査できなかった住居跡である。ただし、阿玉台式期の住居跡は屋内炉を持たない例が多い。第6号住居跡は、平面形は方形を基調とし壁溝が確認されるなど、当該期の住居構造を有している⁶⁾。木跡も、調査区域外にかかっているが、屋内炉を持たない住居跡と考えられる。

屋内炉が確認できた住居跡は8軒である。炉の形態については、石組炉を有する住居跡が6軒で、土器埋設炉を有する住居跡が2軒である。土器埋設炉を有する住居跡の時期は、阿玉台IV式期及び加曾利EⅢ式期である。また、石組炉を有する住居跡は、加曾利EⅢ式期に出現し、称名寺式期まで確認されている。

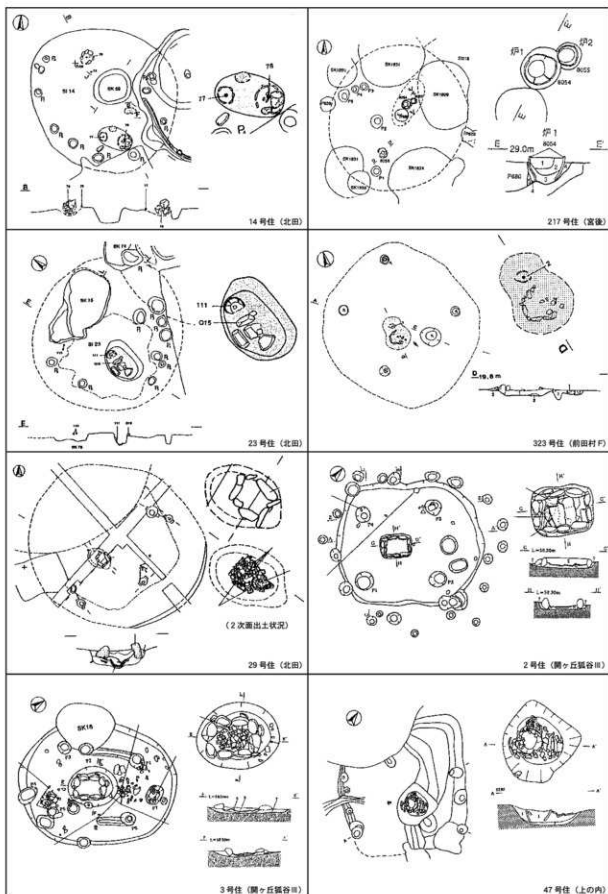
県内の中期後葉の屋内炉については、鈴木素行氏他による「茨城県における縄文時代中期後葉の屋内炉」⁶⁾に詳しく述べられている。この論考なかで、県内を「久慈川流域以北の北部」「那珂川流域を中心とした中部」「古鬼怒湾を中心とした南部」の3つの地域にわけて、当該期の屋内炉の集積と検討を行っている⁷⁾。地域的な特徴として、県北部は「石組炉が主体で、後期前葉まで確認できること」、県中部は「地床炉が主体で、石組炉は中期末葉には減少していくこと」、県南部は「地床炉が主体で、石組炉が稀少であり、土器片組炉が存在すること」が指摘されている。また土器埋設炉は、「それぞれの地域に存在は認められるものの、主体となることはなく、県南部では中期末葉に減少していくこと」が確認されている。

当遺跡の炉の形態について、これらの地域的な特徴と照合してみると。土器埋設炉は2軒で、第14号住居跡の時期は、加曾利EⅢ式期である。先に述べたように、県南部では中期末葉に土器埋設炉は減少傾向にあり、当遺跡では1基のみであるが、加曾利EⅢ式期まで確認されている。また、当遺跡は石組炉が主体であること、石組炉が後期初頭まで確認できることが特筆すべき点である。これらの様相は、当遺跡が位置する「古鬼怒湾を中心とした南部」の様相よりも、むしろ「久慈川流域以北の北部」の様相に近い。さらに隣接する栃木県南部には、中・後期の集落跡が確認されている小山市寺野東遺跡が所在する。報告では、石組炉は中期後葉には主体になり、後後半まで確認されている⁸⁾。炉の形態については、県北部や栃木県南部との関連が見られ、地域的な交流が想定できるが、今後は他の遺構や出土土器などを比較検討することによって、さらに明確になっていくものと考えられる。

また、石組炉が当遺跡において主体に成り得た理由を、別の視点で考えてみる。当地は石材の入手が容易であることに注目したい。出土している炉石、大形の石器(石皿・回石)は、一部を除き花崗岩を素材としている。筑波山地を構成する主たる岩石は花崗岩であり、山麓部では花崗岩の巨礫層が堆積し、山麓緩斜面が広く発達している。当遺跡は、この山麓緩斜面の裾部に立地している。当遺跡において石組炉が主体となり得たのは、他地域との交流も想定できるが、むしろ豊富な石材を有することが最大の要因と考えられる。

最後に第14・23・29号住居跡から検出された炉について、他の住居跡の炉とはやや異なる様相を見せることから、検出状況を確認し、若干の考察を加えておきたい。

第14号住居跡(第68図)の土器埋設炉は、炉体土器が2個体検出されている。時期は、加曾利EⅢ式期である。報告では「2個の深鉢」を「円筒形の堀り方内の両端に据えて、炉体土器としている」と記述があり、2個体が併設されていたと考えられている。2基の土器埋設炉が隣接して検出される例は、古河市(旧総和町)釈迦才仏遺跡⁹⁾、茨城町宮後遺跡¹⁰⁾、つくばみらい市(旧谷和原村)前田村遺跡¹¹⁾等で、中期後葉の住居跡から確認されている。ただし、「作り替え」か「併設」であるかの判断をすることは難しく、両者は混在しているものと考えられる¹²⁾。第14号住居跡の土器埋設炉も、報告では「併設」とされているが、炉の土層観察に関する記載はなく、2個の炉体土器には時期差が認められることから、「作り



第68図 縄文時代の屋内炉

替え」の可能性も考えられる。また、加曾利E I 式期に属する宮後遺跡第217号住居跡(第68図)は、2個の炉体土器を中心に「焼土粒子の広がり」が確認されており、「地床炉(石組炉)との複合」について想定されている¹⁰⁾。本炉跡も2個の炉体土器付近から「焼土範囲」が一部認められることから、地床炉との複合形態も可能性がある。

第23号住居跡(第68図)の石組炉は、前述したように「炉体土器を伴う石組炉」と報告されている。時期は、加曾利E IV 式期である。「長方形で、深さ40cmの掘り方内の北東際に深鉢を据えて、炉体土器」とし、中央部から南側にかけて炉石が設置されている。「複式炉が退化したような形状」と報告されており、「併設」と考えられている。前田村遺跡F区第323号住居跡(第68図)でも、同様な炉の形態が報告されており、「土器埋設炉と石囲い炉の複式炉」として「併設」と考えられている。炉体土器について、土器内の覆土は、「焼土ブロックが堆積して」おり、「炉床はロームがレンガ状に赤変硬化している」と報告されている。時期は、炉体土器から「加曾利E II 式期」とされている¹⁰⁾。第23号住居跡の炉体土器に関して、焼土や炭化物についての記載はないが、出土状況から石組炉に併設された炉の一部と考えられ、「複式炉」の一形態と想定できる。

今回の調査で確認された第29号住居跡(第17・18・68図)は、石組炉を有するが、炉の掘方への埋土から多量の土器片が重なりあって出土している。時期は、加曾利E III 式期と考えられる。このような出土状況について、以下のケースが想定される。

まず「炉に対する処理行為」と考えてみる。金井安子氏は、「炉の上面や炉内」から「土器片や礫が出土」している事例を、中・後期に属する関東・中部地方の遺跡から集成し、住居廃絶に際しての「炉に対するの封鎖」行為と想定している¹¹⁾。しかし、本炉跡の土器片について、掘方への埋土から出土していることは土層観察から明確であり、廃絶後に埋設されたとは考えにくい。

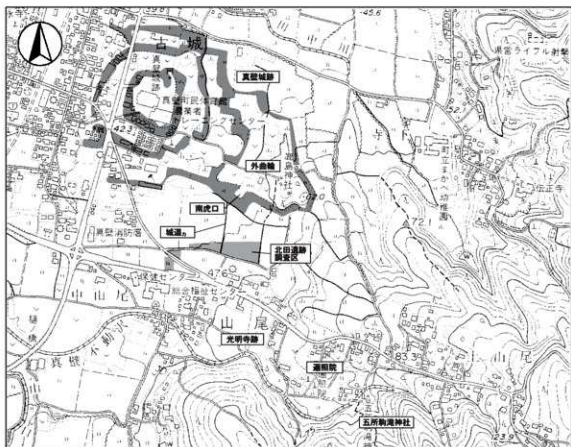
次に、「炉の施設の一部」と考えてみる。他県の事例となるが、富山市開ヶ丘孤谷III遺跡(第68図)では、中期中葉の住居跡から検出された石組炉に「土器片が敷き詰められており、炉床を形成すると考えられる」と報告されている。さらに、「効果は不明であるが、寒冷地の燃焼には適していたのかもしれない」と言及している¹²⁾。当遺跡における本炉跡は、炉石内の範囲と土器片の出土範囲が、平面的にはほぼ重なる。しかし、土器片は炉床面よりも下位で検出されており、炉床の一部とは考えにくい。

最後に、「炉の重複」という視点で考えてみる。石組炉に対して、土器片で構築された旧炉の存在を想定する。上層の土器片を取り除いた2次面の出土状況は、南東側の端部に深鉢を斜めに埋設し、埋設土器に接して土器片が敷かれている。日上市上の内遺跡第47号住居跡(第68図)で検出された土器埋設炉は、炉体土器の周囲に土器片が敷かれており、時期は「加曾利E 3式期」と報告されている¹⁷⁾。当遺跡における本炉跡も、土器片の出土状況が酷似しており、炉体土器の内面にわずかながら二次焼成の痕跡が認められることから、炉体土器を伴う土器敷きの炉が廃絶されたのち、石組炉が新設されたことと想定することが可能である。ただし、土層観察から明確な重複と捉えることは難しい。

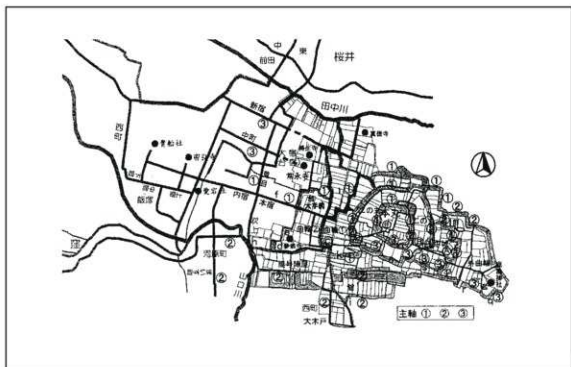
以上、3つのケースを想定してみたが、それぞれに検討を要する課題があり、断言することはできない。本炉跡の形態について、ここでは結論を出すことはできなかったが、今後の資料の増加を期待し、それを踏まえて再検討したい。

3 第1号道路跡と真壁城

第1号道路跡は、調査G区から確認されている。調査G区の現況は農道であり、第1号道路跡の確認範囲



第69図 真壁城跡と北田遺跡周辺地図
 (「桜川市(真壁地区)全図」に加筆、曲輪と遺構配置は「史跡真壁城跡Ⅰ」を参照)



第70図 慶長初年頃の真壁城と城下町の主軸方位
 (「戦国期真壁城と城下町の景観」より)

とほぼ重なるものと考えられる。この農道は真壁城の外曲輪跡に通じており、第1号道路跡は中世の道路の可能性があることは、本文中で既に述べている。

真壁城跡と当遺跡の位置関係は、真壁城外曲輪跡から約100m南下した地点に、当遺跡が所在する(第69図)。真壁城外曲輪跡の南虎口付近は、平成9・10年に発掘調査が行われている。調査では南虎口を形成する土塁跡が確認され、その土塁の間を通して城外に通じる「城道」の存在が推測されている。調査では道路跡は確認されなかったが、「土塁の内端溝」が「道路側溝」を兼ねていたと考え、「城道」の規模を想定している¹⁹⁾。前述したように、外曲輪跡の南虎口から当遺跡の調査G区に向かって、水田地帯を南下する直線の道が現在でも存在している。この道は、さらに調査G区を過ぎてクランク状に曲がり、県道石岡筑西線へと通じている。

当遺跡の所在する山尾地区は、城主である真壁氏に関連する寺社が数多く存在している。当遺跡から約250m南東には、真壁家の墓所と伝えられる「遍照院」があり、東に隣接する「五所駒滝神社」は、真壁氏の一族が草創したと伝えられている。当遺跡の南に隣接する地には、明治まで「光明寺」という寺院があり、「跡地からは14世紀から16世紀のかわらけや、武蔵型板碑の頭部残欠が見つかった」²⁰⁾ことから、当該寺院もまた真壁氏との関連がうかがわれる。真壁城外曲輪跡の調査報告や、真壁城と山尾地区の結びつきを考慮すれば、古地図では確認できなかったが、外曲輪跡の南虎口から山尾地区に延びる道は、中世以来のものであったと想定できる。

次に、第1号道路跡の時期について検証する。宇留野主税氏は、「真壁城と城下町の遺構や街路」を「主軸方位」から時期区分している²⁰⁾(第70図)。第1号道路跡が、現在使用されている農道と同じ主軸方位であったと仮定すれば、東へ8度傾いた南北主軸となり、外曲輪跡で確認されている「東西・南北の正方位に近い主軸(主軸②)」に近い軸方向を示すことになる。宇留野氏は、この主軸方位を持つ遺構の時期は、出土遺物から「16世紀後葉～末葉」としている。

発掘調査は期間が限られていたため、平面による記録が一部のみである。そのため、土層観察による記録が主体であり、規模や主軸方向等は明確でない。南北方向の土層観察から、道路の構築層は3層に大別され、3時期に区分されるものと考えられる。道路の構築層から抜き取りした資料は、層位ごとの取り上げは行っていない。時期は、出土土器から9世紀以降と考えられるが、土器は破片資料であり、道路という遺構の性格上、伴う遺物とは考えづらい。重複関係では、古墳時代の住居跡の覆土上面に構築されており、時期が限定できない第4号流路²¹⁾に掘り込まれている。

第1号道路跡の時期は、位置と方向から真壁城に通じる中世の道路の可能性はあるが、今回の調査では時期を限定することはできなかった。今後は古地図や文献資料を含めて、さらなる検討を加えていきたい。

4 小結

北田遺跡は、2回にわたる調査によって縄文時代中・後期と古墳時代後期から平安時代の集落跡が確認されている。今回の調査で縄文時代の集落跡からは、石組炉を有する堅穴住居跡が複数確認され、炉の形態の様相や石組炉の消長について、久慈川流域以北の北部や隣接する栃木県南部といった地域の様相と酷似することが確認できた。また、第1号道路跡については、真壁城に通じる中世の道路の可能性を提示できたが、考古学的な見地から立証することはできなかった。これについては、さらなる詳細な分析を進め、本道路跡と真壁城との関係をより明確にすることを、今後の課題としたい。

註

- 1) 黒澤秀雄「北田遺跡 主要地方道石岡下館線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団調査報告』第206集 2003年3月
- 2) 大川清・鈴木公雄・工業通商編『日本土器辞典』雄山閣 1996年12月
- 3) 出土状況が図示されているが、床面を掘り込む形で12の深縁は出土している。平面図からは、土器の口縁が全周している様子が読み取れる。原因も確認したが、報告書以上の記載はなく、覆土等は不明である。
- 4) 覆土が確認できたのは一部であり、土層観察による重複関係の確認は行われていない。また、報告者は第22号住居跡の時期について、「加曾利E1式期」としている。これらの事から第22・23号住居跡の重複関係については、出土土器から第23号住居跡が新しいと考えられる。
- 5) 鈴木美治「阿玉台期における壑穴住居跡の形態についての一考察」『年報3』茨城県教育財団 1984年3月
- 6) 鈴木素行・中村哲也・小松崎忠子・色川順子「茨城県における縄文時代中期後葉の屋内炉」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会 2005年10月
- 7) 鈴木氏は、註6文献で「石組炉」「土器片組炉」「土器埋設炉」において、廃絶時の「抜去」という視点で注意を促している。炉石・土器片・炉体土器が「完全に抜去された場合、地床炉と区別は難しく、報告書の記載から地床炉として集成せざるを得ない」と述べている。
また「抜去」という点で、石組炉の基本形態は、「周縁を石で囲った石囲炉」であり、「抜去」によって「炉石が全周しない炉跡」が存在すると考えている。本報告も鈴木氏の考えから、「炉石が全周しない炉跡」「炉石が全周する炉跡」両者を区別せず、広義の「石組炉」という呼称を使用し、そのなかには「石囲炉」が含まれるものと考えている。「土器片組炉」も同様に、「土器片囲炉」が基本形態であり、「抜去」によって「土器片が全周しない炉跡」が存在するものと考え、広義の「土器片組炉」を呼称として使用している。
- 8) 江原英「寺野東遺跡Ⅲ 小山市小山東部地区工業用地造成に伴う埋蔵文化財調査」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第250集 財団法人とらぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター 2001年3月
- 9) 川津法伸「主要地方道つくば古河線緊急地方法道路事業地内埋蔵文化財調査報告書 大楯B遺跡・釈迦寺遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第131集 1998年3月
- 10) a 川又清明・野田良直・吹野富美夫・浅野和久「宮後遺跡1 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第188集 2002年3月
b 和田清典・吹野富美夫・浅野和久・荒崎克一郎・駒澤悦郎「宮後遺跡2 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第240集 2005年3月
- 11) a 吉原作平「伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1 西ノ脇遺跡 前田村遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第87集 1994年3月
b 横堀孝徳「伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 前田村遺跡C・D・E区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第116集 1997年3月
c 吉原作平・宮崎修士「伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3 前田村遺跡D・F区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第127集 1997年9月
d 吹野富美夫・宮崎修士・柴田博行「伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4 前田村遺跡G・H・I区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第146集 1999年3月
e 小林孝・飯島一生「伊奈・谷和原丘陵部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書5 前田村遺跡J・K区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第147集 1999年3月
- 12) 鈴木氏は、註6文献で1軒の住居跡から炉が複数確認される場合、「炉の痕跡の累積」と「炉が組み合う併設」とが考えられ、「現実には累積と併設の別が困難な炉跡が多い」と指摘している。
- 13) 註6・註9 b)と同じ
- 14) 註10 c)と同じ
- 15) 金井安子「縄文土住まい 一炉の地理をめぐって」『青山考古』第14号 青山考古学会 1997年5月
- 16) 藤田富士夫・近藤彌子・平岡和夫・福山俊彰・開宮正光・松川由次・千葉孝之「富山市 関ヶ丘谷田遺跡 発掘調査報告書 県営加地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8)」『富山市埋蔵文化財調査報告』136 富山市教育委員会 2004年3月
- 17) 小川和博「上の内遺跡発掘調査報告書」『日立市文化財調査報告』第61集 日立市教育委員会 2002年3月
色川氏は、註6文献でこのような土器片散きの形態から、「複式炉」の石散きとの関連を推定している。
- 18) 黒龍象・宇留野主税・岩松和光「史跡真壁城跡発掘調査報告第1集 史跡真壁城跡1 一外輪輪南部の調査概要一」真壁町教育委員会 2004年3月
- 19) 寺崎大貴「中世真壁城下町の復元」『真壁の町並み一伝統的建造物群保存対策調査報告書一』栃川市教育委員会 2006年3月
- 20) 宇留野主税「戦国期真壁城と城下町の景観」『茨城県史研究』第92号 茨城県立歴史館 2008年3月
- 21) 第4号流路跡の土層が確認できた位置は、旧調査区で確認されている第1号流路跡が伸びている方向の延長線上にあり、両調査区にまたがる同一遺構の可能性もあるが、平面図による記録がないため、両遺構のつながりは確認されていない。そのため、別遺構と判断している。

参考文献

- ・日黒吉明「住居の炉」『縄文文化の研究』第8巻 社会・文化 雄山閣 1982年5月
- ・阿久津久「真壁城とその町割り」『歴史手帖』第10巻3号 名著出版 1982年3月

写 真 图 版



第11号住居跡出土土器



調査F区完掘状況



調査G区完掘状況

PL2



第24号住居跡
遺物出土状況



第25号住居跡
遺物出土状況



第25号住居跡
炉完掘状況

第26号住居跡
炉完掘状況



第27号住居跡
完掘状況



第27号住居跡
遺物出土状況



PL4



第28号住居跡
遺物出土状況



第29号住居跡
遺物出土状況



第29号住居跡
炉遺物出土状況(1)

第29号住居跡
炉遺物出土状況(2)



第30号住居跡
完掘状況



第30号住居跡
遺物出土状況



PL6



第30号住居跡
炉完掘状況



第2号遺物包含層
遺物出土状況



第2号遺物包含層
垂飾り出土状況



第3・4号住居跡
完掘状況



第11号住居跡
遺物出土状況(1)



第11号住居跡
遺物出土状況(2)

PL8



第11号住居跡
甕遺物出土状況



第20号住居跡
完掘状況



第20号住居跡
遺物出土状況



SI 30-20



SI 27-10



HG 2-59



HG 2-58



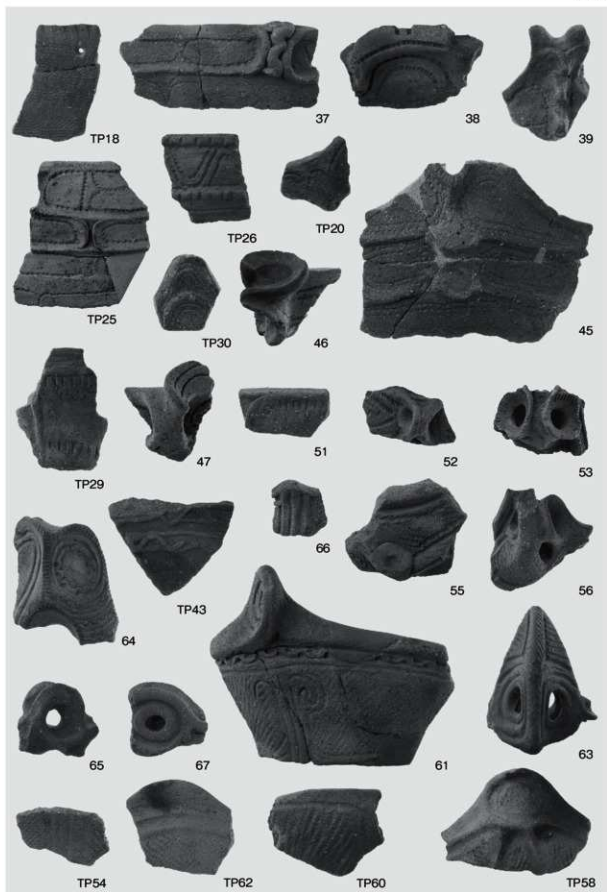
SK 91-33



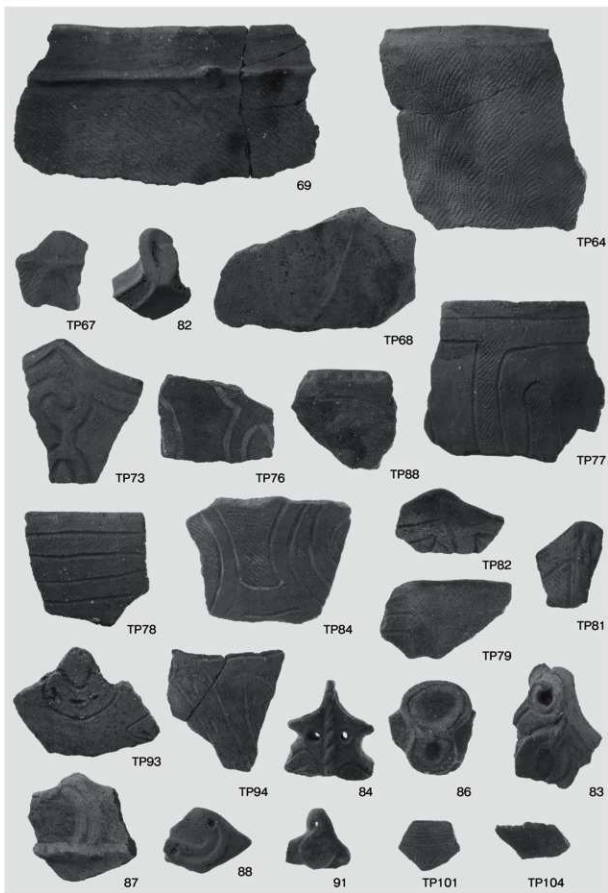
SI 24-2



第24·29·30号住居跡，第89·91号土坑出土土器



第2号遺物包含層出土土器(1)



第2号遺物包含層出土土器(2)



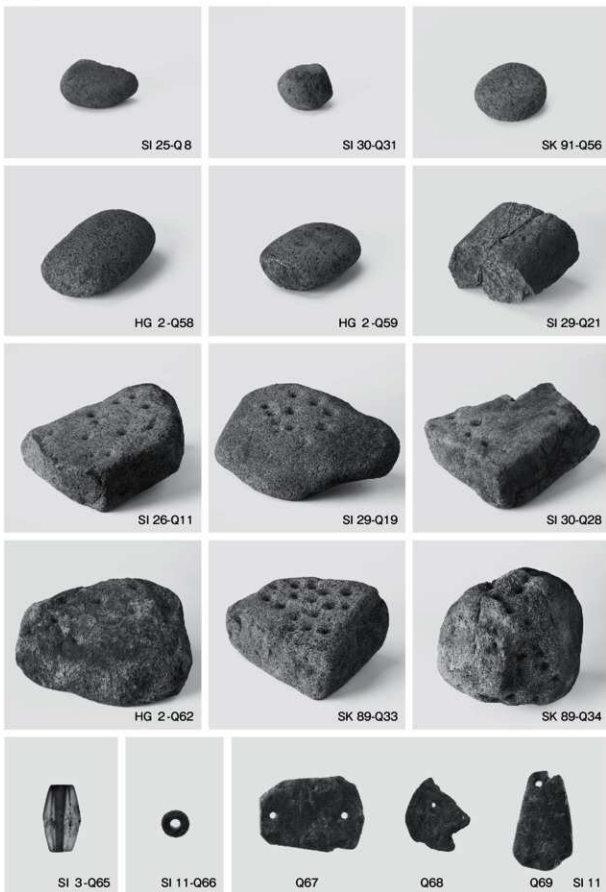




出土土器（蓋），出土土製品（土器片円盤・三角板状土製品），

出土石器（石錐・石鏃・打製石斧・砥石・磨製石斧），出土石製品（垂飾り）

PL16



出土石器（磨石・敲石・石皿・凹石），出土石製品（切子玉・白玉・双孔円板・剣形模造品カ）

抄 録

ふりがな	きただいせき							
書名	北田遺跡 2							
副書名	主要地方道石岡筑西線道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第331集							
著者名	小川貴行							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL. 029-225-6587							
発行日	2010(平成22)年3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
北田遺跡	茨城県桜川市真壁町 山尾字中坪767番地の 2ほか	08231 — 503045	36度 16分 07秒 36度 16分 18秒	140度 06分 43秒 140度 06分 31秒	44 ～ 46m	20071101 ～ 20071231	628㎡	主要地方道石岡筑西線道路整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北田遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡	7軒	縄文土器(蓋・深鉢・浅鉢・	石組炉の炉石や、石皿・凹石等の素材として花崗岩の使用が顕著である。		
			土坑	5基	両耳壺・ミニチュア土器・			
	遺物包含層	1か所	器台), 土製品(土器片円盤), 石器(尖頭器・石錐・石鏃・打製石斧・磨製石斧・石皿・磨石・蔽石・凹石・砥石), 石製品(石棒)					
その他	時期不明	古墳	竪穴住居跡	6軒	土師器(坏・椀・高坏・鉢・			
			土坑	1基	甕・甌), 石製品(切子玉)			
			流路跡	1条	石製模造品(白玉・双孔円板)			
その他	時期不明	その他	道路跡	1条	縄文土器(深鉢), 土師器			
			土坑	6基	(高台付椀・小皿・器台),			
			流路跡	1条	須恵器(高盤・盤), 土師質土器(内耳鍋), 陶器(灯明皿), 土製品(三角板状土製品), 石製品(垂飾り)			
要約	縄文時代の竪穴住居跡は、中期中葉から後期前葉の時期であり、そのうち5軒の住居跡は石組炉を有している。また道路跡は、位置と方向などから、真壁城跡外曲輪の虎口に向かう城道と想定される。							

茨城県教育財団文化財調査報告第331集

北 田 遺 跡 2

主要地方道石岡筑西線道路整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成22(2010)年3月19日 印刷

平成22(2010)年3月24日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL. 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社
〒311-4153 水戸市河和田町4433の33
TEL. 029-252-8481

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第331集

北田遺跡 2 遺構全体図



付図 北田遺跡遺構全体図 『茨城県教育財団文化財調査報告第331集』

